

# 研究紀要

第 11 号

2020

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は、1992（平成4）年に財団法人として発足し、以来、高速自動車道・国道・北陸新幹線に関連した遺跡の発掘調査を実施しております。平成8年10月には、新潟県埋蔵文化財センターが設立され、新潟県教育委員会の委託により当事業団が管理を行ってまいりました。

当事業団はセンター業務として、埋蔵文化財の調査・研究・整理・保存、情報収集、専門職員研修などのほか、発掘調査等で得られた情報を県民の皆様に還元する普及・啓発活動を行っております。「発掘調査報告会」「出土品展」「企画展」「新潟県埋蔵文化財センター講演会」のほか、発掘調査現場における「現地説明会」の開催、広報紙「歴文にいがた」の年4回発行、「まいぶん祭り」の開催などがその活動の代表的なものです。

近年、発掘調査の件数は横ばい傾向ですが、その一方でより高度な内容の調査と迅速な情報公開に基づいた発掘調査成果の発信が求められてきております。このため当事業団の職員は日々の業務に従事するかたわら、埋蔵文化財に携わる者としての社会的付託を意識し、自らの研鑽を積んでまいりました。その成果の一部を『研究紀要』として公表します。今後の調査・研究活動にご活用いただくとともに、皆様のご叱正をいただければ幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げるとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2020（令和2）年12月

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 稲 荷 善 之

## 目 次

阿賀野市における縄文時代晚期の大規模な河道について.....	1
	荒川 隆史
新潟県における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器について.....	15
	滝沢 規朗
新潟県における未発見城柵研究の現状と課題	
- 第46回古代城柵官衙遺跡検討会の補遺 - .....	47
	田中 祐樹
新潟県内の海揚がり陶磁器	
- 「日本海に沈んだ陶磁器」その後 - .....	61
	竹部 佑介・田海 義正
見附市本所出土丸木舟について.....	71
	小野 本敦

# 阿賀野市における縄文時代晚期の大規模な河道について

荒川 隆史

## 1 はじめに

越後平野における縄文時代の遺跡は、河道とともに発見される場合が多い。その最たる例が、晩期末業の新発田市青田遺跡〔荒川ほか2004〕である。青田遺跡は、標高マイナス1m～プラス1.6mの沖積低地に立地し、河道SD1420とその分流SD19の両岸に沿って南北210mにわたり集落が形成された。SD1420は幅25～51m、深度2.8～4.1mで、比較的規模の大きな河川であったと考えられる。一方、晩期前業の胎内市道下遺跡では幅4.4m、深さ1.5mの小規模河道に沿って堅穴建物からなる集落が形成されている〔折井ほか2007〕。

阿賀野市では、2009年・2014年・2015年に境塚遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代晚期の大規模な河道が見つかった〔荒川・村上ほか2012・2016、飯坂・金内ほか2018〕。この河道は『阿賀野川水害地形分類図説明書』〔大矢・加藤1984〕に示されていないもので、調査によって初めて明らかになったものである。また、この河道に関する周辺調査によって、阿賀野市石船戸遺跡の南側に大規模な河道が存在することが分かった。

本稿では、阿賀野市における縄文時代晚期の大規模な河道について報告し、河道に沿って形成される遺跡との関係について若干の検討を行う。

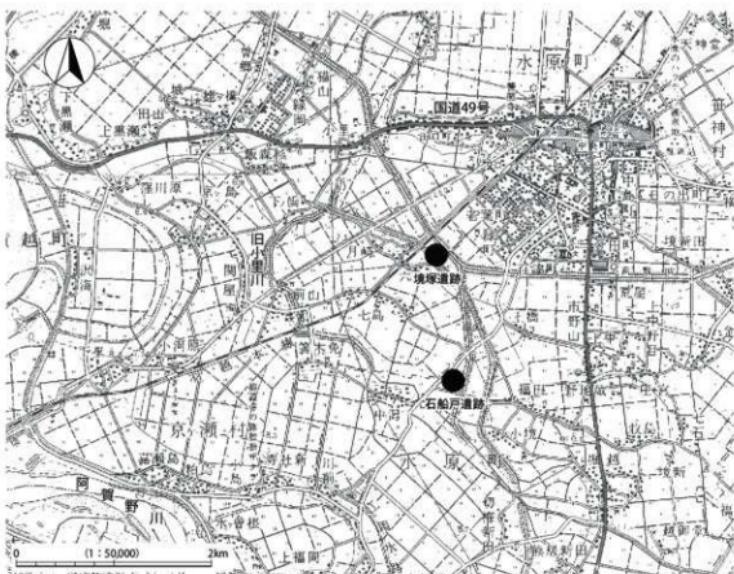
## 2 境塚遺跡の河道

### (1) 遺跡の概要

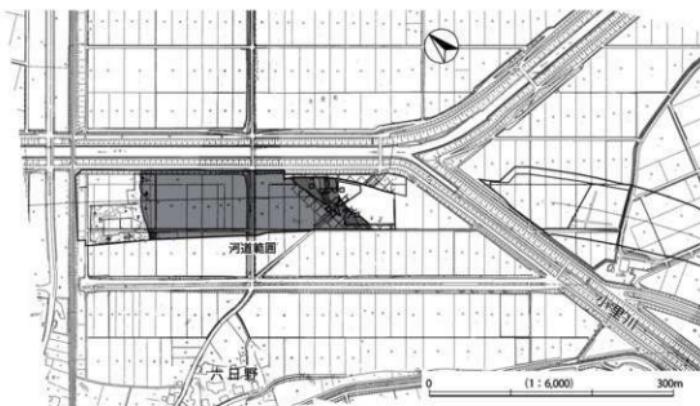
境塚遺跡は、阿賀野市百津字境塚に所在する（第1図）。遺跡は旧阿賀野川右岸に形成された標高7～7.6mの自然堤防上に立地する。国道49号阿賀野バイパス整備に伴い、東西約400m、南北約60～80mの範囲で発掘調査が行われた。その結果、中世の居館や町場を中心とする遺構群のほか、古代、古墳時代、縄文時代晚期の遺構・遺物が検出された。縄文時代晚期の遺構・遺物は、調査範囲西側の河道SR2444左岸と、調査範囲東側のSR1327右岸で見つかっている（第2図）。両河道は、安野川土手断面の観察から一連のものであることが分かり、幅約250mの旧阿賀野川河道と推定した〔荒川・村上ほか2012〕。

### (2) SR2444の層序

SR2444は南西～北東方向で長さ78mにわたり、深さ約4m（標高3.8m）である。河道内の土層は南東に向かって斜め下方に堆積し、堆積層の切り合いから大きく1～13層に分層される（第3図）。このうち、12・8・5・3層から縄文時代晩期末業の遺構や遺物が見つかった。12層と8層の間には無遺物の砂質シルトが厚く堆積し、河道変更も認められるため、12層を下層、8～3層を上層に区分されている。河床には硬い礫層が堆積し、この層理面までが河道形成範囲と考えられる。また、2層は3層を、1層は2層を大きく切り込んで堆積する。1層上面は基本土層IV層に覆われ、これを中世の遺構が掘り込んでいることから、1・2層は弥生時代～中世以前の堆積層と考えられる。こうした大きな切り込みは、埋積を経ながら繰り返し幾度も確認でき、河道が南東方向に移動しつつ縮小していくことが窺える。また、土層の多くが一定の層厚のまま斜位に堆積しているほか、地盤変動による数多くの噴砂によって変形していることが確認できる。こ

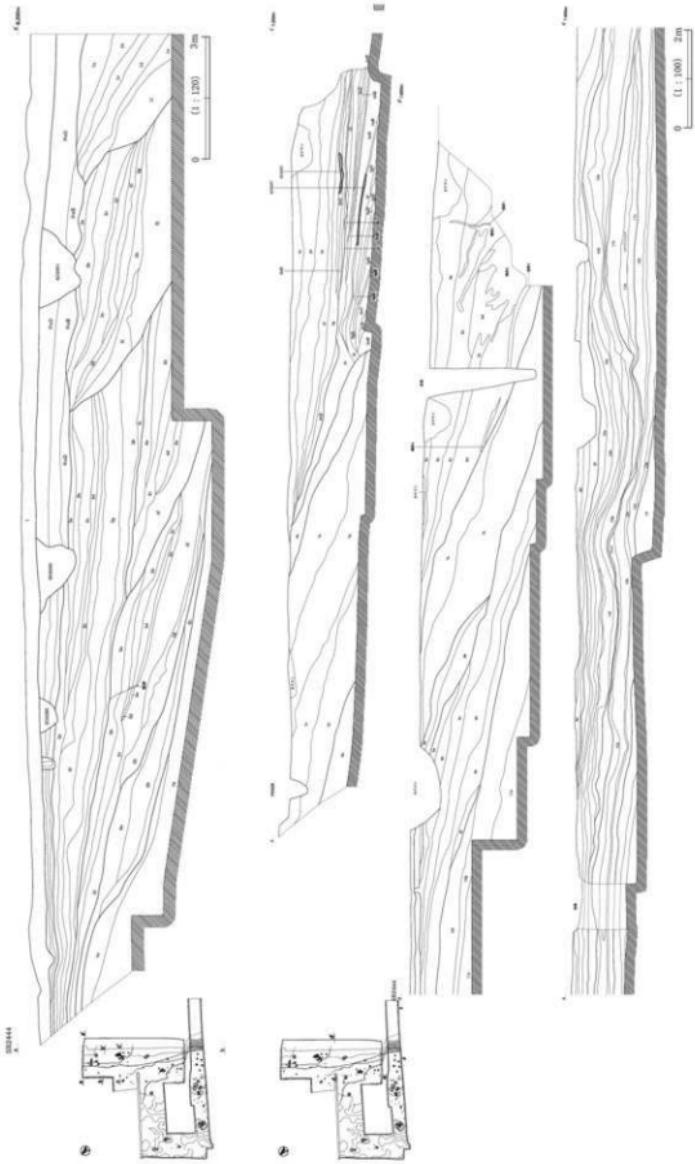


第1図 遺跡の位置(国土地理院発行 平成17年「新潟」平成9年「新津」1:50,000原図)



第2図 境塙遺跡の調査範囲と河道の範囲([荒川・村上ほか2012、飯坂・金内ほか2018]から作成)

これは、青田遺跡の河道 SD1420 と同様に、地震活動による地盤の挾曲変形を受けて、表層の地盤が変形する際に液状化を伴って堆積物の崩壊や小規模な地すべりが発生し、新たな流路が形成される過程を示している可能性が高い [高濱・ト部 2004]。なお、13 層より下にも、より古い河道堆積層が存在する可能性が高い。



第3図 沖縄遭跡の河道SR2444の断面図〔版・金内はか2018〕から抜粋)

### (3) SR2444 の縄文時代晩期の遺構と土器の編年的位置付け

SR2444 左岸の遺構は、南西側の標高約 7m の微高地に集中し、堅穴建物 1 棟、掘立柱建物 2 棟、土坑 9 基、炭化物集中範囲 8 か所、ピット 63 基が検出された。遺構の重複関係や覆土の特徴から、SK5743 を皮切りに 3 段階の変遷が想定され、このうちの 2 段階が遺構の主体と考えられている。SK5743 出土浅鉢（第 4 図 1）は、頭部無文帯を持ち、肩部の眼鏡状隆蒂文の直下に平行沈線文が施されるものである。鳥屋 1b 式と考えられるが、青田遺跡では鳥屋 2a 式古段階まで残る。他の遺構では遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

下層の遺構は、炭化物集中範囲を 12d 層で 5 か所、12b 層で 7 か所であり、いずれも標高 55 ~ 60m の河道斜面で検出された。12a 層から出土した壺（第 4 図 2）は、肩部が角張る器形で、頭部を主文様帶として交互綾杉文が施される。青田遺跡の分類〔荒川ほか 2004〕（以下、青田分類と呼ぶ。）の B1b 類であり、典型的な鳥屋 2a 式古段階のものである。

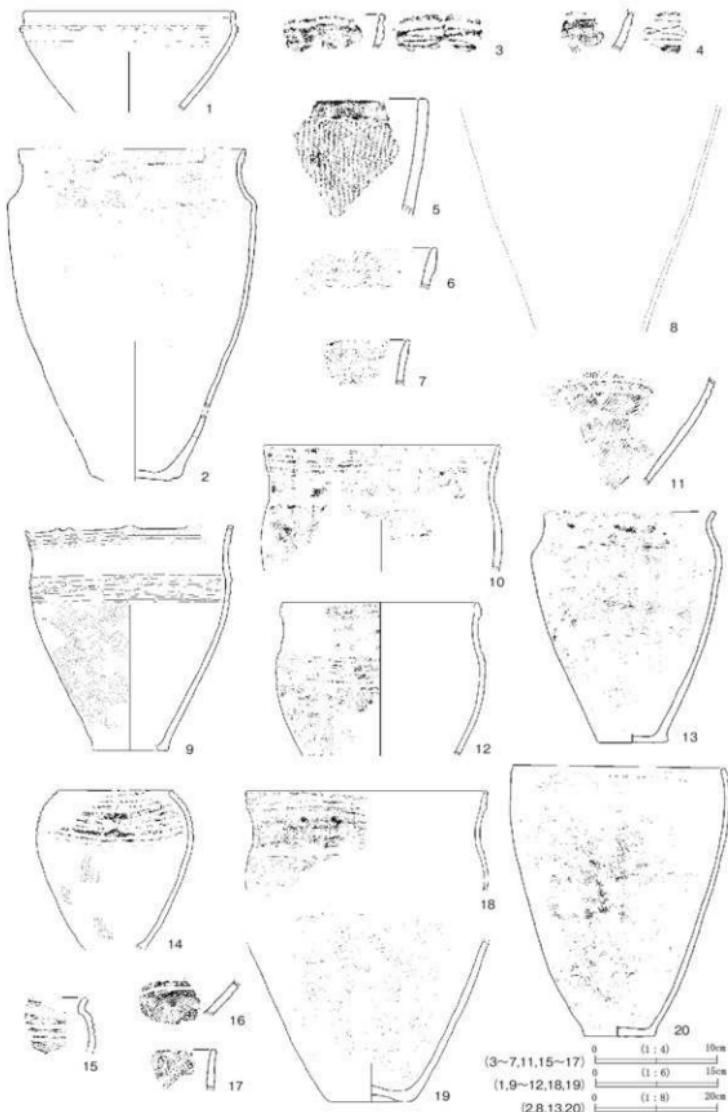
上層の遺構は、8a 層で炭化物集中範囲 3 か所、7b 層でピット 1 基、5e 層で炭化物集中範囲 14 か所、3h 層で炭化物集中範囲 9 か所、3a 層で炭化物集中範囲 15 か所・ピット 1 基である。8a 層の炭化物集中範囲や 7b 層のピットは、標高 68 ~ 69m の右岸～河道斜面上部で検出された。一方、5e 層の炭化物集中範囲 12 か所は標高 50 ~ 54m の河道斜面下部にまとまっており、低水路に近い場所に位置していたと推定される。さらに、3h 層の炭化物集中範囲 6 か所も同じ範囲で検出されており、同じ場所が繰り返し利用されていたことが分かる。3a 層の炭化物集中範囲は標高 62 ~ 70m の右岸～河道斜面上部で検出されたが、河道斜面下部は 2 層の切り込みによって残存せず、詳細は不明である。3h 層の SC5522 に含まれていた焼骨片は、サケ科を含む魚類が中心であることが分かった〔金井 2018〕。さらに、土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析では、C3 植物と海棲生物の中間的な組成が認められ、サケ・マス類の利用が推定されている〔田中 2018〕。

上層の土器を層位別に見ていくこととする（第 4 図）。8a 層出土浅鉢（3）は、体部から口縁部にかけて屈折する器形で、狭小な文様帶に浮線文が 1 条と 2 条で表現された青田分類 C1 類 b3 種であり、鳥屋 2b 式に位置付けられる。6a 層出土浅鉢（4）は、狭小な文様帶に網目状の浮線文が施される青田分類 C1 類 d2 種であり、鳥屋 2b 式である。

5e 層出土深鉢（5）は、縄文 LR の条が縱位になるよう施され、口縁部は丁寧にミガキが加えられる。条が縱位になる傾向は、鳥屋 2b 式新段階に認められる。同層で検出された SC5535 出土壺（6・7）は、ともに頭部無文で、弱いナデが施される。また、壺（8）は肩部の張りが弱く、条痕文が縱走する。

3h 層出土壺（9）は、肩部の張りや頭部の屈曲が弱い E3a 類で、肩部に網目状の浮線文 e2 種が施され、鳥屋 2b 式に位置付けられる。壺（10）は口縁部に平行沈線文が施される E3d 類で、頭肩境に段を持つ。鉢（11）の平行沈線文は、沈線手法で施されたものである<sup>11)</sup>。また、壺（12）は E3d 類、壺（13）は C3d 類で、ともに肩部には沈線手法で平行沈線文が施される。こうした沈線手法は、大洞 A' 式古段階が伴う鳥屋 2b 式新段階に認められるものである。

3a 層出土深鉢（14）は、体部上位に曲線的な変形工字文が施されるものである。文様は沈線手法で描かれ、三角形内の底辺に副線が加えられる。三角形同士の交点は連結せずに反転し、匹字部は認められない。こうした構図は、浅鉢に描かれていた青田分類の変形工字文 4a 類が深鉢に採用され、文様帶の拡大とともに多段化したとも解される。同層で検出された SC5510 出土鉢（15）は、肩部の平行沈線文下に変形工字文が施されるもので、交点は連結するが、匹字部は確認できない。浅鉢（16）は、沈線手法による平行沈線文が施される。壺（18）は、複合口縁及び肩部に縄文 R が施される青田分類 C3d 類である。頭



第4図 境塚遺跡SR2444出土土器([飯坂・全内ほか2018]から作成)

部のミガキが弱いことや頸肩境に段を有する点は、(10・12) と共通する。深鉢 (20) は、複合口縁及び体部に細密な条痕文が施される青田分類 A7d 類である。窓ないし深鉢 (19) は繩紋 LR が施されるもので、底部下端が丸く取まる点が特徴である。(17) は深鉢ないし壺の可能性がある。

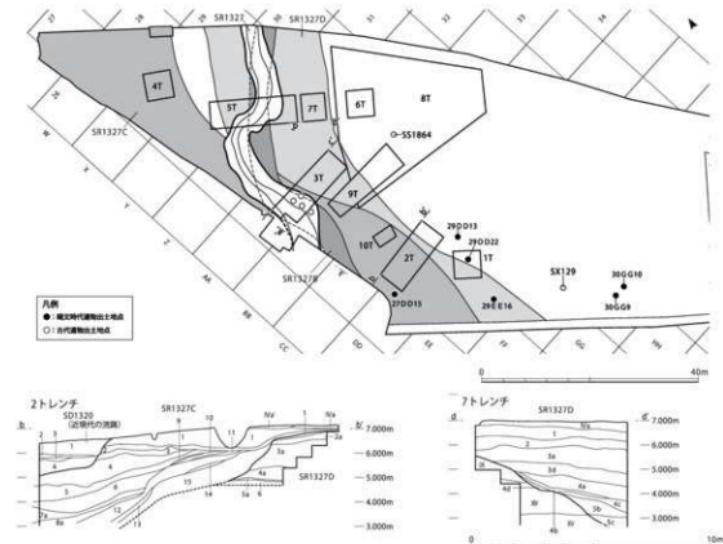
弥生時代前期の縦立遺跡 1b・1c 期 [渡邊 1998] の深鉢や壺にも変形工字文が多用されるが、(14) の文様帯は体部最大径より上部に限られるのに対し、縦立遺跡では体部最大径よりも下まで文様帯が広がるものが多く、型式的な新古と捉えることができる。さらに、(14・15) の沈線幅は縦立遺跡に比べ狭く浅い特徴が認められる。以上から、3a 層出土土器は変形工字文が施される深鉢の出現、鳥屋 2a 式の壺の残存と浮線文土器の欠落から、青田遺跡 B9～B7 層期に並行する縦立 1a 期 [荒川 2004a] と考えられる。

#### (4) SR2444 の層年代

SR2444 の川底からは、大小の自然木 83 点が出土した。これらには土層堆積状況から上層のうち 3 層のものは含まないと判断できる。この自然木 5 樹種 15 点について年輪年代解析が行われ、このうち 5 点について年輪酸素同位体比分析が行われた [木村ほか 2018]。その結果、ニレ属 1 点は樹皮が付着しており、枯死年が BC556 と分かった。他は枯死年が不明なもの、年輪表層の層年代はクリ 1 点が BC857、コナラ属 3 点が BC594、BC549、BC526 であった。小林謙一氏による土器型式の炭素 14 年代 [小林 2017] を参考にすると、BC857 は大洞 C2 式、BC594・BC556・BC549 は大洞 A 式に含まれる。BC526 の土器型式は、青田遺跡下層の終わり頃の鳥屋 2a 式新段階に当たり [木村ほか 2012、荒川 2019]、境塚遺跡下層に対応する。以上から、SR2444 は晩期中葉から機能していた可能性がある。

#### (5) SRI327 の上層と柵文時代晚期の遺構・遺物

SRI327 は、SR2444 から東方約 250m 地点にあり、中世の遺構確認面で検出された (第 5 図)。幅 5.9m、



第 5 図 境塚遺跡の河道 SRI327 の平・断面図 ([荒川・村上ほか 2012] から抜粋)

深さ52cmであり、中世には機能していなかったものである。この周辺を深掘りして確認したところ、西側に傾斜する河道斜面が検出された。深さは4m以上で標高2.7mにまで達するが、底面は確認されていない。また、土層の切り込みも2回確認され、SR1327D → C → Bの河道変遷が明らかになった。このうち、SR1327D・Cから縄文時代後葉の土器片が、SR1327Bから古代の須恵器・土師器が出土した。また、SR1327Dから東に約7mの地点では、磨石類3点がまとまって出土したSS1861が見つかり、晚期後葉のデボの可能性がある。遺構や遺物は少ないものの、SR1327Dの右岸でも縄文時代晚期における活動痕跡を確認できる。

### 3 石船戸遺跡の河道

#### (1) 遺跡の概要

石船戸遺跡は、阿賀野市堀越字石船戸ほかに所在し、現在の小里川排水路左岸に位置する（第1図）。県営灌水防除事業に伴い、2012～2014年に南北約300m、東西約15mの範囲で発掘調査が行われた。その結果、上層では古代・中世の掘立柱建物や井戸などの遺構と遺物、下層では縄文時代晚期初頭から前葉を主体とする遺構や遺物が検出された〔古澤ほか2018〕。下層は堅穴建物15棟、掘立柱建物7棟、土坑38基、埋設土器38基などからなる集落である。基本層序はI～VII層からなる（第6図）。遺物包含層IV d層は遺構の多い中央部で標高約8mにあるが、北端では標高約7m、南端では標高約7.5mに下がっている。また、北・南端は遺構が希薄で、斜面廃棄場としての機能が想定されている。このほか、各所に地震による変形や噴砂が確認されている。

#### (2) 遺跡南側の河道

境塚遺跡で見つかった大規模な河道の情報を得るために周辺の調査を行っていたところ、2016年10月に石船戸遺跡脇で行われていた小里川改修工事の土手断面において大規模な河道があることを確認した。そこで、工事を行っていた株式会社小林組の許可を得て、同年12月に土層観察と断面図の作成を行った。

河道は、遺跡調査範囲南側の遺構希薄域から斜面が始まり、長さ96m以上にわたって形成されている（第7・8図）。対岸の斜面は確認できない。深さは約4m、河床最深部は標高3.1mである。層序をI～V層、河道堆積層を1～7層に分けた。しかし、調査時間に限りがあり、大まかな分層にならざるを得なかった。

I層 工事用道路の盛土。

II層 表土。

III層 黄橙色シルト層に礫が多量に混在する。

IV層 大小の礫と砂が混在する。

V層 青灰色砂層。

1層 黄橙色シルト。

2層 黄橙色シルトで、少量の遺物や炭化物を含む。

3層 黄橙色シルト。

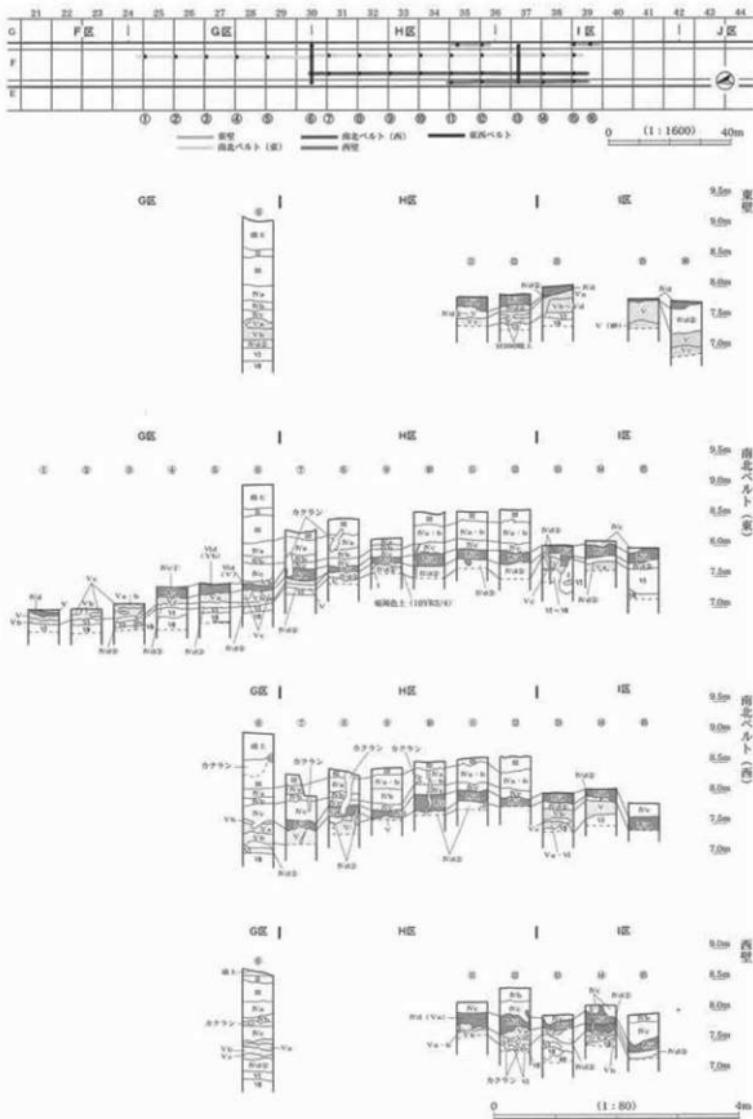
4層 青灰色シルトで、縄文土器や石器、焼骨、多量の炭化物を含む。

5層 青灰色シルト。

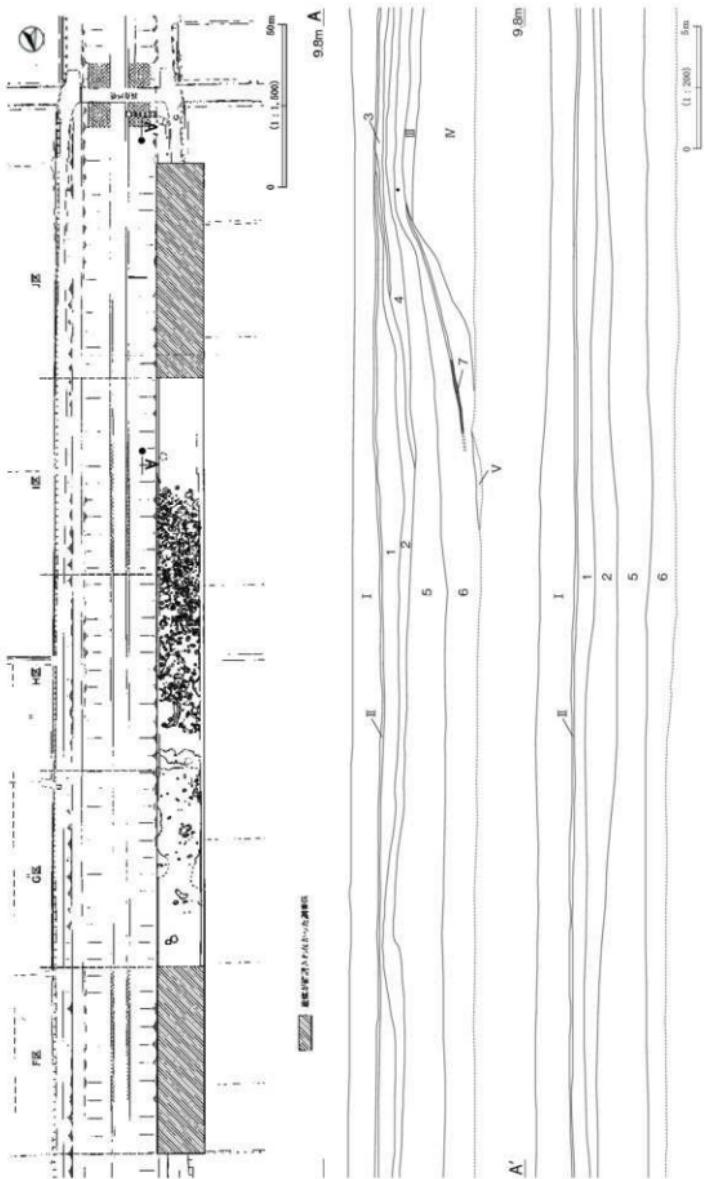
6層 暗青灰色シルトで、褐色シルトや青灰色シルトなどが互層となる。縄文土器を含む。

7層 6層中に堆積する青灰色シルトで、下方の長さ約3mの範囲に多量のクリ果皮が集積する。

III・IV層は、石船戸遺跡のV層以下に相当するものと考えられる。河道堆積層のうち2・4・6層は遺物包含層の可能性が高い。これらが石船戸遺跡の遺物包含層IV d層から派生したものか、他層につながる



第6図 石船戸遺跡の層序([古澤ほか2018]から抜粋)



第7図 石船戸遺跡の下層遺構平面図と河通断面図(平面図は[古澤ほか2018]から抜粋・加筆)

ものかは断定が困難である。また、7層はクリ果皮以外の植物遺体を含まないことから、クリ果皮の廃棄層と考えられる。クリ果皮は幅3.0~3.5cmのものを主体とし、丸い形状を保つものや半分に割れたものが多い（第8図7・8）。こうした特徴から、青田遺跡で出土した果皮の側面や底部の一部のみを切り開いて子葉を取り出したもの〔荒川2017〕と同様の可能性が高い。

河道堆積層は80m以上にわたってほぼ水平に堆積しており、土層の切り込みは確認できない。この土層断面が河道に対してどのような角度に位置するかは分からぬが、安定した堆積環境であったと言えよう。

### （3）河道の暦年代

7層出土クリ果皮について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定が行われた<sup>2)</sup>。その結果、 $2\sigma$ 暦年代範囲で1260-1119 cal BCとの結果が得られた（第1・2表）。この暦年代は、〔小林2017〕を参考にすると大洞B式～BC式に当たり、石船戸遺跡下層の時期と合致する。したがって、石船戸遺跡の下層集落は大規模な河道に沿って形成されていたことが明らかになった。また、南端の遺構希望域は河道に向かって地盤が下がっていたことを示していよう。

第1表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-28313	遺跡名：石船戸遺跡 遺構：河川跡 層位：クリ廃棄層	種類：種実（クリ外果皮） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）

第2表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-28313	-26.54 $\pm$ 0.14	2968 $\pm$ 20	2970 $\pm$ 20	1222-1188 cal BC (32.0%) 1181-1158 cal BC (19.5%) 1146-1129 cal BC (16.7%)	1260-1119 cal BC (95.4%)

## 4 考察

### （1）河道の推定路

境塚遺跡と石船戸遺跡で見つかった大規模な河道は、いずれも縄文晩期に形成されたものである。時期は境塚遺跡が晩期中葉から、石船戸遺跡が晩期前葉から異なるものの、両者は約1kmしか離れていないことや、幅100m以上の大規模河道であることから、同一の河道の可能性がある。

この河道は、〔阿賀野川水害地形分類図説明書〕〔大矢・加藤1984〕に該当するものが無いものの、荒木繁雄氏がボーリング調査結果からほぼ同じ位置に旧河道が存在することを推定している（第9図）〔荒木1977〕。そのルートは、阿賀野市百津から下条町、山口まで水原市街地の南側を弓なりにカーブするものである。この推定河道の南端は境塚遺跡の河道と一致し、規模や方向から両者が同一のものである可能性が高い。

以上を参考に、石船戸遺跡から境塚遺跡を経由して山口に至る河道推定路を復元してみた（第10図）。石船戸遺跡は河道の右岸に、境塚遺跡は左岸に立地することとなる。また、水原市街地が立地する百津～山口の自然堤防は、この河道によって形成された可能性を見出すことができる。

### （2）縄文集落と河道

越後平野北部では、縄文集落と河道との密接な関係を示す遺跡が多数見つかっている。村上市中部北遺跡は荒川右岸に位置する中期後葉～後期前葉の遺跡であり〔石川ほか2008〕、海退後の沖積地の利用を示す。小規模河道沿いに形成された自然堤防上に少数の遺構が分布する。土器はごくわずかで、石器は石錘や石鎌が



1 河道全景(南から)



2 河道斜面(東から)



3 河道斜面アップ(東から)



4 2層アップ(東から)



5 7層アップ(東から)



6 7層クリ果皮集積のアップ(東から)

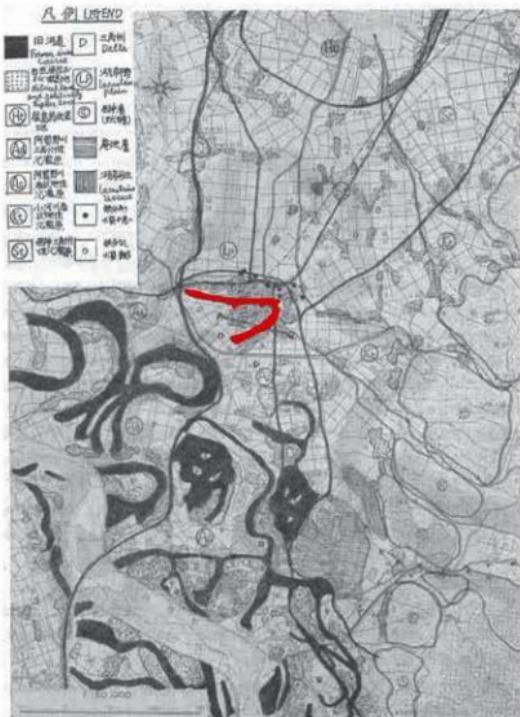


7 7層出土クリ果皮

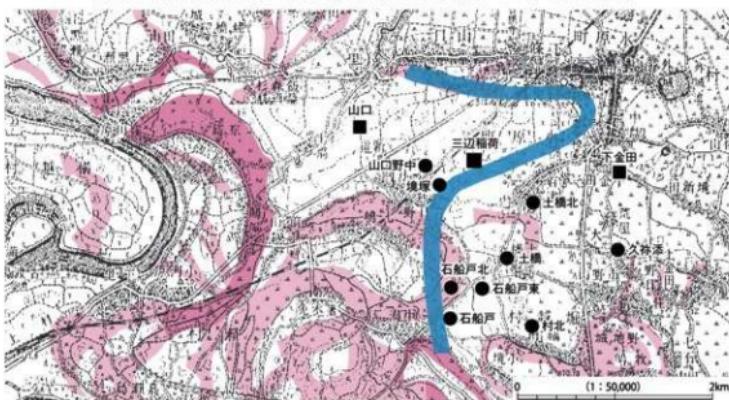


8 7層出土クリ果皮のアップ

第8図 石船戸遺跡南側の河道写真



第9図 阿賀野市百津周辺の旧河道推定図(赤色範囲、[荒木1977]から抜粋・加筆)



第10図 旧河道推定位置と遺跡位置(青色が縦文時代晩期、赤色は大矢-加藤[1984]による旧河道。大日本帝国陸地測量部発行 大正8年「新潟」「新発田」「新津」1:50,000原図)

主体であり、狩猟や漁撈を目的とする短期集落と考えられる。胎内市江添遺跡は小規模河道に沿う微高地に営まれた後期前業～中業の集落である〔折井ほか2005〕。堅穴建物の可能性がある遺構や、柱穴・土坑が多数検出された。遺物は土器がやや多いものの、石器は少なめであることから、短期的な集落が繰り返し形成されたものと考えられる。胎内市野地遺跡は胎内川右岸にある後期後半から晩期前半の大規模集落で、標高約8mの自然堤防末端の微高地に立地する〔渡邊ほか2009、田海ほか2013〕。遺跡南端には南側に傾斜する河道斜面があり、堅果類廐棄層を含む堆積層の派生状況から、遺跡は中～大規模の河道に沿うものと考えられる。掘立柱建物1棟、平地住居1棟、土坑墓4基、土坑46基などの遺構と、コンテナ150箱以上の土器や漆製品などを見つかっている。クルミ・クリ・トチの剥かれた果皮も多量に出土した。木柱は28点出土し、このうちクリ材は82%を占める。胎内市道下遺跡は標高9mに立地する晚期前業の集落である〔折井ほか2007〕。小規模河道に沿って堅穴建物や土坑が多く検出され、環状集落の可能性が指摘されている。遺物は少ない。胎内市昼塚遺跡は標高約7mの頸状地先端の自然堤防上に位置する晚期前業の短期間に営まれた集落である〔折井ほか2005・2006〕。小規模河道に沿って、掘立柱建物9棟と多数の土坑が検出されている。木柱は28点のうちクリ材は1点である。胎内市道端遺跡は氾濫原近くに立地する晚期前業の小規模集落で、遺物・遺構は極めて少ない〔渡邊ほか2003〕。野地遺跡と道下・昼塚・道端遺跡は同時期に形成された遺跡群である。集落規模や継続期間が異なり、集落動態を知るうえで重要である。新発田市青田遺跡は胎内川と加治川の中間にある旧紫雲寺渕（塩津渕）の湖底から見つかった遺跡であり、大規模河道の両岸に営まれた大規模集落である〔荒川ほか2004〕。遺構・遺物が多い。以上から、中期末から晩期をとおして、小・中規模集落は小規模河道に沿って見つかるケースが多い。また、後期後半から晩期の大規模集落は、大規模河道に沿っていることが特徴である。

石船戸遺跡は晚期前業の大規模集落であり、大規模河道に沿って形成される点は越後平野北部の様相と共通する。阿賀野川右岸の平野部においても越後平野北部と同様の集落形成が行われていたことを示す。一方、境塚遺跡は石器がほとんど出土しない小規模集落であるが、大規模河道に沿って見つかったことは重要である。すなわち、大規模河道では大規模集落を中心として、小規模集落も展開していた可能性を示唆する。境塚遺跡の西側には境塚遺跡下層と並行する山口野中遺跡〔村上ほか2015〕が隣接し、遺構や石器組成などから中規模集落に位置づけられる。両遺跡は補完関係にあることは明らかである。こうした状況は、野地遺跡と道下・昼塚・道端遺跡のような大・中・小規模集落のセット関係が境塚遺跡周辺にも成立していたことを想起させる。山口野中遺跡は境塚遺跡上層の鳥屋2b式～大洞A'式が欠落するため、別所に中規模遺跡が形成されている可能性もある。

石船戸遺跡と境塚遺跡が同じ河道沿いにあったならば、晩期全般にわたり大規模集落が同一の河道に沿って形成され続けていた可能性がある。さらに、境塚遺跡の北側には弥生時代前期の三辺稲荷遺跡〔古澤ほか2011〕があり、同じ河道に沿う可能性が高い（第10図）。弥生前期～中期前業の阿賀野市山口遺跡〔荒谷ほか2010〕も河道に沿って形成されており、弥生時代における集落と河道との関係も検討する必要がある。

集落と密接な関係を持つ河道は、集落の盛衰にも影響を及ぼす。青田遺跡では河道の埋積が進み、河川としての機能が低下したことが集落の廃絶の一因と考えられる〔荒川2004b〕。石船戸遺跡の河道の土層を見ると、晩期包含層である2層は地表下60cm程度まで堆積しており、深さ約4mあった河道がかなり浅くなっていたことが分かる。こうした河道の埋積が石船戸遺跡の廃絶につながったことも十分に考えられる。

## 5 おわりに

境塚遺跡における大規模河道の土器型式を検討し、石船戸遺跡の大規模河道の存在を明らかにした。そ

して、両遺跡の河道が同一のものとして推論を進め、大規模河道に沿って晩期前葉から後葉にかけて大規模集落が形成され、周辺には中・小規模集落が存在する可能性を指摘した。こうした集落形成や移動を補強するためには、建築材および食料となるクリ材の循環利用の検討が不可欠と考える〔荒川2018〕。境塚遺跡の河道からは成長速度の速いクリ材が出土しており〔木村ほか2018〕、周辺に人為的なクリ材が形成されていた可能性もある。今後は青田遺跡の集落形成モデルを援用し、両遺跡の検討を進めていきたい。

本稿を作成するにあたり、木村勝彦氏、古澤妥史氏、村上章久氏・高橋均氏、石橋夏樹氏、金内元氏から多くの御教示や調査への御協力をいただきました。末筆ながら記してお礼申し上げます。

## 註

- 1) 第4回 11・14～17は、〔飯坂・金内ほか2018〕の土器実測図の類似などを変更し、掲載した。
- 2) 分析は、阿賀野市燕本遺跡の科学分析と併せて株式会社パレオ・ラボが行った。方法は、〔株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤ほか2018〕に準ずる。

## 引用参考文献

- 阿賀野市教育委員会 2018 「石船戸遺跡」  
荒川隆史 2004a 「青田遺跡における縄文時代晚期終末の土器編年」「青田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2004b 「青田遺跡の集落と生業」「青田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2017 「縄文時代におけるクリ果実の剥き方と保存方法について」『研究紀要』第9号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史 2018 「北陸の縄文晚期社会と社会組織—掘立柱建物集落の形成とクリ材利用からの視点—」「季刊考古学・別冊 25「亀ヶ岡文化」論の再構築」雄山閣  
荒川隆史 2019 「年輪年代」「新潟県の考古学3」「新潟県考古学会」  
荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉ほか 2004 「青田遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史・村上彰久ほか 2012 「境塚遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒川隆史・村上彰久ほか 2016 「境塚遺跡Ⅱ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
荒木繁雄 1997 「遺跡の地理的環境と周辺の遺跡」「水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書」水原町教育委員会  
荒谷伸郎ほか 2010 「山口遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
飯坂盛泰・金内元ほか 2018 「境塚遺跡Ⅲ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
石川智記ほか 2008 「中部北遺跡・桜林遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
大矢雅彦・加藤泰彦 1984 「阿賀野川水害地形分類図説明書」建設省北陸地方整備局阿賀野川工事事務所  
折井 敦ほか 2005 「『縄文遺跡』『江添遺跡』」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
折井 敦ほか 2006 「『境塚遺跡Ⅰ』」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
折井 敦ほか 2007 「『道下遺跡』」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
金井慎司 2018 「骨同定」「境塚遺跡Ⅲ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定研究グループ 伊藤茂ほか 2018 「放射性炭素年代測定」「無木遺跡」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
木村勝彦・荒川隆史・中塙武 2012 「鳥海山の神代杉による縄文晩期をカバーする年輪酸素同位体比の物差しの作成と実際の適用例」「日本植生史学会大会第 27 回公演要旨集」日本植生史学会  
木村勝彦・廣野友哉・李 貞・中塙 武 2018 「年輪酸素同位体比分析による境塚遺跡出土井戸材及び自然木の樹年代決定」「境塚遺跡Ⅲ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
小林謙一 2017 「縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—」同成社  
高瀬信行・ト部厚志 2004 「青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」「青田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
田中義文 2018 「炭素・窒素安定同位体分析」「境塚遺跡Ⅲ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化調査事業団  
田海義正ほか 2013 「野地遺跡Ⅱ」「新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
古澤妥史ほか 2011 「三辺稲荷遺跡」「(出生時代編)」「阿賀野市教育委員会  
古澤妥史ほか 2018 「石船戸遺跡」「阿賀野市教育委員会  
渡邊朋和 1998 「繕立遺跡 B 地区出土土器 (2) 弥生土器」「黒崎町史資料編一原始・古代・中世」黒崎町  
渡邊裕之ほか 2003 「道端遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
渡邊裕之ほか 2009 「野地遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 新潟県における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器について

滝 沢 規 朗

## 1 はじめに

古代では、越後は北陸道、信濃は東山道に分断されつつも、上越地域と長野県北部の北信地域は強く影響を与える。関係性を持ち続けたとされる。このこともあって平成28（2016）年地方史研究協議会の第67回大会において「『境』と『間』の地方史－信越国境の歴史像－」と題し、その密接な関係性がテーマとなり、様々な研究成果が提示された。筆者は事務局からの依頼により、問題提起として「弥生・古墳時代の土器の移動－上越と北信の状況」と題し、わずか4頁の拙文であるが弥生時代中期中葉～古墳時代前期の上越と北信の交流の様相を提示した〔滝沢2016〕。主に先学の研究成果をもとに、最別時期毎の動向を示した後、北陸以西から北信への日本海ルートによるモノの流れが重視された時期は信越の交流が頻繁となるが、定型化した大型古墳が築造される時期に入ると日本海側の文物の流れがやや低調になることに伴い、両者の交流は質的に変化したと想定した。

これまでの研究成果で、弥生時代中期中葉から信濃・栗林式土器が越後に広範囲に及ぶが〔並沢2009〕、弥生時代後期～古墳時代前期の早い段階では、越後では信濃の土器が希薄になる一方で北陸東部系土器は信濃の北部に面的に広がる。弥生時代後期～古墳時代前期初頭では信濃の北陸系土器について、越後側〔坂井1984、川村1996a〕から、信濃側から集成や系統の検討が行われており〔桐原1959、並沢1988、千野1993、前島1993など〕、その成果を筆者なりに解釈したものである。

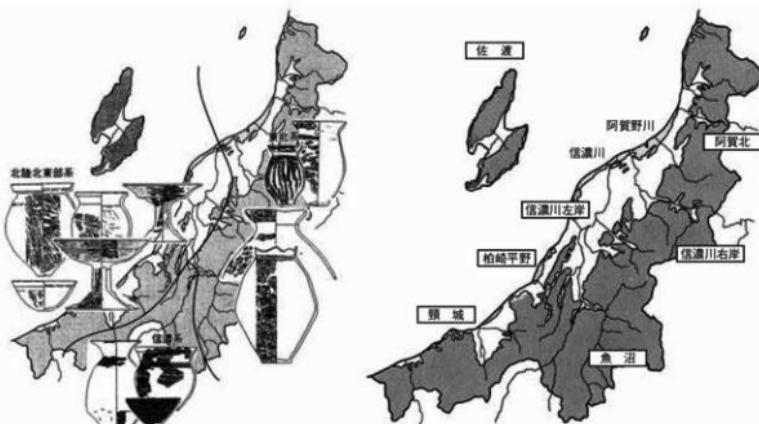
一方で、弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器については、信濃側からその存在を指摘されたもの〔桐原1980など〕、各報告書等での指摘〔滝沢1994、相田2014など〕や信濃の影響を指摘する論考〔春日2001〕はあっても、検討の基礎となる集成が進んでいない。そこで本稿では、新潟県内における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器の状況を概観し、土器から信越の交流の一端を垣間見ることにしたい。

## 2 対象とする地域や時期等

### （1）対象地域

これまでの発掘調査成果から、新潟県でも頸城平野を越えた山間部（上越市中郷区：旧中郷村と妙高市の山間部：旧妙高村・妙高高原町）、魚沼地域でも信濃川流域の十日町市・津南町を除く地域とした。頸城山間部は上越市龍峰遺跡〔中郷村教委2000〕、妙高市小野沢西遺跡〔新潟県教委・埋文事業団2004〕などでは弥生時代後期は信濃系土器が主体で、信濃系土器分布図とされる〔並沢浩2004〕。後続する古墳時代も妙高市大洞原C遺跡〔新潟県教委・埋文事業団1997〕や上記の龍峰遺跡・小野沢西遺跡などでは信濃系土器が色濃く分布する。頸城南部の山間部は、引き続き検討の余地は残すが、大きさは北信地域と同様の土器様相を呈する可能性があるため本章では除外し、北陸系の伝播ルートを検討するため稿を改めたい。

また、魚沼地域は大きく信濃川流域と魚野川流域で土器様相が異なり、弥生後期は魚野川流域で東北系が主体となるが、信濃川流域は比較的安定して信濃の影響を受け、5期に信濃系の影響下の中で外來系である北陸系や東海系が少量入ってくるとの指摘がある〔安立2005〕。古墳時代とした5期前後は別途検討が必要であるが、弥生後期において頸城山間部から魚沼地域は信濃系土器分布図と捉えた（第1図）。



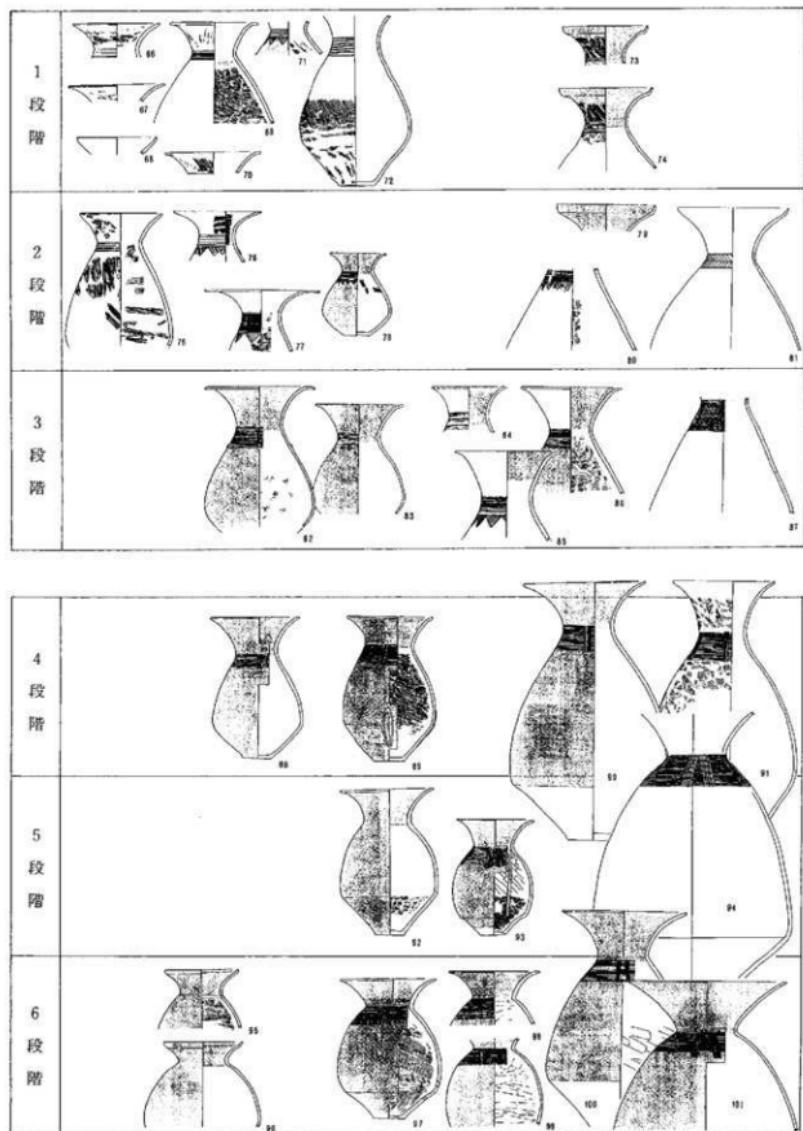
第1図 新潟県における弥生時代後期後半の土器の地域色と地域区分(土器の地域色は滝沢2009bから)

## (2) 時期区分

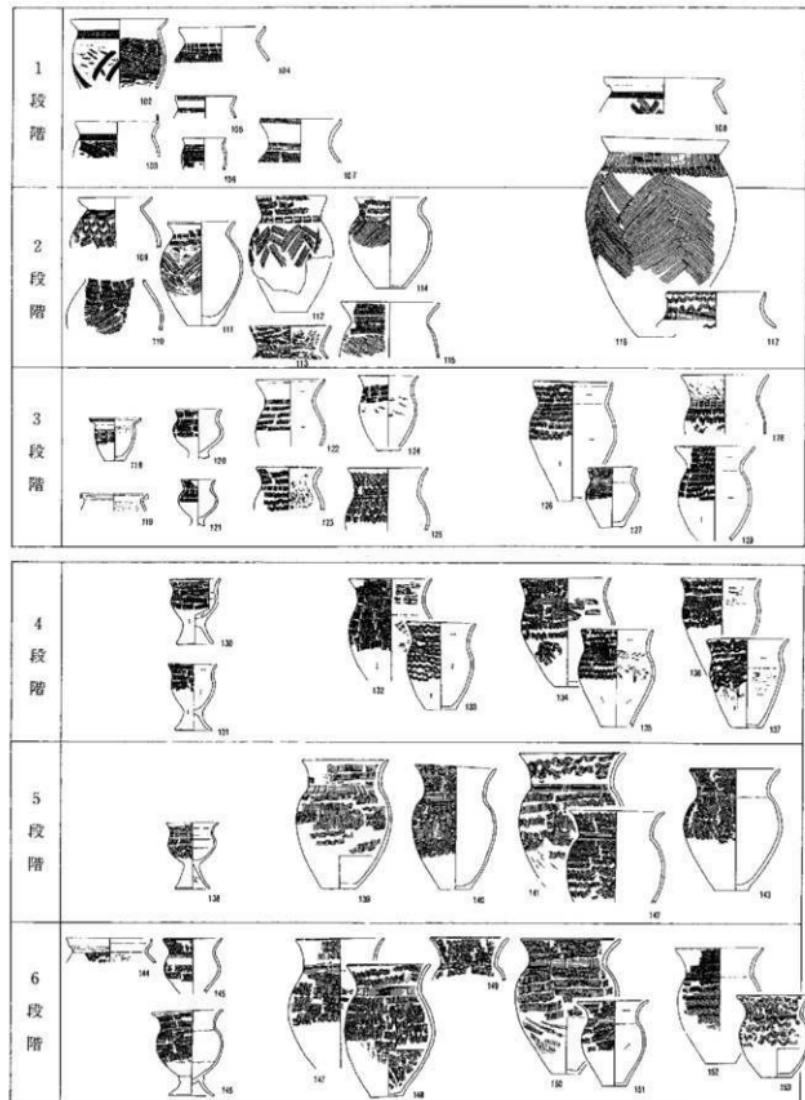
以下では断りがない限り、いわゆる新潟シンポ編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会1993〕で示すこととする。同編年は、北陸の南加賀・漆町遺跡の編年〔田嶋1986〕で示された群を期に置き換えたもので、東海・廻間編年〔赤坂1990〕とともに広域編年として使用されている。1993年段階では廻間編年はじめ、他地域編年との併行関係について十分な議論が行われたとは言い難く、新潟シンポ編年設定後に田嶋明人氏が併行関係を追求している〔田嶋2008・2009など〕。

新潟県の土器編年、器種分類は、筆者の考え方で示す〔滝沢2010b・2012a・2019など〕。一方で、信濃系の土器編年等は充実した研究の蓄積〔篠沢1970、青木1984、千野1989など〕がある中で、弥生時代後期～古墳時代前期の幅広い時期を対象とした本稿との整合性を図るために、報告書で詳細な検討が行われている青木一男氏の分類や時期比定〔青木一1997・1998・1999〕を主に用いる(第2～4図など)。青木一男氏は、弥生時代後期～古墳時代前期を6期区分し、それぞれ各期を段階・様相として区分する。様式名としては、1期1～2段階を吉田式、1期3～3期6段階までを箱清水式、4期を御屋敷式とし、外来系土器により在地の土器様相が変質した5・6期は様式名を与えていない〔青木1998〕。その後、仮として様式名称を変更しているが、ここでは青木1998までの様式名称を用いる<sup>13)</sup>。

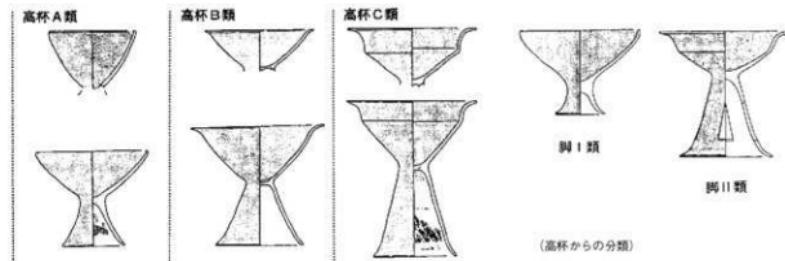
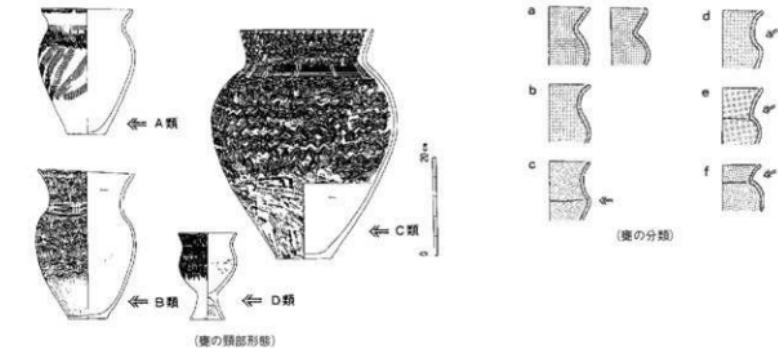
北陸系と信濃系土器の併行関係も数多くの論考があり〔千野1993、土屋1993、森本2006など〕、信濃の箱清水式は北陸の法仏式・月影式(本稿の2～4期)、信濃の御屋敷式は白江式(5・6期)、青木5・6期は新潟シンポ編年7～11期に併行するとされてきた。近年では、田嶋明人氏によって信濃の編年基準資料に共伴する北陸系土器等の年代が整理され、これまでとは異なる併行関係を提示された〔田嶋2009b〕。田嶋氏自体の修正・白江式〔田嶋2006〕の観点を含め、特に新潟シンポ編年7～10期あたりの理解で異なる部分が少なくない。筆者は、信濃系土器の編年については理解が及んでいないが、屈折脚高杯の年代を通して、9・10期あたりの理解も変更してきたこともあり、基本的に田嶋2009bの指摘を重視し、第1表に従って検討を行い、筆者なりの編年観で補足を行う。



第2図 長野盆地における後期土器編年1 (S=1/12) (青木1998から)



第3図 長野盆地における後期土器編年2 (S=1/12) (青木1998から)



第4図 土器の分類等(青木1998から)

第1表 編年対応表

本稿の時間軸	時代・時期	北信		東海			畿内
		青木1998	越後・佐渡	北陸南西部	赤塚1992ほか	西村2008	
1 弥生・後期前半	1段階	吉田式	尾沢2010~2012-2017	V-1	八王子古宮	山中1	
	2段階		田嶋1986-2006-2007	V-2	猫橋		
	3段階			V-3			
2 弥生・後期後半	4段階	箱清水式	様相2(2-1)	2群	法仏	山中2	
	5段階		様相3(2-2)	2-2			
	6段階		様相4(2-3)				
3	3期		様相5(3)	3群	月影	近畿I	
	4		様相古	4群			
	5 古墳・早期		新	5群	白江		
6	4期	御屋敷式	様相2	6群		近畿II	庄内式
	7		様相3	7群	古府クルビ		
	8 古墳・前期		様相4	8群			
9	5期		様相5	9群	高畠	近畿III	古段階古相
	10		様相6	10群			
	6期		様相7	11群			
11 古墳・中期			様相8	12群		松河戸I	中段階古相
12						松河戸II	中段階中相 中段階新相

### 3 新潟県内の信濃系土器出土遺跡

#### (1) 出土遺跡（第5・6図）

##### ① 新潟市古津八幡山遺跡〔新潟市教委 2004・新潟市教委 2014〕

弥生時代後期前葉～末葉の高地性環濠集落で、信濃系は計3点出土している（第5図1～3）。15～19次調査1T SK1601上層出土の1は、青木分類のD類に相当すると考える壺である。北陸系の有段壺と共伴する。報告書では頸部下端に簾状文が施された後、頭部・胴部には櫛描波状文が施文されており、施文手法・器面調整は中部高地系そのものであるが、形態は一般的ではなく、変容している可能性が指摘されている〔新潟市教委 2014〕。時期は御屋敷式段階とされ、4～5期頃に位置付けられている。2は9T包含層出土の胴の張った壺で、文様構成・形態は1に近く、信濃・御屋敷式段階（4～5期以降）とされている。3は11～14次調査16T包含層出土の青木分類D類であり、胴の張った壺の頭部～胴部片で、櫛描波状文が施されている。同トレンチから2期頃の北陸系・東北系土器の小破片が出土している。

##### ② 新潟市〔旧巻町〕大沢遺跡〔巻町 1994〕

新潟大学による4次にわたる調査、巻町教育委員会による調査が行われ、弥生時代1～5期頃の遺構・遺物が出土している。巻町史〔巻町 1994〕に掲載された図を提示した（第5図4）。

信濃系土器は、四隅切れの方形周溝墓北西ブリッジから出土している。頭部がやや直立するもので、青木分類BII・III類の壺に相当すると思われる。簾状文が不定間隔止めとなり、波状文も粗く波高が大きいことから御屋敷式段階の可能性が指摘されている〔荒木 1994〕。

##### ③ 長岡市〔旧和鳥村〕奈良崎遺跡〔県教委・埋文事業団 2002〕

弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である。箱清水系壺（報文は釜）として口縁部残存率計測法で15/36、破片数5とされており、包含層出土が2点示されている（第5図5・6）。細片のため時期比定は困難である。

##### ④ 刈羽村西谷遺跡〔刈羽村教委 1992〕

独立低丘陵上の環濠集落直下の水田が確認された包含層から1点出土している（第5図7）。比較的狭い範囲に広がる包含層Va・2層出土で、青木分類のBII・III類に相当すると考える。口縁部内面では胴部と頭部境は比較的明瞭であり、成形技法e類に相当すると考える。同層出土の北陸北東部系土器は2期（-2）と考えており、青木4段階に相当すると考える。この他、簾状文や櫛描波状文が施された土器がそれぞれ出土しているが、細片のため、時期・系統の比定は困難である。

##### ⑤ 柏崎市西岩野遺跡〔柏崎市教委 2019〕

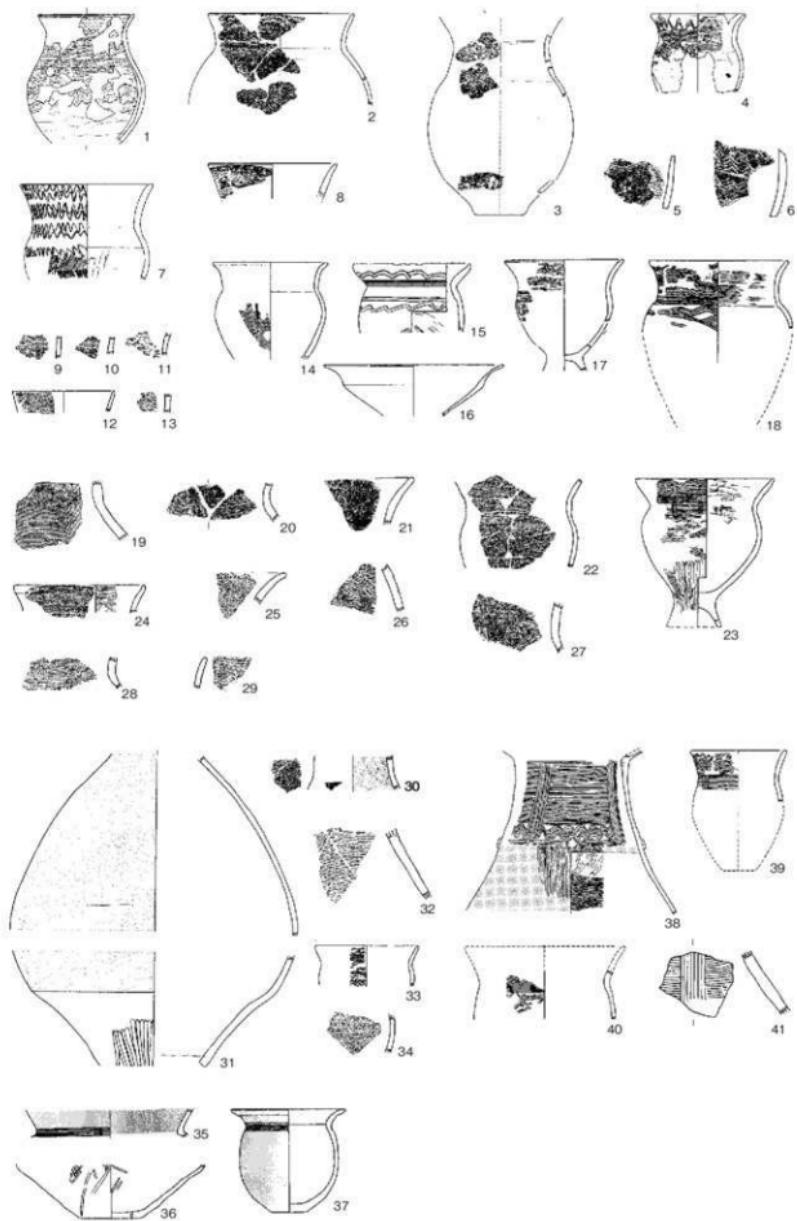
周辺との比高約30mの丘陵上に営まれた弥生時代後期を主体とする環濠集落と考える。方形の掘方をもつ大型掘立柱建物の柱穴から、櫛描波状文が施され口縁部小破片が1点出土している（第5図8）。小破片のため時期比定は困難であるが、周辺から出土している土器から2期を中心に若干新しくなる可能性を含むものと考える。

##### ⑥ 上越市木崎山遺跡〔柿崎町 2004〕

砂丘上に位置する古代・中世の遺跡として著名であるが、弥生時代の土器が若干出土しており、櫛描波状文が施された土器5点が出土している（第5図9～13）。同一個体で箱清水式とされる。同遺跡から出土している北陸北東部系土器はおむね2期の所産と考える。

##### ⑦ 上越市〔旧三和村〕東広井遺跡〔三和村教委 2003〕

沖積地に立地する古墳時代前期（5～9期）の集落跡である。柱穴群2とされる5～7期程の土器とと



第5図 新潟県の信濃系土器 1(断面実測図と12:S=1/4、その他:S=1/6)

にも1点出土している（第5図14）。狹小な調査範囲のため判然としないが、周間に溝が巡るエリアで広溝式建物の可能性もある。当期の北陸北東部系土器とは異質で、文様は欠くものの、口縁部が長く、胴部最大径が口径を下回る点などから信濃系とした。御屋敷式段階のものと考える。

⑧ 子安遺跡〔佐沢・滝沢2002、上越市教委2009〕

沖積地に位置する大規模集落である。複数年度にわたり広範囲な調査が行われているが、平成5～7（1993～1995）年の調査ではSX598出土の壺がある（第5図15）。報告文では施文方法から東北系としたが、形態から信濃系と改めたい。口縁部と胴部の境界には簾状は施され、口縁部には櫛描文が、胴部上位には2条の平行沈線とその直下に櫛描波状文が施されている。口縁部は長くなく、口縁部と胴部の境界は明瞭である。青木氏のB IV類か。共伴する土器は北陸北東部系で、2～2期の基準資料と考えている。

上越市教委2009では、細片のため断定は難しいが、青木分類・高杯B類の口縁部がある（第5図16）。箱清水系の高杯は、北陸系高杯を模倣することで成立したとされることから差異は微妙であるが、有段部からの立ち上がりから箱清水系の高杯と考える。共伴する土器は2期である。

⑨ 上越市裏山遺跡〔県教委・理文事業団2000〕

周辺との比高約80mの丘陵上に位置する高地性環濠集落である。丘陵上にある幅約50cm、長さ6.8mの1号溝から台付壺1点が出土しており（第5図17）、青木分類D IV～V類に相当する。同遺構内出土土器から2期を中心とした時期のものと考える。

⑩ 上越市前田遺跡〔上越市教委1999〕

沖積地の微高地に位置する5～10期程まで続く集落跡である。平成9（1997）年度の調査でSX 4とされた幅1m前後、深さ20～40cm程の弧状を呈する溝状の遺構から1点出土している（第5図18）。隣接するSX（性格不明）とされる遺構とともに、周溝を持つ建物の溝の可能性もあるうか。信濃系土器は青木分類B V類で、内面の胴部と頭部境は明瞭である。共伴して器台の脚部と思われるものが出土しているが、廃棄の同時性は明確でない。口縁部が長く、頭部と胴部の境界が明瞭なことから御屋敷式段階（5期以降）の所産と考える。

⑪ 釜蓋遺跡〔上越市教委2008・2013・2015〕

扇状地に営まれた4～5期の環濠集落で、1～2期、古墳時代中期の土器を含む。複数冊の報告書が刊行されているので、以下では報告書毎に信濃系土器の状況を確認する。

2008年度報告では、1号環濠下層から壺の胴部上位片（第5図19）、壺口縁部片（21）、1・2号環濠上層から甕（20）、SX34から甕（22）、SX62から台付甕（23）、SD65から甕口縁部破片（24・25）、胴部片（26）、包含層から頭部片（27・28）が出土している。報告書では胎土の記載もあり、北陸的（19・20・23・24・28）、妙高以南の山岳方面（21・22・25・27）とされる。

このうち比較的の残存率が高い土器では、22の甕は口縁部が長く、胴部の張り出しが強いことから青木6段階を中心とした土器と考える。23の台付甕は口縁部の張り出しが弱い点から青木4段階頃の所産と考える。これは同一遺構から出土している有段鉢の年代とも矛盾しない。この他は細片のため時期比定は困難であるが、4～5期を中心とした年代を想定したい。

2013年度報告では1辺10m程の大型建物であるSI83覆土1層から甕口縁部片が1点出土している（第5図29）。時期比定は困難であるが、北陸北東部系土器は4期と考える。

⑫ 上越市今泉釜蓋遺跡〔上越市教委2010〕

釜蓋遺跡の200m程南側の扇状地に位置する。弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓が16基検出

されており、遺跡の位置から釜蓋遺跡を営んだ集団の墓域と考えたいが、出土土器の年代は釜蓋遺跡の主体的時期となる4～5期のものは極端に少ない傾向にある。信濃系の出土点数は5点と多い。4号方形周溝墓では壺頭部片（第5図30）が、長さ・幅が3m弱のSX28から壺の胴部上位～下位が検出されており（31）、報告書では土器棺の可能性があるとされている。この他に、SX67では3～4期とされる壺（32）、造構外では壺の口縁部～胴部上位片（33）や壺胴部片（34）が検出されている。この他に台付壺が3点出土しているが、信濃系かは明確でない。

細片は時期比定が困難であるが、4号方形周溝墓は他の北陸北東部系土器の年代から2期前半、SX28の31は胴部下位の屈曲から青木氏の5～6段階、33は青木氏の4段階を中心とした時期と考える。

⑬斐太遺跡〔浅沢1994・斐太歴史の里調査団ほか2005・2006〕

広大な面積を誇る2～3期の高地性環濠集落で、環濠埋没後約5期まで建物が確認されている。5期の基準資料と考える上ノ平・矢代山地区24号住では、壺（第5図35～37）が検出されている。35は胴部下位の屈曲が著しいことから青木4段階以降、37の小型壺は北信での類例を検索できていないが、中信に類例をもつ。いずれも北陸北東部系土器と年代観に矛盾はない。

矢代山B地区では土器墓の可能性があるSK23から壺（38）が、環濠から壺が2点（39・40）、壺が1点（41）出土している。SK23の壺は胴部上半に櫛描直線文や波状文により文様帯が形成され、垂下文により2条1単位のT字文が施され、ボタン形の円形浮文が塗布されている。箱清水系または櫛式の影響が推測されている。北陸北東部系土器は2～3期である。

環濠出土のうち37・38は部分破片のため時期は決し難いが、37は青木分類B IV類で、口縁部の長さ等から青木4段階を中心としてよければ、他の土器とも大きな矛盾はない。

⑭上百々遺跡〔新井市教委1985〕

沖積段丘に位置する古墳時代前期（6～7期）主体の遺跡で、弥生中期～後期の土器が若干出土している。信濃系の土器は大型広口壺1点（第6図42）で、胴部は無文である。胴部と口頭部の屈曲は明瞭であることなどから、他の北陸北東部系土器の年代観とは矛盾しない。

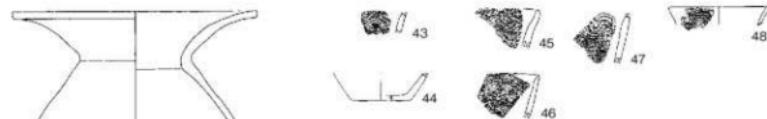
⑮六反田南遺跡〔県教委ほか2008・2010・2016〕

古墳時代前期を中心とする集落である。複数年に及ぶ調査でそれぞれ報告書が刊行されており、計6点確認できる。2008年度報告では5～6期主体のSD196から壺と思われる口縁部片（第6図43）が検出されている。また文様を欠くが、胎土から信濃系とされる底部（44）がある。いずれも年代は決し難いが5～6期頃となろうか。

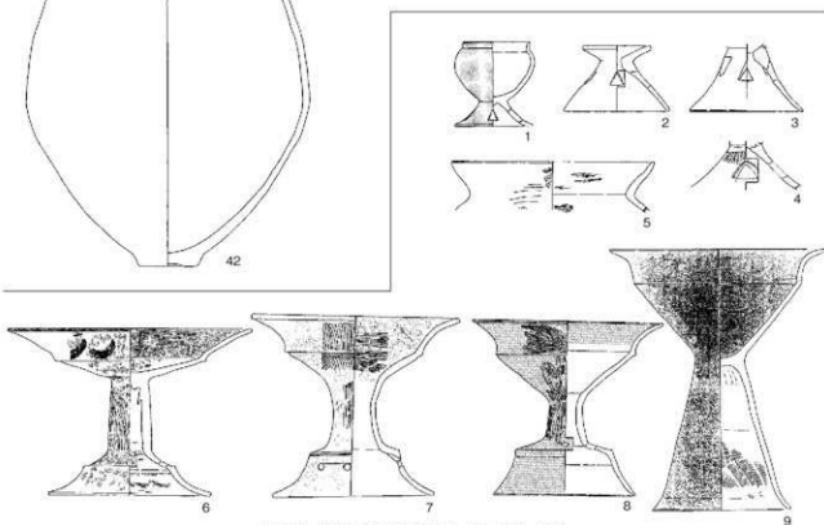
2010年度報告では、2期頃が主体と考えるSD605から壺が3点出土している（45～47）。破片資料のため年代は決し難いが2期頃を推定したい。2016年度報告では共伴資料を欠くが、SB7646-P7547から壺口縁部片が1点検出されている（46）。造構の年代から5～6期を想定したい。

## （2）出土遺跡の分布と時期的な傾向

ここまで、信濃系土器の県内での出土状況を概観してきたが、県北部の阿賀北と佐渡を除く15遺跡で50点弱が確認されている。県境を接する頸城が最も多く、北に向かうに従い数量が減じている。信濃系の土器は櫛描文様が特徴となるが、残存率の高い個体から文様を欠くものでも信濃系と認定したものもある。器種は壺が圧倒的に多い。少量ながら確認されている壺や高杯でも有段のC類が若干確認されているが、出土遺跡はいずれも頸城である。鉢は確認できない。細片の場合に時期比定が困難であるが、廃棄の同時性が確認できる造構出土資料や、包含層出土であっても周囲から出土している北陸北東部系土器を頼



第6図 新潟県の信濃系土器2(断面実測図:S=1/4、その他:S=1/6)



第7図 部分的要素が認められるもの(S=1/6)

りに時期別の動向を概観する。ただし、前者の資料は決して多くないため多分に課題を残す。

#### A 1～3期（吉田式、箱清水式3期4・5段階あたり）

信濃系は1期のいわゆる吉田式の明確な例を欠き、2期の箱清水式からとなる。箱清水式でも青木編年3期4・5段階あたりのものは、北は信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡、柏崎平野・西谷遺跡や西岩野遺跡、隣接する頭城では上越市の木崎山遺跡、裏山遺跡、子安遺跡、今泉釜蓋遺跡、妙高市斐太遺跡、糸魚川市六反田南遺跡など広範囲に及ぶ。時期比定が困難ながら信濃川中流域（左岸）の長岡市奈良崎遺跡も当期とすれば、更に範囲は広大となる。遺跡数は多いものの、出土点数は妙高市斐太遺跡や糸魚川市六反田南遺跡などでやや多い点や、頭城でも高田平野で甕以外の器種が確認できるが、出土点数は県内他地域との際立った差は認め難い。

#### B 4～6（7）期（箱清水式3期6段階あたりから御屋敷式）

北陸北東部系をはじめ他地域の土器を含め一つの画期となる4期は、集落の存続時期でも一つの節目となる。県内では3期に高地性環濠集落の環濠が埋没し、新たに平地の環濠集落が出現するが、当期以降の信濃系は信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡で確認されているほか、同左岸の新潟市大沢遺跡例が当期としても、その他は頭城に限定されるようである。

4～5期の上越市釜蓋遺跡では県内最多となる10点近くが出土しており、他遺跡を圧倒する。隣接する上越市今泉釜蓋遺跡・前田遺跡、妙高市斐太遺跡とともに主体的な分布域となる。糸魚川市六反田南遺跡でも3点程が確認されているが、全体の出土量からすれば、北陸北東部系との数量比は、2～3期と変わらない状況となる。また、櫛描文は欠くものの器形から信濃系と判断した頸城東部の東広井遺跡や妙高市上百々遺跡で確認されている以外は明確ではない。

4期以降は頸城が分布の主体となる。斐太遺跡群周辺での出土量が際立ち、6期程までは確認できる。一方で、信越国境付近の頸城・高田平野東部や、頸城・糸魚川市の拠点集落である六反田南遺跡以外は数量が極めて少なくなる。

#### C 部分的な要素として受容している可能性があるもの（第7図）

以上が器形に加え文様からの検索であったが、信濃の要素の一部分を取り入れた考えたいものが定量確認できる。1点目は、箱清水式高杯の変容した受容である。北陸北東部系の高杯・器台は基本的に有段部の増長として理解しており〔滝沢2010b〕、典型例を第7図6・7で示した。上越市下馬場遺跡4号堅穴〔新潟県教委・埋文事業団2005〕出土の器台（第7図8）は2～3期の所産と考えているが、口縁部の身が深く、このような事例は、北陸北東部系の高杯・器台では異質である。器種が異なるが、口縁部の身が深い事例は箱清水式の高杯（第7図9）の部分的な引用と考えたい。

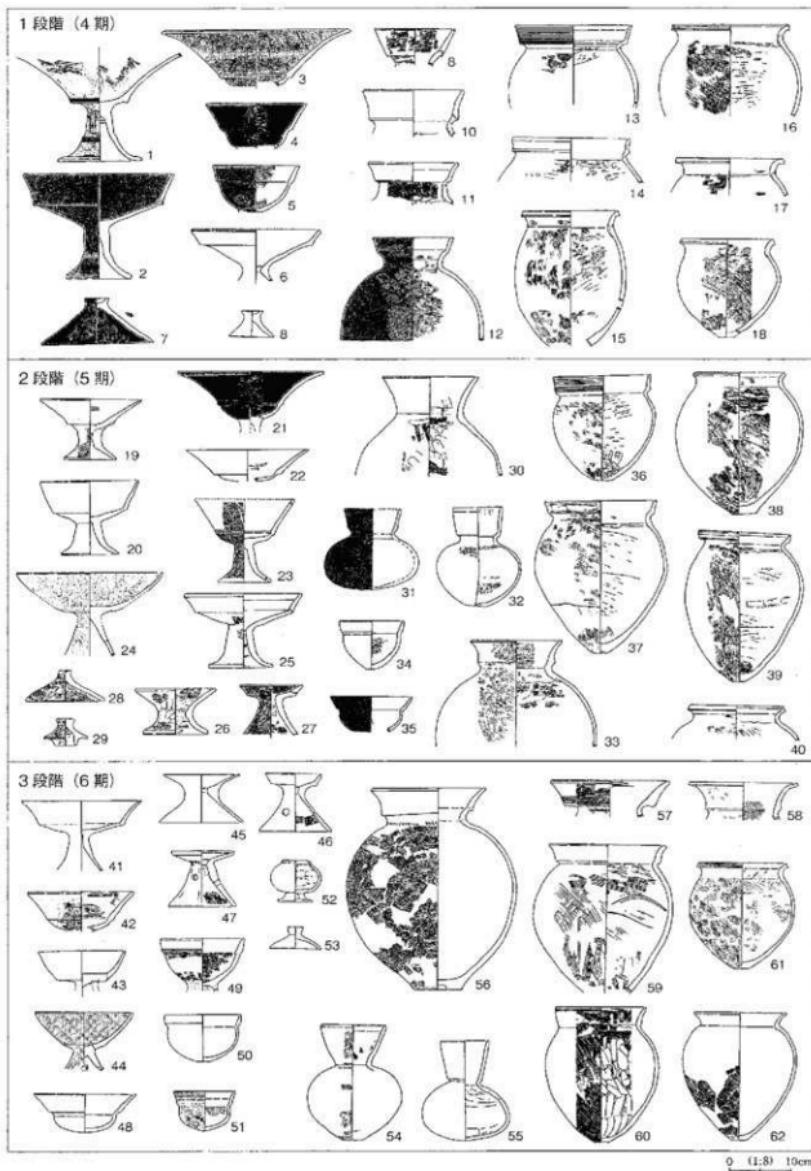
次に、以前にも触れたが脚部の三角形透孔である〔滝沢2008〕。頸城・妙高市斐太遺跡上ノ平24号住居〔滝沢1994〕の鉢（第7図1）、遠く離れて阿賀野・新発田市野中土手付遺跡〔加治川村教委2004、新潟県教委・埋文事業団2006b〕（第7図2・4）や新潟市正尺C遺跡〔新潟県教委・埋文事業団2006c〕（第7図3）の器台などで確認されている。三角形透孔の出自を十分に理解していないが、在地の土器属性からは出現するものではない。器種は器台や高杯であっても箱清水式の系譜を引くものではないが（第7図下段）、現状では信濃の要素のみ取り入れられたものと考えたい。

また、口縁部の処理等で信濃の要素を取り入れた可能性のある甕がある。筆者がかつて県内の甕を分類して千種甕に含めないとした口縁部に面を持たないⅢ類のうち、口縁部が内湾するⅢf類である〔滝沢2005b〕。数量は少なく、時期的にも限られるもので6期とした新潟市緒立遺跡C地区SI164〔黒崎町教委1994〕の甕である（第7図5）。口縁部は信濃系ほど長くないが、長野県鶴前遺跡でⅡ類とされたもの〔鶴田1994〕に類似する。在地の土器属性からの出現が困難と考える要素であり、引き続き検索を続けたい。

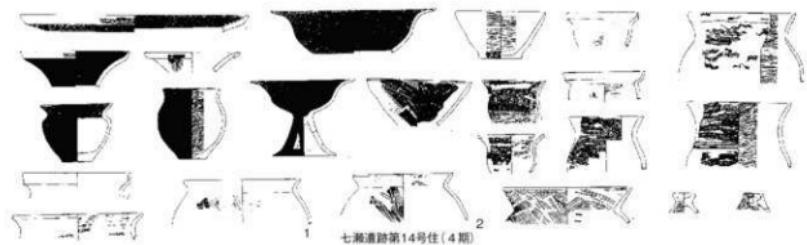
#### D 御屋敷式終末から北信6期あたり（7～9期）

田嶋明人氏の併行関係〔田嶋2009b〕に従えば、北信・青木4期後半～5期（様相1～3）に相当する（第1表）。青木一氏の4期の御屋敷式（5～7期）は、中部高地型の壺・甕・高杯が型式変化し、中部高地型に系譜を持たない新出系の器種の出現、5期（8～9期）は4期に参入した壺・甕・高杯の系譜を引く器種により弥生後期タイプの中部高地型から古墳時代前期型に転換し、中部高地型櫛描文土器が姿を消す段階、6期（10期）は屈折脚高杯の出現を指標とする〔青木1997〕。青木氏の編年で5期とされた土器の一部と頸城の4～10期の編年案を第8～12図に掲載した。

在地の様相を残しながらも古墳前机型に変換するため、頸城の土器との違いは新出系の器種の受容と在地化の過程での変容を除くと、当期の信濃系を捉える作業は筆者にはできていない。青木氏は小型精製土器群定着期（7～8期か）の甕は、布留甕はおろか、S字状口縁台付甕C類は特殊例であり、弥生後期の中部高地型櫛描文甕とは形態、調整が異なる「ハケ調整く字甕」が日常甕として定着するとし、「中部高地型櫛描文系甕」から転換した新た在来系甕として評価した〔青木1998〕。青木氏の北信5期は、信濃



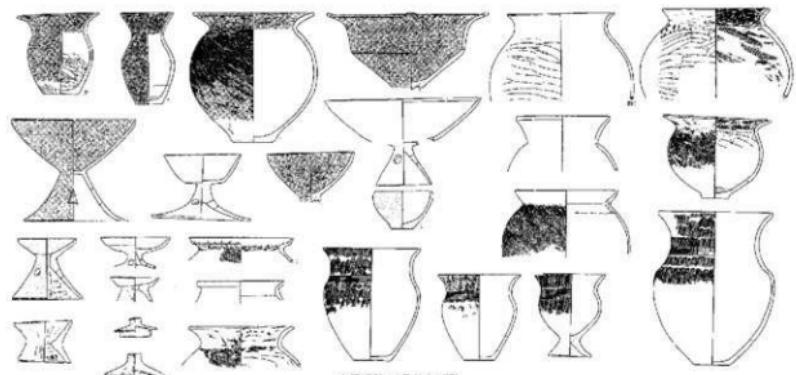
第8図 頸城における土器の変遷1(滝沢2019bから)



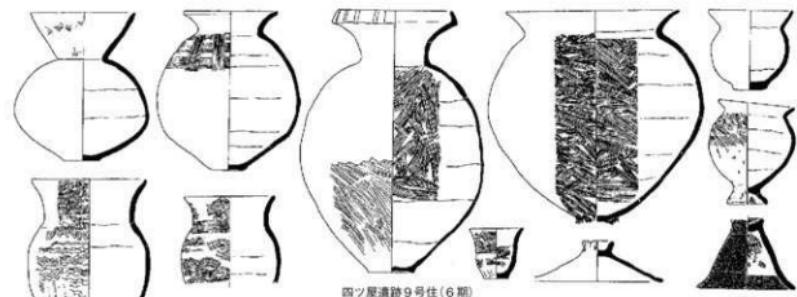
七瀬道路第14号住(4期)



四ツ屋道路30号住(5期)

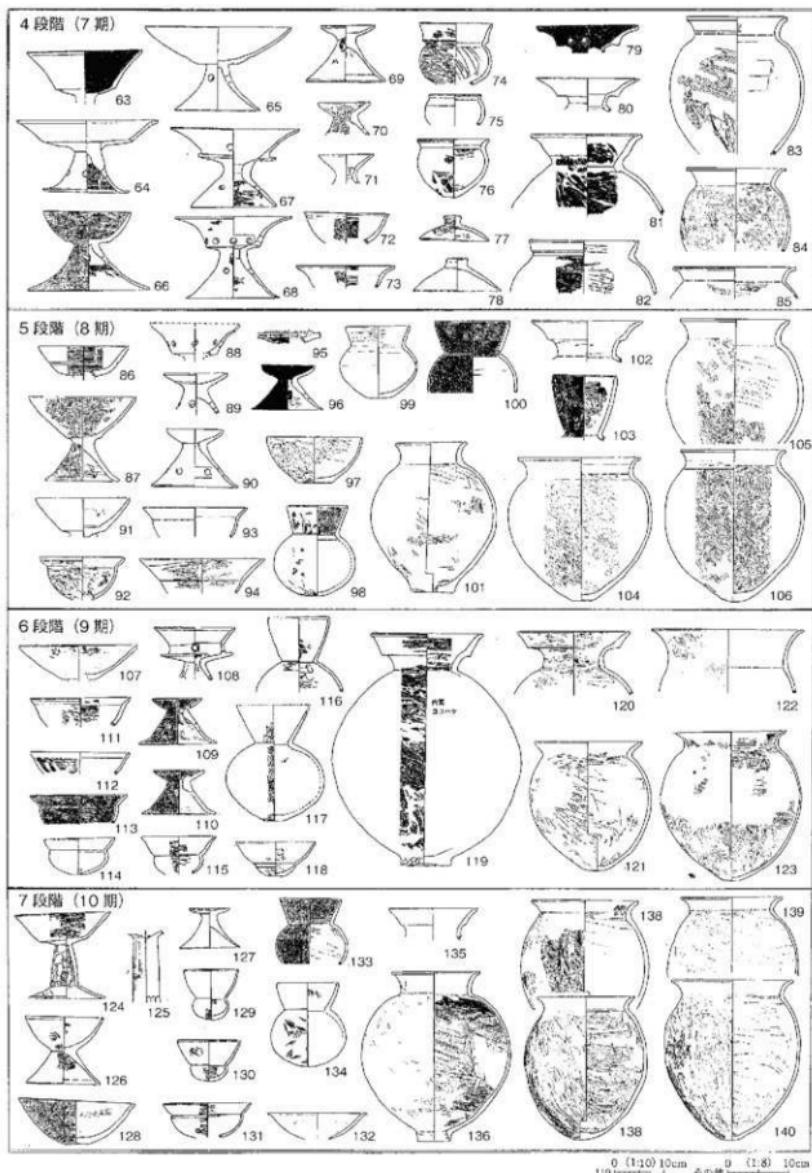


中俣道路13号住(5期)



四ツ屋道路9号住(6期)

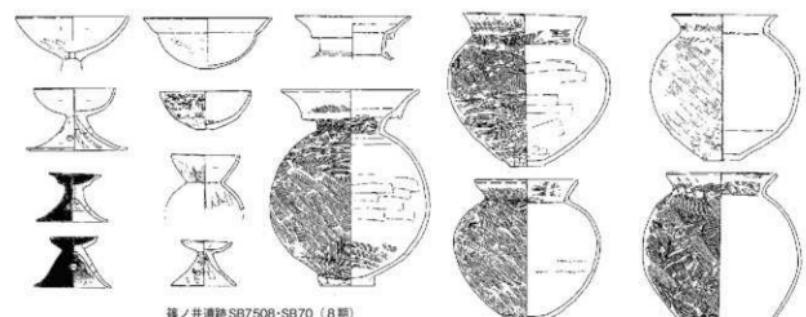
第9図 北信における土器の変遷1 (S=1/8)



第10図 頸域における土器の変遷2 (滝沢2019bから)



篠ノ井道路 SD6023-7014-7030 (8期)



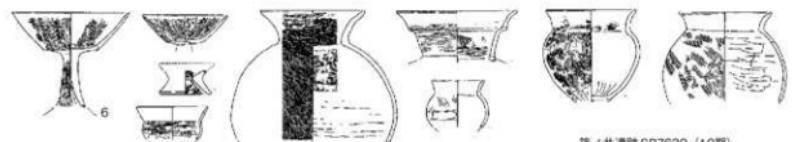
篠ノ井道路 SB7508-SB70 (8期)



篠ノ井道路 SB7256 (9期)

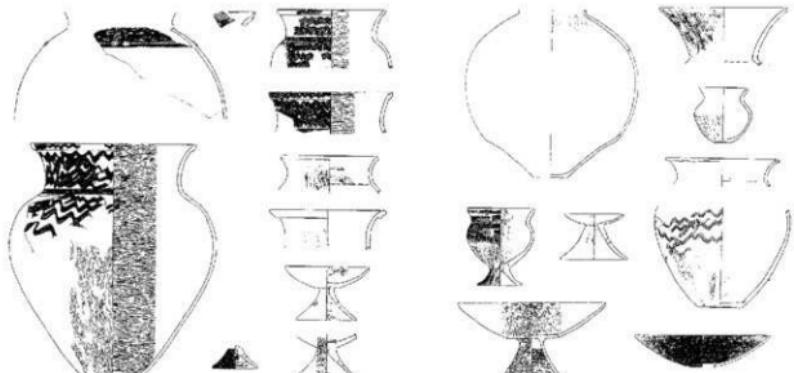


篠ノ井道路体育館地点 (10期)



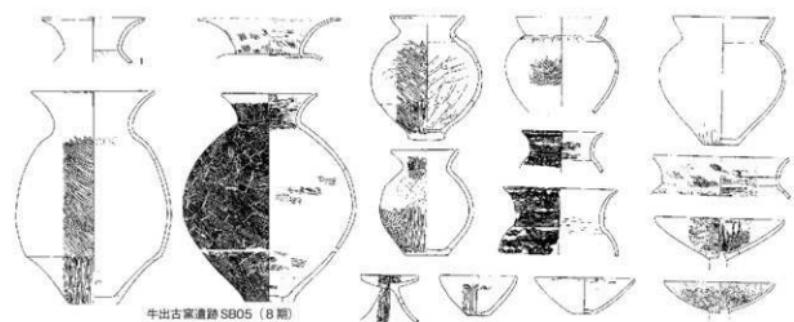
篠ノ井道路 SB7639 (10期)

第11図 北信における土器の変遷2 (S=1/8)



牛出古窯遺跡 SB10 (7期)

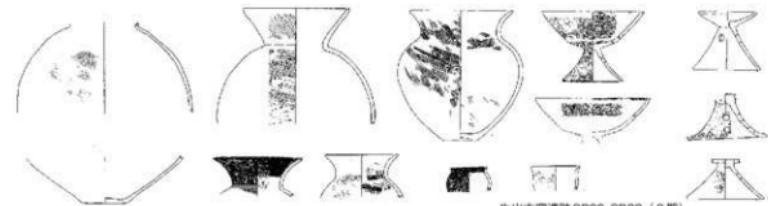
牛出古窯遺跡 SB06 (7期)



牛出古窯遺跡 SB05 (8期)



牛出古窯遺跡 SB09 (8期)



牛出古窯遺跡 SB06・SB03 (9期)

第12図 北信における土器の変遷 3 (S=1/8)

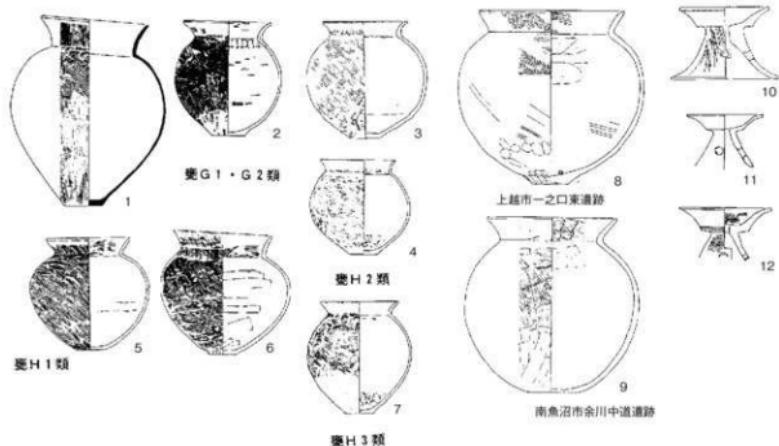
の研究者は新潟シンボ編年7期、田嶋明人氏は8期とする。青木氏様相1と頭域の4段階（7期）を比較すると共通点も多い。小型高杯の第10図66と第11図縁ノ井遺跡SD6023等の1は、ほぼ共通の形態だが、わずかであっても開きが大きい。青木氏の様相2は8期、様相3の縁ノ井遺跡SB7256の典型的な小型丸底壺（同図2・3）から9期、様相4の縁ノ井遺跡体育馆地点の小型丸底壺（同図5）や縁ノ井遺跡SB7639の屈折脚高杯（同図6）から10期と捉えて検討を進める。

青木氏の北信5期は信濃系が急速に解体する時期とされていることから、その存在を信濃からの影響とするのが難しい段階である。このため、多分に器種が限定されるが、青木一男氏の壺H・G類【青木1998】をはじめとした細別器種に焦点を当てる。

青木分類の壺H・G類：「ハケ調整ぐの字壺」で、胴部下半部及び内面にヘラミガキが施されたものがG類、施されないものがH類とされる。G類は、中部高地型櫛描文系土器の伝統をもつものとされ、H類は西川修一氏の「千葉型兜」【西川1991】に近い型式で、様相1以前の御屋敷式期に出現しているという。胴部形態で細分され、G類は1・2類、H類は1～3類にそれぞれ細分されている（第13図）。

時期的な変遷ではいずれも様相1以前から確認され、G1類（様相1以前～様相2：7～8期）⇒G2類（様相1～3：8～9期）、H類はH1類（様相1～3：7～9期）⇒H2類（様相1～5：7～10期）⇒H3類（様相2～5：8～10期）という変遷をたどるという。また、他分類の壺との関連では様相1以前に出現し、様相2では主体となり、壺へのヘラミガキは様相3（9期）まで残存し、様相5（10期）では確認できないという。

これらの壺については、春日真実氏の指摘がある。春日氏は妙高市大洞原C遺跡出土土器の検討の中で、第13図8は信濃の影響を受けた壺とした。また、妙高市横引遺跡【新潟県教委・埋文事業団1996】や上越市一之口遺跡【新潟県教委・埋文事業団1994】など頭城地域に散見できるとし、その他の地域として十日町市柳木田遺跡の壺も類似する資料とした【春日2001】。このように、平底・胴張り・大きな平底の土器は、若干ではあるが7・8期以降に越後にもみられる。筆者も南魚沼市余川中道遺跡【新潟県教委・



第13図 長野盆地南部における壺の分類と越後の類例・器台（8～12はS=1/6）

埋文事業団2015] の第13図9を千葉型壺とした〔滝沢2017〕。青木氏の分類では在地のミガキを欠くことから壺H類となり、厳密に言えば信濃系というよりも千葉型壺の範疇に属する。一之口遺跡や横引遺跡の場合は、地理的に信濃との交流の中で登場したと推測するが、数量は極めて限定的である。

ところで、東日本では7・8期頃に西川修一氏の「千葉型壺」が南関東から北上して東北一円に拡大する。このインパクトは大きい。一方で、北陸南西部の加賀を中心には布留式系壺に大きく転換する。いずれの地域も前段階からの在地の壺が大きく変容する画期と考える。一方で、北陸北東部の能登・越中・越後・佐渡は、若干の変容はあるものの、基本的には在地の千葉型壺又は能登形壺を踏襲する。信濃系壺・千葉型壺に類似したもののが確認できるものの、壺は大きく変容しない点は重要と考えている。越後在地の壺は、9期頃から口縁端部を面取りしないものが増加するため（北部の阿賀北は除く）、その要素のみを見れば、信濃に限定できないまでも東北・関東など東日本・千葉型壺の影響も否定はできないが、全体のプロポーション（口縁部・胴部・底部形態）は異なるため、厳密な信濃系とは考えていない。

青木分類・器台B2類：田嶋氏が指摘〔田嶋2009b〕するように東海・狹間Ⅲ式2段階（漆町8群併行）とされる長野市篠ノ井SB7508〔長野県教委・(財)長野県埋文センター1997〕と同様のものが、長岡市五斗田遺跡（第13図10、長岡市教委2000）や上越市谷地遺跡（第13図11・12 上越市教委2009）などで確認できる。越後では多い細別器種ではないが、頸城と信濃川流域で多いとできようか。信濃経由に限定できないが、注目される。

青木分類・鉢G類など：青木分類・鉢G類は、口縁部が内湾する身の浅い鉢（第11図篠ノ井遺跡SB7256の4）で、仮称・東海型としたものである〔滝沢2012b〕。「中部高地では鉢F類と共存して鉢F類よりも主体制式となる」とされる〔青木1998〕。県内でもいくつかの遺跡で確認できるが、数量は多くない。東海地方に多い細別器種と考えており、信濃を経由してもたらされた可能性もあるが、数量から限定的といわざるを得ない。また、大型サイズの小型丸底鉢は関東・東北で盛行するが、新潟県内では明瞭ではない。

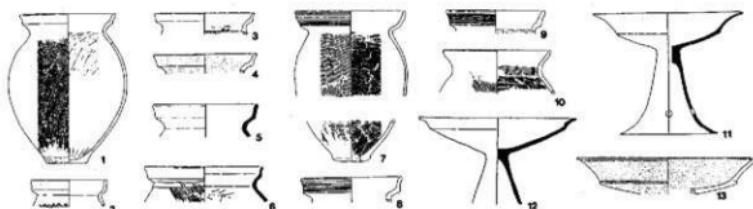
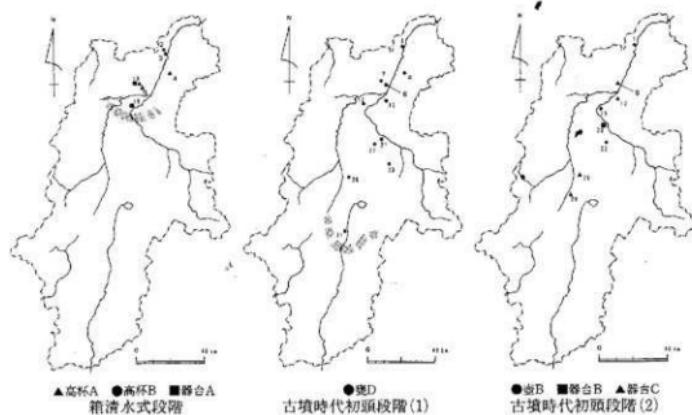
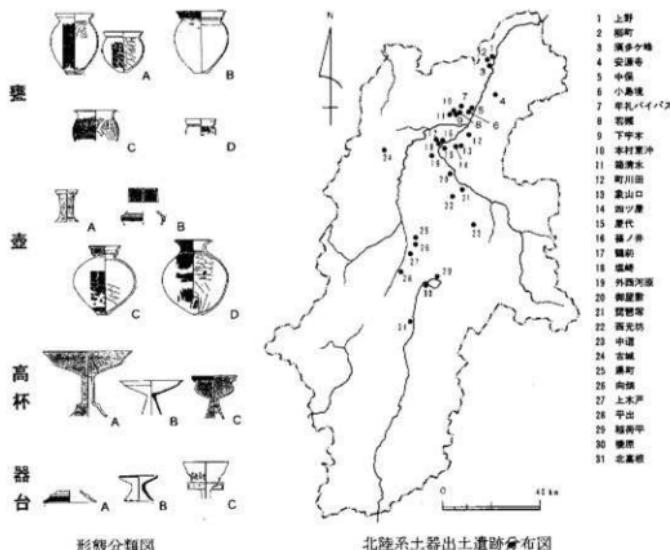
以上のことから、一部で信濃と共通する細別器種は確認できるが数量は多くない。青木分類の壺H・G類や鉢G類は、関東・東北に多いことからすると、信濃は大枠でその地域圏に組み込まれたが、頸城をはじめとした越後は、完全にはその波に組み込まれなかつたと考えたい<sup>2)</sup>。

#### 4 信濃の北陸系土器を踏ました信越の交流

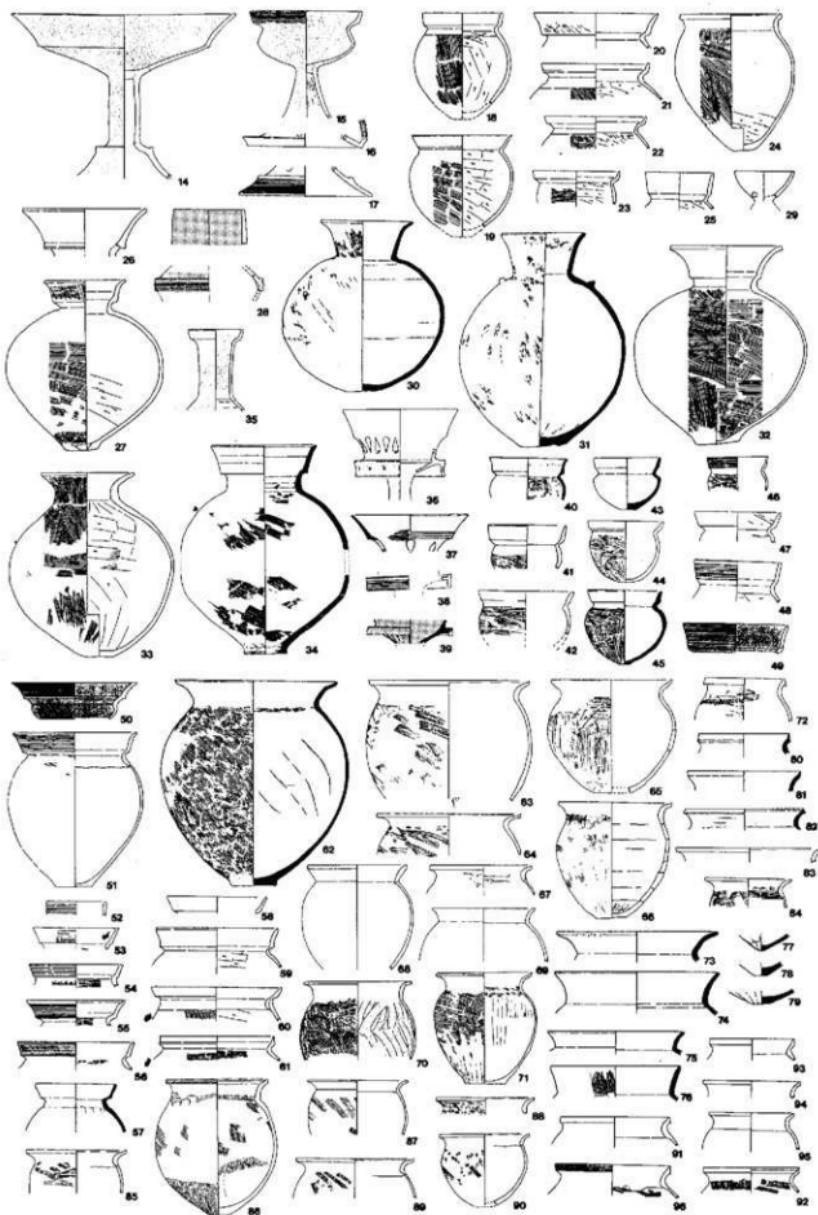
信濃で検出された北陸系土器に関する論考は、1959年に桐原健氏が飯山市柳町遺跡出土土器を佐渡・越後経由と指摘〔桐原1959〕して以降、資料数の多さもあって数多くの研究が蓄積された。1993年には前島卓氏が信濃の北陸系土器を集成し、時期的な変遷を指摘した重要な論考がある〔前島1993〕（第14・15図）。研究史上、大きな画期であり、前島氏の論考の以前と以後でその指摘状況を概観する。

##### (1) 研究略史

1993年以前：北陸系の流入は、時期的には箱清水式期の段階からとされ〔青木和1984〕、北陸では法仏式で、畿内の庄内式・北陸の月影式併行期の北陸北東部系土器が多数存在するとされた〔坂井1984〕。系統については、筆者（筆者）が「古墳時代I期後半」（畿内庄内式併行期）に、東・北信や松本平に越後系の土器が多量にみられる（第15図71・86など）とする一方で、飯山市柳町遺跡出土の壺には越中地方から搬入されたものもあると考えられた。また、古墳時代II期古段階も引き続き東・北信に越後系土器が多い（第15図62など）とした。古墳時代I・II期の越後系土器の流入の要因については、北陸系の玉



第14図 長野の北陸系土器1 (前島1993から抜粋)



第15図 長野の北陸系土器2(前島1993から抜粋)

造集団の移住を想定している〔笠沢1988〕。1980年代後半には流入時期とその変遷、分布範囲が既に指摘されている意義は大きい。

1993年には、千野浩氏が長野市本村東沖遺跡出土の北陸系土器について、橋本英道氏の能登編年〔橋本1991〕と自身の編年〔千野1989〕を対比し、箱清水式と北陸北東部系土器の併行関係をより限定した。同年、冒頭に示した前島卓氏は、信濃・箱清水式段階で北信の善光寺平を中心とするが、古墳時代初頭段階には天竜川上流域まで拡大することから、搬入経路を越後から北信の飯山または信濃町を越えるルートと、大町市の古城遺跡例（第15図34）から越中に境を接する地域から姫川を通り、松本平へ達することも十分に考慮してよいとした。系統については、境を接する越後に限定して考える必要はないかもしれないとした〔前島1993〕。これは当時、会津における北陸系土器は北陸北東部系でも能登の様相に近いとする見解〔坂井・川村1993〕を反映したものと考える。加えて、飯山市上野遺跡H9号住出土土器は北陸に非常に近いこと、住居形態も北陸地方に近似することから北陸からの移住も考慮すべきとした。

この段階では、信濃の北陸系土器は法仏式併行期（2期）から始まり、北信地域に北陸北東部系が主体的に流入し、古墳時代初頭（5期）以降は天竜川上流域まで分布範囲が拡大することが確認されている。また、北陸北東部内でも越後に限定できない点で一致するが、越中に求める立場〔笠沢1988〕と能登の可能性を考慮すべきという意見〔前島1993〕に分かれる。

1994年以降：1996年には川村浩司氏が、弥生時代後期の北陸系土器を信濃の住居形態とともに検討した〔川村1996a〕。川村氏は信濃の北陸系土器について全体的には有段口縁擬凹線文甕より無文の甕が多く、胴部内面のヘラケズリが少ないとから越後の要素を帯びて北陸系が入ることが確認できるとする一方、越後を経由したとしても能登の可能性を考慮しなければならないとした。1998年には青木一男氏が、北信3段階に北陸系譜の甕が出土している点を指摘した〔青木1998〕。北陸法仏式以前から土器の拡散が確認された点は大きい。2001年には青木一男氏が再度整理し、1990年代までに指摘された青木・北信編年の箱清水式2期後半に出現し、北信3期以降に本格化し、飯山～長野盆地北部を中心に、上田盆地から松本盆地まで広く分布すると評価〔青木2001〕し、おおむね一致した見解となったようである。その後も信濃における北陸系は着実に資料が蓄積されていく。

2009年田嶋明人氏は時期別の流入先にも触れ、北陸系土器の移動が本格化する漆町2群併行期（本稿2期）を第1の画期とし、北陸北東部の型式的特徴と「越後からの波及が主体で、近接地域間交流」と予測する。続く漆町3群併行期（本稿3期）は、「越後との土器移動も継続していたとする一方「越中でも中・東部地域、蠅負を中心とした地域あたりを想定」が土器移動に大きく係わったとする第2の画期、北陸北東部系に加え北陸南西部系の土器移動が加わる漆町4・5群併行期（本稿4・5期）を第3の画期とした。漆町7群併行期頃まで越中からの土器移動は続き、予想を交えてより厳密に示せば漆町9群併行期が第4の画期とする〔田嶋2009b〕。田嶋氏の論考以降、資料はそれほど増加していないようであるが、長野市長野女子高校校庭遺跡で多量の北陸系土器が出土している〔長野市教委2014〕。平林大樹氏は、本貫地のものと比べると細部の形態が異なるが、北陸北東部でも越中付近に系譜を求めている〔平林2014〕。

資料数の更なる増加に伴い、法仏式併行期（2期）を通過する例が指摘されたが、本格化するのは2期との評価に大きな変化はない。また、北陸北東部系でも越後を中心に、越中の可能性が指摘される。特に田嶋氏の指摘は、時期別な状況を踏まえたもので、搬入時期・地域をより具体的に提示した点で大きい〔田嶋2009b〕。以下では、重複を避けるため田嶋氏が触れていない資料（田嶋氏の指摘以降の資料を含む）を中心に筆者の考えを述べるとともに、土器における信越の交流を考える。

## (2) 弥生後期（1～3期）

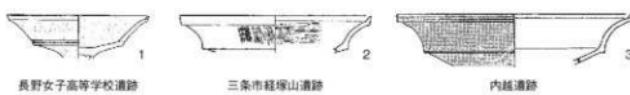
当期について筆沢浩氏の論考に詳しい。後期前半の状況は明確でないが、後期後半（本稿の2期）では中部高地系の影響が認めることができず、信濃川水系さえも多くのとする。一方で、妙高山麓には後期を通して信濃系土器が主体となり、上越市旧中郷村あたりまでは信濃系土器分布圏に後退しており、妙高山麓が信濃と北陸の境界となる。一方で、北関東で分布圏を保持し、後期後半には南関東の多摩川流域まで影響を与えて横浜市朝光寺原遺跡出土土器を指標とする朝光寺原式を成立させている〔筆沢浩 2004〕。

ほぼ同様の解釈が筆沢正史氏により示されている。後期は越後と信濃の土器レベルでの関係は極めて希薄であるが、信濃で玉素材の嗜好の変化（鉄石英）と頭城における玉生産が同一の歩調がみられることや両地域でそれぞれの系統の土器が出土することから、交易・情報収集は前段階（中期後半）と大きな変化はないと推測した。弥生後期における信濃系土器の平野部からの後退は、信濃系（栗林）集団の海岸ルート開拓から内陸ルート重視への方向転換の結果、北関東・信濃川流域に信濃系土器が拡散し、本稿の5期以降に北陸系土器の信濃・上野へ拡散するのは、弥生後期における信濃系集団の内陸ルート開拓により、頭城と上野との交流の下地が形成された延長線上に成立したものと理解した〔筆沢 2005a〕。共に、信濃の視点による重要な指摘であり、上記を踏まえて信越の土器交流を考えてみたい。

信濃への土器の移動は、既に指摘されているように本稿の1期後半となる。第14図12 東長峰遺跡の高杯も当期と考えておらず、青木一男氏の指摘のどおり法式以前から移動が始まるとみた。北陸北東部系土器の移動は山形県・福島県が2期2～3、群馬県3期と考えておらず、信濃では少なくとも1段階早い時期での移動となる。越後でも2期から信濃系が確認できるようになる。数量から言えば、信濃における北陸系の土器が断然的に多く、器種も多様である。越後側では比較的広範囲に信濃系が散在する状況にあり、器種も壹が庄倒的に多い。壺や高杯が若干確認されているにすぎず、鉢は確認できていない。

信濃の北陸系土器は先学の指摘どおり2期の資料が多く、田嶋明人氏が本格化するとした時期と一致する。北陸北東部の能登・越中・越後・佐渡のうちどこの土器が動いているかは、壺口縁部の類別構成比や最別器種の出土頻度などを除き、厳密な意味での地域性の抽出は困難である。また、越後でも頭城の場合、能登・越中との識別は更に困難となる。出土頻度が低い特徴的な細別器種を考えれば、高杯では口線上端部がつまみ上げられた長野女子高校校庭遺跡SB1の高杯（第16図1）に注目したい。数量が少ないながらも越後では、三条市経塚山遺跡〔三条市教委 1999〕や柏崎市内越遺跡〔新潟県教委 1983〕で確認できる（第16図2・3）〔滝沢 2006〕。現状では、越後からの波及と考えたい。

上記と関連して、越後の信濃系土器も頭城を中心としたながらも広範囲に及ぶ。この要因として、筆沢浩氏が指摘する玉素材の鉄石英が注目される〔筆沢 2004〕。越後の管玉生産は弥生時代中期後半に大規模となり、典型例として長岡市大武遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2014〕、柏崎市下谷地遺跡〔新潟県教委 1979〕、上越市吹上遺跡〔上越市教委 2006ほか〕や、佐渡市新穂玉作遺跡群〔計良 1950など〕などがある。後期は規模が小さくなるが、阿賀野川以南の海岸平野部、すなわち北陸北東部系土器分布圏で小規模生産遺跡が散見され、鉄石英の石核や未成品が出土する遺跡も多い。柏崎平野の西谷遺跡〔刈羽村教委



第16図 口縁部上端部が積み上げられた高杯 (S=1/6)

1992]、信濃川左岸では奈良崎遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2002〕・大武遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2014〕、頭城の上越市下馬場遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2005〕などで鉄石英の玉作関連遺物が確認されている。鉄石英産管玉の生産地との交流で、信濃との結び付きを想定することは可能である。

また、近年の研究状況からガラス玉・鉄など日本海を舞台とした流通も注目される。越後では2期に鉄製品の出土が多くなるが、分布の中心は頭城である。鉄器の伝来については、日本海側をリレー方式による伝播とする意見はあるが、筆者は上越市裏山遺跡の鶴・鉢先の存在などから、北陸を飛び越えた北九州あたりからの直接の伝播も想定したいとした〔滝沢 2014〕。越後は弥生後期において鉄製品を受容できる立場にあり、信濃への鉄の経由地としても重要なルートと考えている。ガラス小玉も同様であろう。2期に入って信濃に越後を中心とした北陸東部系土器が流入する要因の一つに、鉄・ガラス小玉など日本海経由で流通するものの動きと一致すると考える。一方で、信濃に多い鹿角装鉄剣が信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡で確認できる。本遺跡で箱清水式土器が出土していることも調和的な状況と考えたい。

3期以降に越中の可能性がある土器の流入開始は、大きな変化と考える。3期の越後は集落数が激減する大きな画期である。日本海経由で流通する物資の流通の変化からも、信濃に越中あたりの土器が流入することも大きな要因と考える。

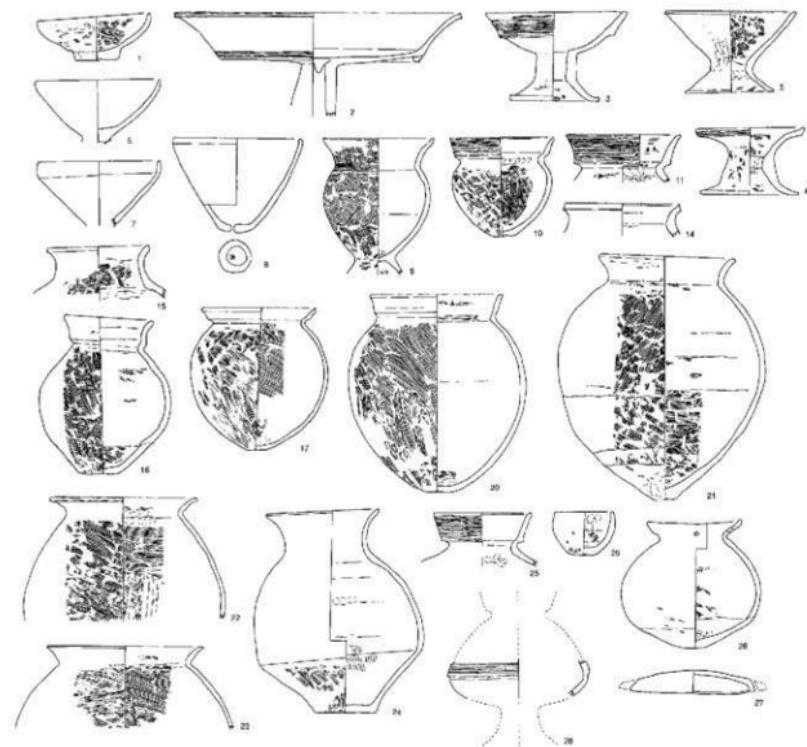
### (3) 古墳時代早期（4～6期）

少なくとも5期に入ると信濃の北陸系土器の分布域は拡大し、出土量が増加する。一方で、越後の信濃系土器は信濃川流域にも分布はするが頭城に集約され、特に釜蓋遺跡に集中するなど、大きな傾向差として捉えられる。引き続き越中の土器と想定されるものも多いが、一方で上越市釜蓋遺跡でも北陸南西部の月影壺が色濃く分布するなど、越中との区分が困難なものも多い。ただし、前章でも指摘したとおり、越中に比較的色濃い細別器種が存在することも確かである。このことについて、高地性環濠集落の環濠埋没時期にその変化を求めたことがある〔滝沢 2009〕。すなわち、能登と加賀国境付近の大海上西山遺跡〔高松町教委 1988〕、信越国境の斐太遺跡矢代山B地区、越後と会津国境とは言えないまでも、越後平野北東端には新潟市古津八幡山遺跡の環濠が埋没するのが3期である。この時期に何らかの大きな動きがあったものと考えている。ただし、4期以降にも環濠集落は独立低丘陵・平地で存続しており、上越市釜蓋遺跡、刈羽村西谷遺跡、長岡市横山遺跡がそれにあたる。これらの環濠の埋没は5期と考えている。

一方で、信濃の環濠集落の状況はどうか。最も新しい環濠集落・高地性環濠集落は中野市がまん淵遺跡である〔長野県教委・県埋蔵文化財センター 1997b〕。周辺との比高約 15～20 m で、部分的な調査のため環濠の範囲は明確ではないが、推定される環濠の範囲は長さ約 180 m、幅約 50 m 程度となろうか。環濠とされる SD 1 出土土器は3期頃で、環濠の埋没時期は4期を射程にいたった時期が想定されている〔土屋 1998〕。成立要因については、善光寺平北部から直江津に続く国道 18 号線沿いにあること、がまん淵遺跡の存続した前後の時期に北陸系土器群が善光寺平北部に流入することから、箱清水土器文化圏内の諸事情よりも北陸地域などの対外的な諸事情により成立したものと予想されている。

がまん淵遺跡の環濠埋没時期が3期とすれば、信越国境の越後側の斐太遺跡、会津との境界にある古津八幡山遺跡、西の越との国境付近の大海上西山遺跡と同時期となる。信濃系土器に不案内なため、環濠埋没時期を限定できないが、仮に4期であったとしても、北陸系土器の流入が一挙に増加する一方、信濃系土器が頭城を中心に分布する状況と関連するようと考える。

当期に北信あたりで散見される、第9図七瀬遺跡第14号住居のくの字口縁・ハケ調整窓（1・2）の系譜を明確にできないが、越後あたりのものであろうか。かつて川村浩司氏は、くの字口縁で口縁端部に



第17図 長野県更埴市屋代遺跡群屋代地区14号住居跡出土土器(S=1/6)

面を持たないものも千種壺に含める見解を提示しており【川村 1993a】、このこととも関連しうるが、越後にも当期にこのような壺は存在しており、系譜の追求が必要な細別器種と考えている。

田嶋氏が触れていない資料として更埴市屋代遺跡群屋代寺地区14号住居跡に注目している。土器は北陸系土器が主体にすら見える（第17図）。竪穴建物も中央に炉を配し、四本柱など北陸の様相と一致する【更埴市教委 2002】。中山南形となる大型有段高杯（第17図2）は口縁有段部までの立ち上がりが内湾主



第18図 高杯と蓋(S=1/6)

体の能登に対し、外傾・盤状主体の越後・越中であることから【滝沢 2010】、能登的というよりは越中や越後・頸城的と考える。

同じく中山南形の可能性があるものとして、口径が小さいものが上越市大森遺跡【上越市教委 2010】で確認できる（第8図20）。越後では極めて例外的なものであるが、北信あたりで多い（第18図1～5）。在地と北陸系の折衷【鶴田 1994】と評価されているものであり、越後・越中からの情報をもとに北信で発達したものの逆輸入か、または頸城あたりの情報をもとに北信で製作されたのかの判断は保留するが、共有細別器種として両地域の交流を示すものと考える。東信・北部の上田市浦田A遺跡SB07の蓋（第18図9）にも注目したい。口縁部が特に深いもので、類例は越中に多い（第18図6～8 滝沢 2019）。数量が少なく、系譜を掘めていないため越中型として良いかは資料の増加を待たざるを得ないが、東信あたりへの波及ルートとして重要なものと考える。

5期でも後半ないしは6期頃を境に北陸南西部的な有段口縁擬凹線文甕や装飾器台（第15図36～38）は基本的に波及しなくなる。これは越後でも同様である。その要因として、越中・越後あたりの勢力による北陸南西部系の動きを止めることを想定した【滝沢 2009】。当期においても、以前指摘されていたような能登と断定できる資料の抽出は困難である。越後・越中あたりからの波及、北陸南西部の一時的な波及とその動きが止まるなど、目まぐるしく変化する時期と考えたい。

#### （4）古墳時代前期（7～10期）

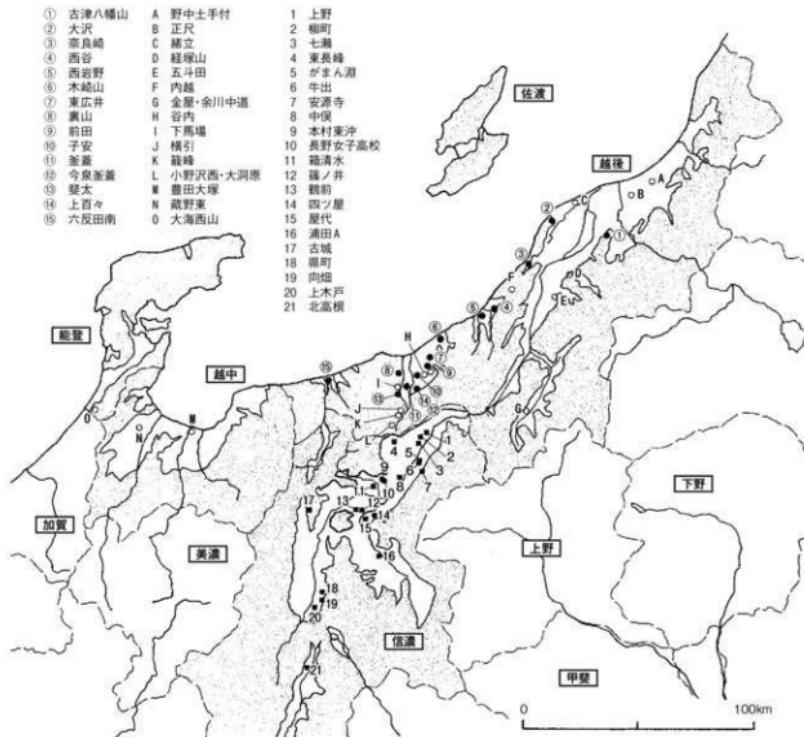
前章でも述べたとおり、北陸北東部系土器は存在すること、越後でも頸城を中心に信濃と共に共有の細別器種は存在しても、前段階とは質的に大きく異なることと考えている。両地域は大型古墳が出現する9期以前から日本海ルートの変更に伴い、より内陸ルートを重視した信濃と、日本海ルートを継続しつつ、内陸ルートの色調が濃いながらも完全に変換しない頸城とに区分され、交流は続けながらも徐々に質的に変化した段階と考えたい。

### 5 今後の課題

土器以外の要素を含めても、本稿の2～6期頃の信濃における北陸北東部系土器は、越後・越中あたりの土器が多く出土しており、特に5・6期では分布範囲の拡大とともに北信地域では移住を想定させるほど建物型式が北陸北東部系とできる遺跡も存在する。既に指摘されてきたことであるが、越中あたりからのルートを含め検索が必要と考える。

一方、越後では少ないながらも信濃系土器が2期を上限に5～6期までは確実に確認できる。時期が新しくなると、信濃系土器は頸城に限定されていく状況も確認できることから、信濃川流域というよりも陸路と関川の果たした役割が大きいと考える。これが7期以降には信濃系の認定の問題もあり、土器の交流は継続しながらもやや弱くなるように感じられる。信濃系土器は信濃のどの地域からの流入かも大きな課題である。土器胎土の検討ができていないが、信濃からの搬入と考えるもののか、在地の胎土と考えられるものが高田平野あたりに多い。このことを踏まえれば、信濃・北信に限定できないよう思える。

信濃との交流は、越後ルートか越中ルートかのカギを握るのが妙高山麓の遺跡と考える。冒頭でも述べたように、今回検討の対象から除外した地域でも特に注目されるのが頸城平野と信濃の中間地域に当たる遺跡の動向である。弥生時代後期は信濃系土器が主体で、5～6期には北陸系土器が定量確認されるようになる。特筆すべきは外来系土器の存在で、畿内系のタキ壺・布留式系壺の他、東海系S字状口縁壺又はその模倣と考えられる台付壺が目立つ。現状の編年観に照らすと、5～10期頃の状況と考えている。



第19図 越後と信濃の関連遺跡分布図

上越市龍峰遺跡の外來系土器を検討した川村浩司氏は、S字状口縁壺2点は塗町編年7群・同8~9群、布留式壺を塗町編年9~10群に位置づけ、岩崎卓也氏の「東國の要所要所に畿内系土器が流入」し「畿内を中心とする人間の動きの結節点に古式前方後円墳の成立との間には、何らかの関係があった」とする指摘【岩崎1984】を重視し、龍峰遺跡が岩崎氏の結節点か、単なる通過点か、分布域の中の一地点かは当地域の資料の蓄積をもって判断しなければならないとした【川村1988】。

この後、比較的距離が近い妙高市横引遺跡【新潟県教委・埋文事業団1996】では布留式系壺・S字状口縁壺が、妙高市大洞原遺跡【新潟県教委・埋文事業団1997】では、県内唯一となる庄内大和壺のほか、畿内系タタキ壺やS字状口縁壺が、小野沢西遺跡【新潟県教委・埋文事業団2004】では畿内系タタキ壺・S字状口縁壺・布留式系壺が出土している。頸城の平野部の遺跡で出土した畿内系タタキ壺・布留式系壺を含め、これらの搬入ルートは東海から信濃経由で頸城の平野部に流入するという見解が、新潟県教委・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団の報告書で多い<sup>3)</sup>。

一方で、かつて筆者は越後のタタキ壺・布留式系壺を集め、タタキ壺については北近畿とされる丹後・

丹波、近江経由の日本海ルートを想定した。布留式系甕は、頭城の下割遺跡・津倉田遺跡の状況から信濃地域への搬入路として重要な意義をもつとした上で、海岸ルートのみならず山間ルートの存在も大きいとした〔鵜沢 2007〕。この時期、加賀産の布留式系甕の全国の拡散〔米田 1998など〕に対しての意見であり、本県山間部の魚沼地域の魚沼川流域に位置する南魚沼市金屋遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2006a〕でも確認されることから、海岸ルートだけに限定できないとしたことによる。胎土・形態等を含めて分析を続けたいが、少なくとも畿内系とされるタタキ甕は本稿の4・5期と7期を中心に認められることや畿内で拡散時期、太平洋側の分布状況から2007年の見解を修正する必要は感じていない。また、布留式系甕については日本海ルートのみとは考えていないが、他地域の出土状況や越後系土器の動態などから、本県の報告書で主体的な意見である東山道（東海・信州・関東地方）を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したとの印象は持ち合わせていない。確かに東海系土器は長野・北信地域に色濃く分布する一方で、越後全域では数量が少ない。東海系S字状口縁甕については東山道経由、長野から頭城平野を通じて越後への伝播はあったと考えるが、畿内系は日本海⇒頭城⇒信濃とルートで、土器系統別に伝播したもののが妙高山麓で合流するような伝播は想定できないか。青山博樹氏が指摘するチマタのような状況である〔青山 2014〕。引き続き検討を進め、より具体的な根拠を示したい。

今回、直接の検討対象から除外した信越国境付近でも妙高山麓の大洞原C遺跡、小野沢西遺跡、龍峰遺跡などは、信越の関係のみならず東日本における土器の移動を考える上で極めて重要な遺跡と認識している。いずれも建物跡等、集落の痕跡は未確認であるが、時期的に信越のみならず、畿内・東海との関係も読み取れる可能性を含む。細別時期毎に信濃系が圧倒的に多い弥生後期前半（1期）から北陸北東部系の流入（2期）を経て、北陸北東部系主体ないしは信濃系との拮抗に東海系・畿内系が交わる地域の印象をもつ。現状では、検討未了のため扱うことができなかったが、春日真実氏〔春日 2001〕や笹沢正史氏の変遷案〔笹沢 2005b〕を参考に整理したいが課題も多い。信越国境付近にあり、新潟県の大洞原遺跡・小野沢西遺跡・龍峰遺跡、長野県の川久保遺跡<sup>4)</sup>〔長野県埋蔵文化財センター 2004〕の状況は、両県間の関係を敏感に反映した極めて重要な遺跡として、今後も検討を続けたい<sup>5)</sup>。

## 6 おわりに

信濃系土器の越後の状況については、交流の玄関口となる頭城でも上越市の論考で的確にまとめられている。弥生時代中期後半の信濃・栗林式土器は県内でも広範囲に分布し〔笹沢 2009〕、上越市吹上遺跡では多量である〔上越市教委 2006ほか〕。吹上遺跡の中期後半の土器は吹上Ⅰ期・Ⅱ期に区分されるが、北陸・小松式系統の土器と信濃・栗林式土器の比率は、吹上Ⅰ期では小松式系統7～8割：栗林式2割前後であるが、吹上Ⅱ期では逆転し、小松式系3割前後、栗林式6～7割となる〔笹沢 2006〕。このことについて笹沢浩氏は、吹上Ⅰ期では玉作が盛んに行われていたこと、山陰・瀬戸内・畿内・東海地方の広範囲の遺物が認められることから、日本海沿いに海の道が積極的に利用され、吹上産の玉類が「海の玉の道」で西日本や東海に、中部高地の玄関口となる「陸の玉の道」で運ばれていたとする。吹上Ⅱ期には信州栗林式人の玉の趣向が大きく変化し、佐渡産の鉄石英（赤色）を好んだことから、吹上遺跡の玉作の規模の縮小、佐渡産の管玉の運搬中継地としての役割に変化し、栗林式人が大挙して入って来たとする（笹沢浩 2004）。その後、地域圏に関する新たな知見は得られていないが、重要な指摘と考えている。

それでは、その後はどうに変化するか。栗林系土器が日本海側にも幅広く分布し、北は越後平野の最奥部、南は北陸南西部にまで達するのに対し、箱清水系は頭城の現・糸魚川市あたりが最南地となる。

このような大きな変化について、これまで、あまり語られることがなかった本県における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器について集成を行い、その分布状況が示す意義について考えてきた。明らかになつたことは多くないが、下記の点が確認できた。

- ・信濃系土器は2期から確認できる。分布は2～3期あたりまでは信濃川流域や柏崎平野、頭城の高田平野や糸魚川市に及ぶが、4期以降は頭城が主体となる。器種は壺が圧倒的に多く、壺・高杯は頭城の高田平野に限定される。各器種が揃い、数量が多い信濃の北陸系土器のあり方とは大きく異なる。
- ・2～3期に信濃系土器の胎土は、信濃系と区分が困難なものが多く、器形・文様を模した在地産とは考え難い。また、出土遺跡は、信濃で需要が高まった鉄石英製玉類を作っていた可能性が高い。鉄製品を含め日本海を舞台とした流通網との関連が予想される。一方で、4～5期以降に信濃系土器が頭城でも釜蓋遺跡では、信濃系の土器胎土とは考え難いものもあり、在地産の可能性があるものが一定量存在する。また、釜蓋遺跡に集中することについては、北信の環濠集落の解体など信濃側の秩序の変更が予想され、北陸南西部系土器の流入、北陸北東部系土器の大量出土とも関わる可能性がある。
- ・一方で、5～6期頃には信濃系の一部のみ取り入れた可能性がある土器が信濃川下流域や北部の阿賀北でも確認されている。ダイレクトな交流ではないものの、完全な断絶とは言い難い。
- ・7期以降は信濃系の抽出は困難であるが、そのものの流入は前段階に比べて多くない。特定要素の一部を取り入れた状況となり、やがて9期頃には大きく変換したと予想する。
- ・信濃の北陸系土器については、これまでの笹沢浩氏や田嶋明人氏が指摘しているとおり、北陸北東部でも越後の土器が多いと考えるが、3期頃には北陸北東部でも越中に多い細別器種が確実に分布しており、少なくとも5期には北陸南西部のものが波及している。ただし、北陸南西部の土器は、7期には判然としなくなり、再び北陸北東部でも越後あたりの土器が主体と考える。
- ・越中や北陸南西部系土器の波及経路については明確にできないが、少なくとも5～6期あたりには信越国境付近の新潟県妙高市あたりから長野県信濃町あたりで北陸北東部系・信濃系が拮抗して、畿内系や東海系が色濃く分布する特異な様相を呈する。頭城と北信はこの付近を経路した交流を摸索したいが、現状では明確にできない細別器種も多いことからここでは保留し、検討を継続したい。

本稿を作成するにあたり、下記の方々から多大のご教示・ご配慮を賜りました。文末ではありますが、記して感謝申し上げます。（五十音順敬称略）

石黒立人、田嶋明人、土屋 肇、中島義人、久田正広、福海貴子、山岸洋一、湯尾和広、渡邊朋和

## 註

- 1) 青木一男氏は、壺B 3類の出現を重要な画期とし、1期1・2段階を箱清水I式、1期3～6段階を箱清水II式とし【青木1999】、從来設定されてきた箱清水I式・II式とは異なる概念とした。
- 2) 川村浩司氏は、9期頃に100 mを超える古墳が「古代の「道」に近い領域、あるいは「道」まではいかなくとも完全に「国」を超える領域の支配者の墓の可能性がある」とし、「越後の北部（阿賀川以北）は（略）、東北側の領域に取り込まれたとみることはできないでだろうか」とする【川村1996b】。現状では頭城の古墳の規模は30 m台であり、9期頃の古墳は明確でない。川村氏の論考後、越中では100 mを超える柳田布尾山古墳の存在が明らかになり【氷見市教委2000】、北信の森将軍塚古墳【更埴市教委1992】と共に頭城が取り込まれたとする想定も可能となろう。ただし、筆者は2000年代以降の調査で明らかとなつた土器・集落から、越後・頭城は、信濃または越中に取り込まれたようには見えない。未発見の古墳の存在を想定したい。
- 3) 妙高市大洞原遺跡の報告書で三ツ井朋子氏は、東海・畿内・近江系土器は客体的な存在とし、東海系土器の当地域への流入は赤坂次郎氏の第一次拡散時期【赤坂1990】を契機に越後に波及し、この際に畿内・近江系土器を作つて来たと考えられるとする。大洞原C遺跡の位置する妙高山東麓は、東海地方から北陸地方へ通じるルートの一つであり、このルート上に位置する本遺跡は近畿地域との交流を深めながら、東海系の第一次拡散時期により波

- 及した土器を積極的に取り入れたとした【三ツ井1997】。東山道ルートで、東海・畿内・近江系土器が連動して本地域にもたらされたともされ、当時としてはかなり踏み込んだ解釈を提示している。
- 直近の例としては、上越市下割遺跡での尾崎高宏氏の指摘がある。畿内系タキ甕の出土量が県内他遺跡を圧倒する下割遺跡では、布留式系甕も一定量出土している。時期が異なるタキ甕と布留式系甕の畿内系甕は、日本海側では越中東部を境に分布が確認されておらず、主に太平洋側を中心に分布しているとし、東山道（東海・信州・関東地方）を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したものと考えられるとする【尾崎2011】。
- 4) 長野県信濃町の川久保遺跡は複数年調査が行われているが、トンネル坑口直下の斜面部と低地部の2004年度報告では自然流路が中心の遺構は判然とせず、織文時代～中世まで幅広い時代の遺物が出土しており、本稿の5～10期、古墳中・後期が特にまとまる。北陸北東部系・信濃系を主体に、東海系S字状口縁甕は口縁部で7個体。畿内系タキ甕も2点、布留式系甕3点が確認されているなど【長野県理文センター2004】。土器様相は妙高市小野沢西遺跡や大洞原C遺跡などに類似する。大洞原C遺跡・小野沢西遺跡とともに、調査対象範囲内に建物跡等をはじめとした遺構が明確ではないことから、調査区域外に集落が存在すると指摘されている【三ツ井1997、土橋2004】。
  - 5) 例えば、小野沢西遺跡の報告番号128・129は土崎由理子氏が甕G類とし、口縁部が強く外反する薄手で精緻な作りであることから山陰の中期中業・土作式【長井1996】に類似し、「山陰系の甕の搬入品・模倣品」「おそらく県内初出」とした【土橋2004】が、大洞原C遺跡で系統不明とされた甕（報告番号55）と形態・胎土・胸部上位のミガキ状調整など酷似する。大洞原C遺跡の甕について、春日真実氏は古墳時代前期後半【春日2001】、野村忠司氏は弥生中期後半の畿内以西【野村2005】とする。特徴に乏しい、くの字口縁甕が時期的な一括性の乏しい出土状況の場合、その位置付けが極めて困難なこともあります、引き続き検討を継続したい。

## 引用参考文献

（信濃系土器出土遺跡報告書等）

- 新井市教育委員会 1985「昭和59年度新井市遺跡調査報告書－上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡」
- 柿崎町 2004「柿崎町史」通史編
- 柏崎市教育委員会 2019「西岩野2」 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 刈羽村教育委員会 1992「西谷遺跡」 刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 筑沢正史・滝沢規朗 2002「2子安遺跡」[上越市史]資料編2 考古
- 三和村教育委員会 2003「東広井遺跡発掘調査報告書」 三和村埋蔵文化財調査報告書第12集
- 上越市教育委員会 1999「上江保倉地区は場整備事業関連発掘調査報告書（八幡遺跡・前田遺跡）」
- 上越市教育委員会 2003「金蓋遺跡範囲確認調査報告書」
- 上越市教育委員会 2009「子安遺跡」
- 上越市教育委員会 2010「今泉釜蓋遺跡」
- 上越市教育委員会 2013「釜蓋遺跡確認調査概要報告書」1
- 上越市教育委員会 2015「釜蓋遺跡範囲確認調査報告書」2
- 滝沢規朗 1994「新井市斐太遺跡群の出土土器について」[新潟考古]第5号 新潟県考古学会
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994「一之口遺跡東地区」新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000「裏山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002「奈良崎道路」新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008「六反田南遺跡・前波南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010「六反田南遺跡II」新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集
- 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2016「六反田南遺跡V」新潟県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 新潟市教育委員会・(公財)新潟市埋蔵文化財調査事業団 2014「史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書－第15・16・17・18・19次調査－」
- 新潟市教育委員会 2004「八幡山遺跡群発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－」
- 卷町 1994「大沢遺跡B地区」[卷町史]資料編1 考古
- 斐太歴史の里調査団・妙高市教育委員会 2005「斐太遺跡矢代山B地区」斐太歴史の里調査報告書第3集
- 斐太歴史の里調査団・妙高市教育委員会 2006「矢代山塚墓群」斐太歴史の里調査報告書第5集  
(論考等)
- 相田泰臣 2014「第VI章第1節 古津八幡山古墳築造以前」[史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書－第15・16・17・18・19次調査－] 新潟市教育委員会
- 青木和明 1984「箱清水土器の編年予察」[長野考古学会誌]48
- 青木和明・飯島克也・若狭徹 1987「箱清水土器と椎式土器」[弥生文化の研究]第4巻 雄山閣

- 青木一男 1993「土器様相の素描」『長野県考古学会誌』69・70
- 青木一男 1997「土器群の動態からみた御厨敷期」『長野県考古学会誌』82
- 青木一男 1998「第4章 成果と課題」「上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・縄文6 弥生後期・古墳前期」(財)長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年(メモ)」「長野県の弥生土器編年」長野考古学会弥生部会
- 青木一男 2001「倭國大祓前後の箱清水式土器様式圖」『信濃』53-11
- 青山博樹 2014「列島東北部の交流拠点とその性格」「久ヶ原・弥生町期の現在」西相模考古学研究会記念シンポ資料集
- 赤堀 仁 1994「第7節 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器様相」「県道中野豊野線バイパス 志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)長野県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990「遡回式土器」「遡回遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 安立 聰 2005「魚沼地域における古墳出現期の様相」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第1分冊 新潟県考古学会
- 荒木勇次 1996「大沢遺跡B'地区 出土遺物」「巻町史」資料編1 考古 巷町
- 岩崎卓也 1984「古墳出現期の一考察」「中部高地の考古学III」
- 岩崎卓也 1996「中部山岳地方の4世紀の土器」「日本土器辞典」雄山閣
- 宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」「長野県埋蔵文化財センター紀要」2
- 大木伸一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」「研究紀要」38 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2011「第Ⅷ章2 茶臼系窯(タキ窯・布留系窯)」「下削遺跡Ⅲ」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第217集)
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加治川村教育委員会 2004「野中土手付遺跡」
- 春日真実 2001「新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」「研究紀要」第3号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村浩司 1988「新潟県龍峰遺跡出土の外來系土器3例」「新潟考古学談話会会報」第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1993a「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」「環日本海地域比較史研究」第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b「北陸北東部の古墳出現前後の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 1996a「弥生後期における北信濃と北陸」「考古学と遺跡の保護」甘柏健先生追悼記念論集刊行会
- 川村浩司 1996b「越の土器と古墳の展開」「越と古代の北陸」名著出版
- 川村浩司 1999「庄内並行期における上野出上の北陸系土器について」「庄内式土器研究XIV」庄内式土器研究会
- 桐原 健 1959「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」「考古学雑誌」45-1 日本考古学会
- 桐原 健 1980「信越両国間交流についての考古学的所見」「信濃」21-4
- 黒崎町教育委員会 1994「諸立C遺跡発掘調査報告書」
- 計良由松 1950「佐渡における新都城文化のはじまり 附玉作遺跡発掘調査」
- 更埴市教育委員会 1992「史跡 森将軍塚古墳」
- 更埴市教育委員会 2002「尾代池跡群附松古舎」
- 坂井秀弥 1984「新潟県の様相」「第5回三県シンポジウム 埋蔵文化財調査報告書」
- 川村浩司 1993「古墳出現前における越後の土器様相」「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」
- 笹沢正史 2005a「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第1分冊 新潟県考古学会
- 笹沢正史 2005b「小野沢西遺跡」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第2分冊 新潟県考古学会
- 笹沢正史 2006「第Ⅷ章まとめ」「吹上遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 笹沢正史 2009「新潟県出土の栗林式土器」「新潟県の考古学II」新潟県考古学会
- 笹沢 浩 1970「箱清水式土器の再検討」「信濃」22-4
- 笹沢 浩 1988「4古代の土器」「長野県史」考古資料編全1巻(4)
- 笹沢 浩 2004「第3章 弥生文化と農耕社会」「上越市史」通史編1 自然・原始・古代 上越市
- 三条市教育委員会 1999「内野手遺跡・経塚山遺跡」
- 上越市教育委員会 2006「吹上遺跡発掘調査報告書」
- 上越市教育委員会 2009「律有南部第2地区は場整備事業地内発掘調査報告書5 (谷内遺跡・鶴宮田遺跡)」
- 上越市教育委員会 2010「三和南部地区は場整備事業地内発掘調査報告書 (大森遺跡)」
- 高松町教育委員会 1988「大海西山遺跡」
- 滝沢規則 1993「越後における古墳出現前後の土器様相－縁の種別構成比と内面調整を中心に－」「新潟考古学談話会会報」第11号 新潟考古学談話会
- 滝沢規則 2005a「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」「新潟考古」第15号 新潟県考古学会

- 滝沢規朗 2005b「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字壺について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2006「口縁端部上端がつまみ上げられた有段高杯－古墳出現前に認められる一タイプの雜感」『新潟県考古学学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2007「新潟県におけるタクヒ甕・布留式系壺」『研究紀要』第5号（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2008「旧紫雲寺型周辺の西川内南遺跡出土土器について－阿賀北における古墳時代前期の土器検討－」『三面川流域の考古学』第6号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009「新潟県の月影甕・外來系甕の検討2－」『新潟県の考古学』II 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010a「古墳出現後に盛行する中山南型式の高杯について－北陸北東部固有の大型・有棱・身の浅い高杯についての一試論』『新潟県の考古学』第21号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010b「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012a「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）－細別器種毎の変遷について－」『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012b「古墳時代前期の身の浅い鉢－越後の事例から－」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2014「越後・佐渡における鐵器と青銅器－伝來の系譜と性格－」『古代文化』第66卷第4号（財）古代学協会
- 滝沢規朗 2015「北陸北東部における屈折脚高杯の様相－越後を中心に－」『東生』第4号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2016「弥生・古墳時代の土器の移動－上越と北信の状況－」『地方史研究』第66卷第4号 地方史研究協議会
- 滝沢規朗 2017「魚沼地域の弥生時代後期～古墳時代前期」『三面川流域の考古学』第15号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2019「北陸における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について－東の越と西の越－」『東生』第8号 東日本古墳確立期土器検討会
- 田嶋明人 1988「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡I』 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1994「北陸南西部の古墳確立期の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」 日本考古学協会新潟大會実行委員会田嶋明人 2003「大型迷物群造営期の土器様相」「石川県万行遺跡発掘調査概報」 石川県七尾市教育委員会
- 田嶋明人 2006「「白江式」再考」「吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史」桂書房
- 田嶋明人 2007「法仏式と月影式」「石川県埋蔵文化財情報』第18号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年」東日本を対象とした検討（その1）『石川県埋蔵文化財情報』第20号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009a「古墳確立期土器の広域編年」東日本を対象とした検討（その2）『石川県埋蔵文化財情報』第21号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009b「古墳確立期土器の広域編年」東日本を対象とした検討（その3）『石川県埋蔵文化財情報』第22号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2015「東日本にみる9・10期の高杯」「東生」第4号 東日本古墳確立期土器検討会
- 鶴田典昭 1994「第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14（鶴前遺跡）」（財）長野県埋蔵文化財センター
- 千野 浩 1989「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」「信濃」41-4
- 千野 浩 1993「本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について」『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』長野市共育委員会
- 土屋 積 1993「長野県域における集落・墳墓の概要」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 土屋 積 1998「第6節 成果と課題」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14」（財）長野県埋蔵文化財センター
- 柄木英道 1991「石川県（阿賀・能登地域）の土器編年と東海系土器」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第1分冊 東海埋蔵文化財研究会
- 土崎由理子 2004「第V章まとめ」「小野沢西遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長井教秋 1996「土居窯式土器」「日本土器辞典」 雄山閣
- 長岡市教育委員会 2000「五斗田遺跡」
- 中郷村教育委員会 2000「龍峰遺跡発掘調査報告書II -遺物編-」
- 長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター 1994a「鶴前遺跡」（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17
- 長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター 1994b「栗林遺跡・七瀬遺跡」（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

- 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1997a『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16(篠ノ井遺跡群)』
- 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1997b『飯田古墳敷地跡・玄照寺遺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田羅窯跡・牛出古窯遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
- 長野県埋蔵文化財センター 2004『一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書4 川久保遺跡』
- 長野県考古学会 1999『長野県弥生土器集成図録』
- 長野市教育委員会 2014『浅川扇状地遺跡群・長野女子高等学校校庭遺跡』
- 新潟県教育委員会 1979『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集
- 新潟県教育委員会 1983『内越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1997『大洞原C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第85集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004『小野沢西遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『下馬場遺跡・細田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006a『金星遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第155集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006b『野中土手付遺跡・砂山道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第164集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006c『馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2014『大武遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第249集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『余川中道遺跡Ⅱ・金星遺跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第253集
- 西川修一 1991「関東のタキ堀」『神奈川考古』第25号 神奈川考古同人会
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993「東日本における古墳出現過程の再検討」
- 水見市教育委員会 2000『柳田布尾山古墳 第1・2次調査報告書』
- 平移大樹 2014「IV 遺物」『浅川扇状地遺跡群・長野女子高等学校校庭遺跡』長野市教育委員会
- 前島 卓 1993『北陸系土器の動向』『長野県考古学会誌』第69・70号 長野県考古学会
- 三木 弘 2014「2・3世紀の大阪浜東岸と中部高地」『邪馬台国時代の甲・信と太和』香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」
- 三井朋子 1997「4.まとめ A.弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について」「大洞原C遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第85集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 森本幹彦 2006『信濃北部の円形周溝墓について』『物質文化』81
- 山下誠一 1999『飯田・下伊那の弥生土器』『99シンポジウム「長野県の弥生土器編年」』長野県考古学会弥生部会
- 米田敏幸 1998『駿土觀察と庄内式土器の研究』『庄内土器研究』X V 庄内土器研究会

# 新潟県における未発見城柵研究の現状と課題

## - 第46回古代城柵官衙遺跡検討会の補遺 -

田 中 祐 樹

### 1 はじめに

去る令和2年2月22日、23日に開催された第46回古代城柵官衙遺跡検討会では、「未発見城柵の調査・研究の現状」をテーマに、東北と新潟県の未発見城柵にかんする研究の現状と課題が議論された。筆者は事務局より「越国の未発見城柵」という課題を与えられ、下記の3点に焦点を当てて概要を報告資料としてまとめた【田中 2020】。第一に、これまでの城柵探索を含めた調査・研究史。第二に、発掘調査で明らかになった城柵造営前後（7世紀中葉～8世紀前半頃）の城柵・官衙関連遺跡の状況。最後に遺構・遺物からみた城柵造営前後の地域動向にかんするこれまでの研究成果の報告である。だが、紙幅の都合で割愛せざるを得ない部分が多かったことから、本稿では補遺という形で、改めて新潟県における未発見城柵研究の現状と課題について私見を述べることとする。

### 2 未発見城柵の概要

越国の未発見城柵とは、すなわち「渟足柵」「磐舟柵」（場合によっては都岐沙羅柵を含む）を指し示す（第1図・第1表）。だが、いずれの城柵も考古学的な見地からは、その実態は明らかではなく、その構造、推定地さえも確固たる根拠に基づいたものとはいえない。そこでまずは、未発見城柵の概要について把握されている知見について改めて触れておきたい。

#### （1）渟足柵

『日本書紀』大化3（647）年条「造渟足柵、置柵戸。老人等相謂之曰、數年鼠向東行、此造柵之兆乎。」  
越後城司威奈大村墓誌銘（707）「越後城」

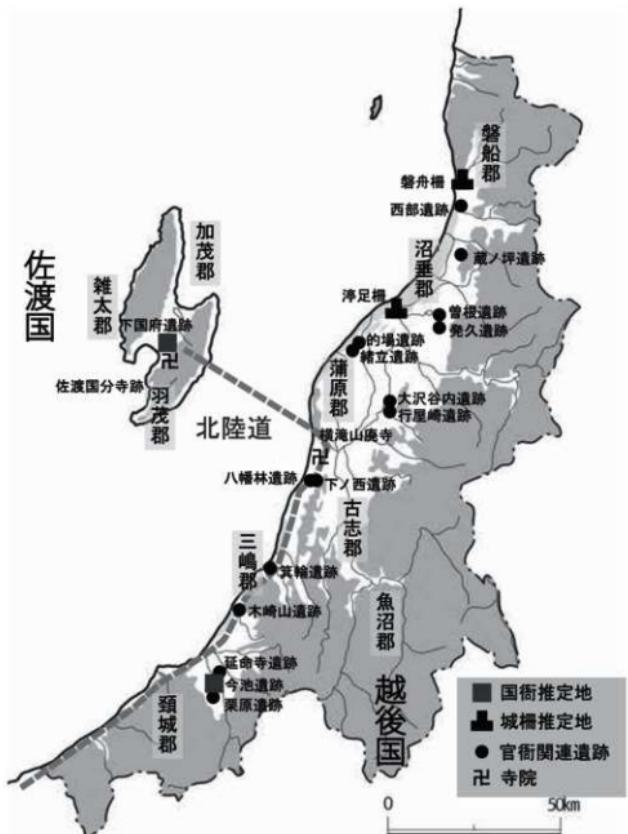
八幡林遺跡第2号木簡 養老（717～724）「沼垂城・養老」

『日本書紀』の記述では647年造営とされる。これまでの研究では阿賀野川右岸の河口付近（新潟市東区）に所在したとする意見が有力であるが、関連する遺構等は確認されていない。

平成2年、八幡林遺跡「沼垂城」木簡（第2号木簡）の発見によってその存在が史実である可能性が高まった。すなわち690年に越国が越前・越中・越後・佐渡の四国に分割され、越後国が成立するが、越後国は渟足柵に置かれたために「越後城」と呼ばれた可能性が高い。その後、和銅7（712）年に出羽郡が出羽国として分立し、越後国衙が頃郡に移動した後には、郡名である「沼垂」を冠して「沼垂城」と呼ばれるようになったと考えられる。

渟足柵が果たした役割として、設置当初には日本海側の蝦夷政策の拠点として、最前線の磐舟柵への支援、阿倍比羅夫に代表される北方遠征の拠点・支援、地域再編の拠点、柵養蝦夷への対応などが挙げられる。その後、出羽国が分立し、対蝦夷の最前線から退いたのちには、最前線である出羽柵（秋田城）への後方支援的な役割を果たしたものと推察される。

また、近年では小林昌二によって、1年違いで造営された渟足柵と磐舟柵が、内水面で繋がった自然環境をもとに同時計画された城柵（兄弟の柵）であるという見解が提出されている【小林ほか 2004】。



第1図 新潟県の城柵・官衙関連遺跡

第1表 新潟県の城柵・官衙関連遺跡一覧

遺跡名	所在地	7C2	7C3	7C4	8C1	8C2	8C3	8C4	9C1	9C2	9C3	9C4	10C	遺跡の性格	文献
下国府遺跡	佐渡市													佐渡国衙が	足木ほか2011他
佐渡國分寺跡	佐渡市													佐渡國分寺	川村2009他
西部遺跡	村上市													国闘争の政治工房	小林2010
越ノ坪遺跡	胎内市													川津	平川ほか2002
曾根遺跡	新潟田市													手工業生産拠点	川上1997他
発久遺跡	阿賀野市													「櫻見」木屋、兵庫か	川上ほか1991
大沢谷内遺跡	新潟市													城柵支援	新潟市教委2012
種立遺跡	新潟市													的場遺跡と関連。律令祭祀	遠田ほか1994
的場遺跡	新潟市													水産物の捕獲、加工、往々祭祀	小池ほか1993
行星崎遺跡	田上町													律令祭祀。城柵支援	田畠ほか2015
横瀬山廃寺	長岡市													越後古の寺院	寺村ほか1985他
八幡林遺跡	長岡市													創建時には城柵の可能性	田中耕ほか1992他
下ノ西遺跡	長岡市													古河公家の開拓	寺村ほか1994他
延命寺遺跡	新潟市													古河公家の別院か	戸田ほか1992他
木崎山遺跡	上越市													飯城御家の別院	戸田ほか1992他
延命寺遺跡	上越市													飯城御家の出先機関	山崎ほか2008
今池遺跡	上越市													越後守代か	坂井ほか1994
東原遺跡	妙高市													鍋城郡か	高橋ほか1994他

## (2) 磐舟柵

『日本書紀』大化4（648）年条「治盤舟柵、以備蝦夷。遂遷越與信濃之民、始置柵戸」

『続日本紀』文武2（698）年条「丁未、令越後國修理石船柵」

『続日本紀』文武4（700）年条「己亥、令越後佐渡二國修營石船柵」

1986年刊行の『新潟県史』通史編一原始古代での記述に従えば、『日本書紀』では648年造営とされ、文武年間に二回の脩造記事があることから、この段階までは存続したことがわかる。古くから旧岩船潟周辺（村上市）に設置されたと考えられており、石船神社や諸上寺付近など推定地には諸説あるが、これまで明確な遺構は確認されていない。磐舟柵は、日本海側の対蝦夷対策の最前線として渟足柵とともに造営され、その役割は、出羽国が分立し、対蝦夷政策の最前線から退くまで続いたと考えられる。

## (3) 都岐沙羅柵

『日本書紀』齊明4（658）年7月4日条。「甲申、蝦夷二百餘詔朝獻、麥賜幣給有加於常。仍授柵養蝦夷二人位一階、渟代郡大領沙尼具那小乙下或所云授位二階使檢戸口、少領宇婆左建武、勇健者二人位一階、別賜沙尼具那等鮒旗廿頭、鼓二面、弓矢二具、鎧二領。授津輕郡大領馬武大乙上、少領青蒜小乙下、勇健者二人位一階、別賜馬武等鮒旗廿頭、鼓二面、弓矢二具、鎧二領。授都岐沙羅柵造岡名位二階、判官位一階。授渟足柵造大伴君稻積小乙下。又詔渟代郡大領沙尼具那、檢叢蝦夷戸口與虜戸口。」

齊明4（658）の「都岐沙羅柵造に位二階を、判官には位一階を授ける」という内容の位階記事として日本書紀に登場する。この段階には都岐沙羅柵が設置されていたことは間違いないが、柵の位置、存続年代については不詳である。都岐沙羅柵比定地にかんする研究史をまとめた植松晚彦によれば、下記のとおり諸説が提示されている〔植松ほか2020〕。

佐藤慎宏：最上川河口の潟湖付近または旧山北町（現村上市山北）〔佐藤1978〕。

新野直吉：現在の新潟県と山形県の県境付近〔新野1986〕。

小野 忍：温海町（現鶴岡市）の木俣付近または、温海町の鼠ヶ関〔小野1994〕

加藤 稔：最上川河口の潟湖の近縁の地〔加藤1996〕

阿部義平：内陸部の米沢盆地の南陽・高畠付近〔阿部2006〕。

川崎利夫：鼠ヶ関、越後と出羽の境界かつ日本海に臨んだ場所〔川崎2009〕。

候補地説は、新潟県と山形県の県境地域に設置されたと考える見解（佐藤・新野・小野・川崎）と山形県北部の最上川河口付近を想定する見解（加藤）、内陸部の米沢盆地を想定する見解（阿部）に大別される。いずれの見解も論拠に乏しく、考古学的見地からのアプローチは皆無と言ってよい。

また、工藤雅樹は、都岐沙羅柵が第一次出羽柵であるとする見解を表明している〔工藤1998〕。阿倍比羅夫の遠征記事を参照し、朝廷側についた庄内地域の蝦夷を飽田蝦夷から保護するために設置したと考えている。

## 3 未発見城柵の調査・研究小史

主に考古学的見地からの調査・研究に主眼を置くが、前述のとおり城柵遺跡そのものの発見には至っていない。ここでは、未発見城柵をめぐる調査研究の経過について、画期となるトピック毎に詳述する<sup>1)</sup>。

### (1) 石榔堡と浦田山古墳群の調査（第3図）

昭和31年、村上市瀬波海岸の浦田山で失業対策の工事中に石組遺構（第1石榔堡）が発見された。この発見以前に、磐舟柵が浦田山周辺ではないかと考える意見があり、石組遺構が磐舟柵に関連する施設の

一部ではないかとされた。この発見を受け、村上市と新潟市は文化財保護委員会（現文化庁）に専門家の派遣を要請、国は文部技官であった斎藤忠を現地へ派遣し、現地調査をおこなった。斎藤は、石組遺構を自ら測量した上で、柵との関係を見極めるために慎重な調査が必要と指摘している。これを受け、翌年国庫補助事業として「磐舟柵跡」の調査がおこなわれることになった。調査は、文献班、測量写真班、地質調査班、遺物調査班、遺跡調査班の5班体制で進められ、新たな石組遺構（第2石櫓堡）を発見、これらは遺構が磐舟柵に関連する防衛施設として「石櫓堡」と名付けられた〔新潟県教育委員会 1962〕。この調査は、今まで城柵関連の遺構として調査された唯一の事例である。

「石櫓堡」の発見から約30年後の平成元年より、甘柏健を代表とする新潟大学による再測量調査・発掘調査が実施された〔甘柏ほか 1996〕。調査の結果、「石櫓堡」とされた石組遺構が、古墳時代後期の横穴式石室であることが判明、「浦田山古墳群」と改称されるに至った。特に第2石櫓堡とされた第2号墳は、北部九州系の横穴式石室に類似した特徴を有しており、若狭湾沿岸や能登半島からの強い影響のもと造営された可能性が指摘された。その伝播には日本海を経由するルートが想定されるが、このルートは図らずも阿倍比羅夫の遠征ルートをトレースするかのようであり、興味深い。結果として、石組遺構が古墳石室であることが判明したことで、城柵関連施設という見解は否定されることとなった。だが、文献、考古、地質といった異なる分野による調査は、その後の城柵探索に対する学際的研究の先駆けとなった点においてその意義は決して小さくない。なお、「石櫓堡」の発見と浦田山古墳群の調査については、閑雅之によってその学史的意義がまとめられている〔閑 2011〕。

## （2）八幡林遺跡の調査と沼垂城木簡の発見

平成2年に和鳥村（現長岡市）教育委員会が、国道116号バイパス建設に伴い八幡林遺跡の発掘調査を実施した。調査の結果、A地区から「沼垂城・養老」「郡司符」と記された木簡（第一・二号木簡）が出土した。前述したように、木簡発見によって渟足柵（のちに沼垂城）が史実であることが確認されたことで、渟足柵・磐舟柵探索が新潟県の古代を考える上で、重要な研究課題となつた。本遺跡からは、木簡だけでなく、「石屋木」「大領」などを記した多量の墨書き土器、奈良三彩、風字硯などの希少な遺物、四面庇付建物や木道といった遺構が検出されたことで、注目を集めた。

これらの成果を受け、全県規模での国史跡への指定に向けた保存運動が進められ、平成6年4月15日に貴重な古代官衙遺跡であることから国史跡へ指定された。また、発掘調査で得られた成果によって、その後の保存運動が市民レベルでの展開に繋がつた。古代城柵探索という新潟県の古代史上の重要課題に対して、いかに県民が高い関心を寄せているかが窺える。さらには、この発見をきっかけに県内各地で城柵関連の講演会やシンポジウム、博物館での企画展、各研究会の活動が活発となり、城柵探索への機運が高まり後述する小林昌二らの研究グループによる学際的調査・研究の足掛かりとなつた。

## （3）小林昌二による渟足柵探索に向けた学際的調査と研究

新潟大学の小林昌二を代表とする科学研究費補助金基盤研究「前近代の潟湖河川交通と遺跡立地の地域史的研究」は、城柵探索を目的とした初めての組織的な試みであり、考古学、文献史学、地理学、地質学、民俗学といった歴史学とその周辺分野による学際的な取り組みであった〔小林ほか 2004〕。

現段階で渟足柵発見には至っていないものの、研究を通じて城柵探索への有効な方法が確立されるなどその成果は多岐に及ぶ。なかでも今後の城柵探索に向けた有力な手掛かりとなり得る成果として、下記の2点は特に重要なものである。

### ①有力な推定地である沼垂地区的ボーリング調査

渟足柵の有力な候補地である沼垂地域のボーリング調査を実施した。この調査の目的は、（1）越後平野の古地理復元。（2）沼垂地域の浅層地質の解明、遺跡立地基盤層の把握にあった。

（1）に関する成果では、新紗丘1（繩文時代中期）が約20m埋没している状況が把握され、砂丘と砂丘間低地、汽水の潟、湿地帯から構成される5,000年前の景観が復元された。越後平野における遺跡動態や古地理復元にあたって、「沈降」という要素を見積もる重要性が明確に提示された点で大いに評価される。

（2）に関する成果では、沼垂地域に所在する新潟市大山町、松島町において、地表下約5mで旧地表面と考えられる層を検出した。C14年代測定では、 $770 \pm 30$ yrBP ( $910 \pm 30$ yrBP) (測定基準 1950年) という平安時代頃という結果が出ている〔ト部・高濱 2004〕。また、これらの結果を受けて考古学的な調査が検討されたものの、実現には至っていない。だが、採取された土壤サンプルからはイネ科、ソバ科のプラントオパールが検出されたことから、沼垂地域において平安時代にイネ、ソバ類を栽培していた可能性が浮上した。この事実は、直接的に渟足柵の存在を示すものではないものの、今後、城柵をはじめとする埋没遺跡の存在を把握する手法として、ボーリング調査の有効性が示された点において評価されるべき成果である<sup>2)</sup>。

#### ②『新潟県内出土古代文字資料集成』の刊行

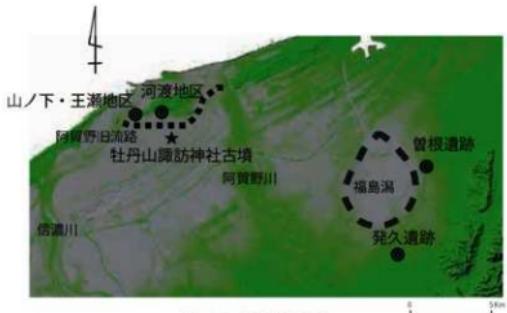
平成に入り、長岡市八幡林遺跡の「沼垂城・養老」、「郡司符」木簡、「大領」墨書き土器や、新潟市街遺跡の「杉人絆」、「狄食」木簡をはじめ、遺跡から文字資料が確認される事例が急増した。それと前後して、石川県、山形県、神奈川県などでは県単位の集成・公開が進められ、さらには吉村武彦による全国的集成データベースの構築がなされた。こうした全国的な動向の中、県内研究者や新潟墨書き土器研究会を中心となり、集成作業を経て刊行された。

#### （4）新潟県教育委員会による取り組み

新潟県教育委員会では、平成24年（2012）に越後国域確定1300年記念事業として、新潟県の古代史を多角的な視点から捉え直すさまざまな取り組みをおこなった〔新潟県教育委員会 2013ほか〕。とりわけ、城柵設置から越後国成立までの新潟県の歴史を、考古学、文献史学、地理学、服飾学といった多彩な分野の専門家による講演会・シンポジウムとして取り上げたことによって、新たな研究視点が提供された点を強調したい。前述の小林昌二らに代表される学際的な取り組みが、今後一層求められてくることは間違いないであろう。未だ、城柵発見には至っていないものの、依然として新潟県の古代史上の重要なテーマであることには変わりなく、これからも城柵探索へのアプローチは続けられることが期待される。

## 4 未発見（未確定）城柵の推定地と調査について

渟足柵、磐舟柵の推定地を巡っては古くから歴史研究者の関心が高く、渟足柵、磐舟柵の読みが、「延喜式」中「沼垂郡」、「磐船郡」の「ぬったり」「いわふね」に通じること。さらに「倭名類聚抄」の「沼垂郡」、「沼垂郷」、「磐船郡」との対応からおおよその範囲を推定してきた経緯がある。ただし推定地の中には、根拠が考古学的知見以外のものが含まれ、裏付けとなる資料が明確でないものも多い。ここで取り上げたのは、周辺遺跡の動向や地理的条件からある程度妥当性が担保されると思われる推定地とその根拠である。



第2図 津足橋推定地

#### (1) 津足橋（第2図）

雄物川右岸の河口付近の台地上に所在する秋田城の立地などから、旧阿賀野川右岸の河口付近（①、②）と考える坂井秀弥の見解【坂井 1994】が有力である。他にも、官衙関連遺跡と砂丘列上の地理的条件から候補地とされている地点がある（③、④）。

①新潟市東区山ノ下・王瀬地区

山ノ下地区は、寛永 10 年の阿賀野川欠けに伴う移転前の沼垂町が所在した地区。付近に橋を想起させる「木戸」の地名がある。王瀬地区には、天保 13（1842）に記された『小泉蒼軒日録』に長者屋敷があったという「王瀬長者伝説」が遺されている【小林 2005】。

②新潟市東区河渡地区

河渡「コウド」は国府「コウ」の渡しに通じる。

③新発田市曾根遺跡周辺

広い砂丘上の立地。官衙関連遺跡と考えられる曾根遺跡【川上 1997 など】が所在する。

④阿賀野市発久遺跡周辺

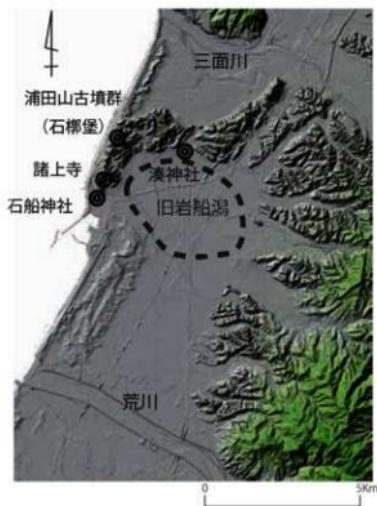
広い砂丘上の立地。官衙遺跡と考えられる発久遺跡【川上ほか 1991】が所在する。

#### (2) 舶舟橋（第3図）

古くから地名が通じることから村上市岩船町周辺に存在するものとされてきた。また、難波宮と難波潟、「草香津」の関係から、村上市日下集落との関係性に注目する意見もある【小林 2004 など】。

①浦田山古墳群・石柳堡（村上市）

昭和 31 年、失業対策の土取工事中に発見された石組構造を城柵の関連施設と推定した【新潟県教育委員会 1962】。その後、甘粕健



第3図 舶舟橋推定地

らによる調査で、古墳石室であることが判明した〔甘柏ほか 1996〕。

②乙宝寺（胎内市）

真言宗智山派の古刹。所在する乙（きのと）がキノト（横戸・欄端）に通じる。境内には7世紀末頃の塔心礎が存在し、古代の土器が出土した記録がある〔平野 1963〕。

③諸上寺（村上市）

郷土史家の波済健による比定〔波済 1956〕。

④石船神社（村上市）

磐船郡の延喜式内社。大正 15 年に建立された。

「磐舟樋跡」の石碑が境内にある。

⑤湊神社

磐船郡の延喜式内社。七湊の地名。旧岩船潟北岸に位置し、「津」の付近に造営したか〔村上市岩船郡学校教育研究協議会 1955〕。

(3) 都岐沙羅柵

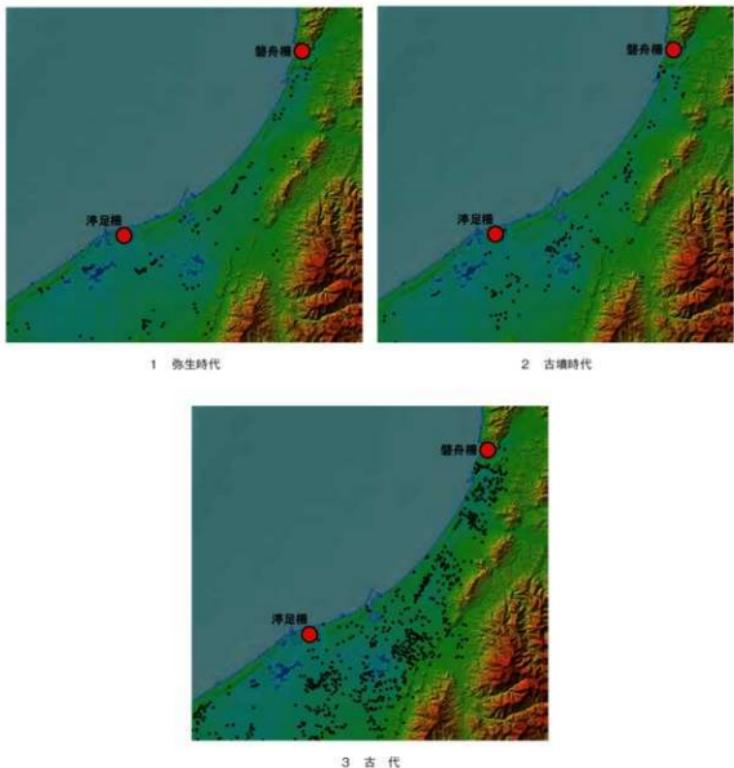
新潟県と山形県の境、「鼠ヶ関」が推定地として挙げられるが、日本海側城柵の多くが、大河川の河口付近に所在することを考えると、新潟県北部から山形庄内地域までを考慮する必要があるとの意見がある〔工藤 2001 など〕。

## 5 城柵設置地域の動態－弥生・古墳・古代の遺跡分布から－

前項までで、新潟県における城柵探索の歩みを通観してきた。多様なアプローチを積み重ねてきた経緯が研究史をたどることで鮮明になったが、それはこの問題が一面的な学術的手法による解決が困難であることの裏返しでもある。

ところで、城柵設置地域<sup>3)</sup>がどのような地域であるのかを今一度見つめ直すことは城柵探索にかんする研究・議論を進めていく前提作業として不可欠なものと考える。そこで、本項では「遺跡数の増減」をキーワードに城柵設置地域の遺跡動態について考えてみたい。第4図は、城柵設置地域の弥生時代・古墳時代・古代の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）をプロットしたものである<sup>4)</sup>。また、第2表は、城柵設置地域周辺と国府設置地域（上越市）における弥生時代～古代にかけての遺跡数の推移をまとめたものである。この図表からは総じて弥生時代から古墳時代に比べ、古墳時代から古代にかけての遺跡数增加が飛躍的に増加する傾向を読み取ることができる。遺跡数の増加と人口増加・生産力向上という安易な図式が成立するかは議論の余地を残すものの、古墳時代から古代への移行期に大きな変革があったことは間違いないといえるだろう。これは遺跡立地の面からも指摘できることで、弥生時代から古墳時代にかけては、砂丘列上に集落が展開するのに対し、古代には砂丘列上に加えて、自然堤防や微高地で新たに集落が築かれていくことがわかる<sup>5)</sup>。言い換えれば、今まで集落が作られなかつた、もしくは作れなかつた場所に新たに集落を築くことが、集落数の爆発的増加に繋がつたと考えられる。

一方、国府が設置された頃城平野がある上越市では、遺跡增加率がそれほど高くないことがわかる。これは、城柵設置地域に比べて、古墳時代の段階での人口数が多く、開発が進んでいた証左である。これは頃城地域が、宮口古墳群や水科古墳群といった後・終末期群集墳が数多く造営された地域であることからも明らかであろう。後期古墳群はおろか集落の存在も希薄である城柵設置地域とは明らかに異なる。



第4図 城柵設置地域周辺の遺跡分布

第2表 弥生・古墳・古代の遺跡数・増加率

市町村	弥生	古墳	古代	古代／古墳	【参考】古墳／弥生
城柵設置地域	新潟市	49	92	4.35	1.88
	新発田市	21	34	6.11	1.61
	村上市	26	21	1.19	0.81
	阿賀野市	10	4	2.50	0.4
	胎内市	6	18	0.33	3
	聖籠町	4	42	0.09	1.5
小計		147	175	5.46	1.5
国府設置地域					
	上越市	31	253	482	1.91
					8.16

坂井秀弥は、和名抄、延喜式などにみられる田数に注目し、越後が広大な面積に比して、耕作地が少なく生産性が低い地域であったことを明らかにした<sup>6</sup> [坂井 2008]。その一方、頸城平野では、面積に比して郷数が多いことから、越後の中では比較的人口が多く、開発が進んでいたと推測するがこれが卓見であることは、遺跡数の増加率からも領ける。

城柵設置地域は、古代以前の段階において越後の中でも人口密度が希薄で、生産活動が低調な地域であることは間違いない<sup>7</sup>。

そうした地域に城柵が設置されたという事実を改めて認識することが必要である。そして、城柵設置後の地域開発の本格化によって、人口増加、生産力の向上が図られたことで城柵設置以降の古代遺跡数の爆発的増加に結びついた可能性が高いといえる。そして問題は、そのような地域開発、人口増加、生産力の向上といった大きな変革の「きっかけ」となったと考えられる城柵設置、それに伴う柵戸の存在をどのように論証していくのかに繋がることはいうまでもない。

## 6 柵造営期におけるモノと人の動き－「移民」の存在に迫る試み－

城柵、城柵に関する考古学的な物証が確認されない現状において、未発見城柵そのものへ迫る試みは今後も継続されるべきである。一方、浮舟柵、舟舟柵の設置という事象が、地域社会へ与えた影響、果たした役割を読み解く取り組みがこれから一層求められるといえる。とりわけ問題となるのが、柵戸すなわち「移民」の問題である（第5図）。「日本書紀」大化4（648）年条では、越と信濃からの柵戸の存在が確認できるが、このような「移民」の存在、そして「移民」が果たした役割について、近年、考古学の立場から研究が進められている。ここでは、これまでの研究成果についてケーススタディーとして提示する。

7世紀代の遺跡である新潟市松影A遺跡（第6図）の調査を担当した加藤学は、当遺跡において東北北部～北海道の沈線文土器や捺文土器の影響を受けた土器を見出した【加藤ほか 2001】。さらに加藤は、沈線文土器、捺文土器を構成する諸要素を丹念に検証したうえで、新潟県内における北方系要素を持つ土器の集成にも取り組んだ【加藤 2004】。北陸からの影響を重視してきた従来の研究視点に加えて、「北への視点」という新たな視座を提供した点で評価される。これ以後、新潟県内において東北系土器への関心が高まりをみせていくことになる。

相田泰臣は、古墳時代前期の角田山麓、阿賀北地域の土器様相を明らかにする過程で、新潟市南赤坂遺跡出土土器にみられる北方系要素の検討を進めている【相田 2009】。壺底面にみられる「平行葉脈圧痕」などから、東北地方の後北式、北大式、捺文土器とのつながりを指摘した。相田の指摘は、加藤学が見出

年月日	事項
大化三（647）	浮舟柵を造つて柵戸を置く
大化四（648）	浮舟柵を造つて、越と信濃の民を柵戸とする。
神亀元（710）	尾張・上野・信濃・越後国の民二〇〇戸を出羽の柵戸とする。
神亀二（716）	相模・上総・常陸・上野・武藏・下野・六箇の官民一〇〇戸を陸奥に移配。
神亀元（717）	信濃・上野・越前・越後四国の百姓各一〇〇戸を出羽に配属する。
神亀三（719）	東海・東山・北陸三道の民二〇〇戸を出羽国に移配する。
神亀六（722）	諸國司に柵戸一〇〇人を置定させて陸奥の該所に移配する。
神亀元（724）	陸奥國の鎮守軍卒らを陸奥國の戸籍に付けて、家譜を細くすることを許可する。
統日本紀	統日本紀
日本書紀	日本書紀

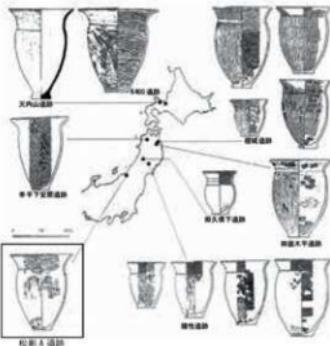
第5図 移民記事

した「北方系土器」の存在が、古墳時代前期以来の連続とした「北とのつながり」の所産である可能性を示した。

水澤幸一は、阿賀北地域に位置する船内市から出土する北方系土器について、出土遺跡の立地、消長などを丹念に検討することで、阿賀北地域で北方系土器が出土する歴史的背景に迫っている〔水澤2008〕。水澤によれば、北方系土器が出土する遺跡は、砂丘列沿いに展開する集落で、8世紀前後に集中する傾向があるという。さらに水澤は『日本書紀』の磐舟櫻修繕記事(698・700年)に注目し、北方系土器を櫻養蝦夷の存在と結び付けて解釈した。そして、北方系土器が8世紀以後、姿を消す要因として、和銅2(709)年の出羽櫻が設置されたことに伴い、櫻養蝦夷が出羽櫻(秋田城)へ移動したためとする。当然、検証が必要ではあるが、魅力的な仮説ではある。

春日真実は、外来系土器の分析を通じて、その歴史的解釈について積極的に言及している。阿賀北地域の村上市三角点下住跡出土土器の分析では、北陸・信濃系譜の可能性がある把手付球胴釜や多孔底土器の存在から、信濃・北陸方面から阿賀北地域への移動・移住の可能性を示唆する(第7図)〔春日2005〕。さらに春日は、東北系土器が越後平野以北、特に阿賀北地域で多く確認される背景に、8世紀初頭の出羽櫻構造宮に際して渟足櫻・磐舟櫻への「先進地視察」に伴う可能性に言及する〔春日2015〕。春日による一連の指摘は、春日自身や新潟古代土器研究会〔新潟古代土器研究会2004〕に代表される新潟県内の古代土器研究の成果をベースとしたもので、魅力的な仮説として今後の研究指針を示したものである。

また、春日は不動産である建物構造にも注目している。畿内から波及した「側柱堅穴建物」や、カマド



第6図 北方系土器の類例



第7図 側柱建物と円筒形・板状土製品の伝播



第8図 行屋崎遺跡からみた人とモノの動き

の部材である「円筒形土製品」「板状土製品」が、頸城地域から阿賀北地域へ「飛び石的」に波及する現象の背景に城柵造営に伴う構戸との関連を想定する〔春日 2003・2006〕。

田中祐樹は、城柵設置前後の新潟県内における外來系土器の存在に注目する。田中は、これまで東北系、北方系と総称されていた諸要素を「東北北部系（北方系）」と「東北南部系（栗圓式）」に岐別した。さらに、武藏型壺や小型台付壺にみられる関東的な土器要素を「関東系」として、これら三つの要素がみられる土器を「外來系土器」として集成作業を進めている〔田中 2019a〕。田中の作業は、加藤学らの北方系土器の指摘〔加藤 2001〕に端を発したものであるが、東北北部（北方系）と東北南部（栗圓式）でその歴史的背景が異なる可能性に言及している点に特徴がある。

さらに田中は具体的な事例として、前述した田上町行屋崎遺跡を取り上げた〔田中 2019b〕。本遺跡から出土する東北南部系（栗圓式）土器、透かし入り土師器高杯の存在を評価し、東北南部からの移民の可能性に言及した。その背景に、地域開発が低調な日本海側への城柵設置にあたって、人的・物的な「テコ入れ」が必要だった当時の地域事情があったと推察する（第8図）。図らずもこの指摘は、城柵設置をめぐる古代史からのアプローチとも符合するものであり、注目される。すなわち古代史の今泉隆雄が郡山遺跡第I期官衙を「名取柵」に比定し、日本海側の「渟足柵」との複数の共通性に注目し、両柵を「政府が奥越両国で進めた同様の辺境政策の中で設けられた双子の城柵であった」と論じた〔今泉 2001〕。この論

点については、近年小林昌二、相澤央といった古代史研究の立場からの再検討、批判〔小林 2016・相澤 2019〕があるが、魅力的な仮説である。この文献史学から提示された仮説を今後は考古学的視点から検証し、論證していくかなければならないと考えている。

## 7 調査研究の課題と今後の見通し

誤解を恐れずにいえば今後、発掘調査による城柵発見の可能性は必ずしも高いとはいえない。渟足柵でみれば、有力地である信濃川河口～阿賀野川河口周辺域の多くが工業地帯もしくは市街地化しており、過去の信濃川、阿賀野川の亂流の歴史をみれば消失の可能性も十分考えうる地域である。また、磐舟柵の有力地とされる旧磐舟堀周辺は、大規模開発等による発掘調査の見込みが薄い地域といえる。このような現状では、関雅之が指摘するように既刊調査報告書の見直し〔関 2011〕も当然必要となるし、その上で、春日真実らが進める柵戸（移民）の存在を考古資料からトレースする作業が一層重要性を増すことは自明である。一方で、文献にはみられない移民の存在についても、考古学的見地から見つめ直すことで新しい視点を提供できるものと思われる。

## 8 おわりに

筆者は、新型コロナウイルスの影響で検討会当日の参加を見送った。やむを得ない事情にせよ関係者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしたことには変わりはない。心よりお詫び申し上げる次第である。また、検討会資料の作成、本稿執筆にあたっては、下記の機関・個人にご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

なお、本稿は、高梨学術奨励基金 2019 年度着手研究助成の成果を一部に含んでいる。

新潟県教育庁文化行政課、古代城柵官衙遺跡検討会事務局、春日真実、石川智紀、小此木真理、小林隆幸、高橋保雄

## 註

- 1) 研究成果については、文献史学・考古学含め枚挙に暇がないため組織的な調査・研究に限定した。詳細な研究史については、坂井 1994、廣野 1994、小林ほか 2004 に詳しいため参照願いたい。
- 2) ポーリング調査は、今まで継続的に進められているが、柵設置地に繋がる直接的な証拠を把握するには至っていない。橋本博文は、牡丹山諂訪神社古墳の存在などから渟足柵候補地として旧阿賀野川左岸まで視野を広げる必要性を指摘している。また、従来のポーリング調査に加えてトレンチ掘削等の小規模発掘による遺構確認の有効性について提言を行っている。
- 3) ここでの城柵設置地域とは、阿賀野川流域から北を包括する地域を指す。現在の行政区画に従えば、概ね新潟市、新発田市、聖籠町、胎内市、村上市、阿賀野市に相当する。ただし、厳密に範囲を線引きできるものではないことは、城柵そのものが発見されない以上致し方ないと考える。
- 4) 新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係で管理している「新潟県埋蔵文化財遺跡台帳」(2020 年 1 月末日現在)に登録されている遺跡(埋蔵文化財包蔵地)を対象とした。
- 5) 遺跡立地の変化については、寺崎裕助による新潟平野における遺跡分布の先駆的な研究すでに指摘されている〔寺崎 2002〕。
- 6) 重要な指摘なので全文ママで列記しておきたい。「頸城の場合、かなり開発が進んでいたことが推測される。すなわち、越後には郡が七つ、郷が三十四あるが、郡別の郷数は頸城郡が一〇で、他の郡に比べ特に多い。平野部を主とした面積は、頸城郡が他より特に広くはない頸城から、頸城郡は郷の分布密度が相対的にかなり高いといえる。そのなかでも一〇郷のうちヨリ郡までが分布する頸城平野の地域は、越後では最も高いことになる。頸城平野の地域は郷の分布密度、すなわち人口密度が高く、その背景として生産力も高いことが考えられる。このことは、東大寺への封物額における郡別の差にも現れている〔桑原 1986〕。国府が頸城郡に置かれたのも、こうした背景があつてのことだろう。」〔坂井 2008〕。

7) 本項で指摘した城柵設置地域における遺跡動態の低調については、これまで幾人の研究者が言及してきた点であり、その結論自体は明白のものともいえる。しかし、具体的な遺跡数という目に見える形で客観的なデータを提示することは学術的手続きの上で必要と判断し、あえて煩雑な手続きを踏んだ。

## 引用・参考文献

- 相澤 央 2019「渟足柵の造営と遷都」「磨斧作針」橋本博史先生退職記念論集 橋本博史先生退職記念事業実行委員会  
相田泰臣 2009「古墳時代の角田山麓と阿賀北における土器の一樣相」「新潟県の考古学」II 新潟県考古学会  
阿部義平 2006「古代城柵の研究（三）」「国立歴史民俗博物館研究報告」第133集 国立歴史民俗博物館  
今泉隆雄 2005「多賀城の創建 - 郡山遺跡から多賀城へ - 」「条里制・古代都市研究」第17号 条里制・古代都市研究会  
ト部厚志・高濱信行 2004「渟足柵を探る浅層地質調査および越後平野の形成過程の復元」「前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成14年度研究経過報告書」  
小野 忍 1994「古代官衙の終末をめぐる諸問題」東日本埋蔵文化財研究会  
春日真実 2003「越後出土の円筒埴土製品・板状土製品について」「堅気樓」秋山進午先生古希記念論集刊行会  
春日真実 2005「新潟県村上市三角点下住居跡出土土器について」「古代の越後と佐渡」高志書院  
春日真実 2006「第3章 古代越後の集団と地域」「日本海歴史体系 第二巻 古代篇II 清文堂出版  
春日真実 2014「古代遺跡の動態－西蒲原原地域を事例として－」「郷土史燕」第7号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会  
春日真実 2015「古代西蒲原原地域の土器器種状況」「郷土史燕」第8号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会  
加藤 学 2004「新潟県域における北方系の土器器種・事例紹介と問題提起」「古代阿賀北地域の土器様相」新潟古代土器研究会  
加藤 稔 1996「出羽国府遷移論」「山形史学」横山昭男先生追悼記念号 山形史学研究会  
川崎利夫 2008「出羽国成立前後の遺跡・遺物」「出羽国ができるころ」山形県立うきたむ風土記の丘資料館  
工藤雅樹 1998「古代蝦夷の考古学」吉川弘文館  
工藤雅樹 2001「蝦夷の古代史」平凡社  
桑原正史 1986「中央集権国家の建設と越の蝦夷」「新潟県史」通史編 新潟県  
小林昌二ほか 2001「前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成12年度研究経過報告書」  
小林昌二ほか 2004「前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成14年度研究経過報告書」  
小林昌二 2005「浅層地質歴史学の創造 平成16年度新潟大学学長裁量経費プロジェクト研究 研究成果報告書」  
小林昌二 2016「古代東北「双子の城柵」名称考 郡山遺跡と渟足柵」「新潟史学」第74号 新潟史学会  
坂井秀弥 1994「渟足柵研究の現状」「新潟考古」第5号 新潟県考古学会  
坂井秀弥 2008「古代地域社会の考古学」同成社  
坂井秀弥 2013「地域社会の環境・交通・開発・越後平野を例に-」「環境の日本史」2 吉川弘文館  
佐藤悟宏 1978「平安時代の出羽の國府・城輪柵跡と八森遺跡の調査から」「山形教育」第198号 山形教育研究所  
佐藤敏幸・大久保恵生 2017「陸奥における古墳時代後期から奈良時代の高窓（1）-宮城県のスカシ村高窓を中心に-」「宮城考古学」第19号 宮城県考古学会  
閔 雅之 2011「昭和三二年・渟舟柵確定地発掘の学史的意義」「越佐研究」第六十八集 新潟県人文研究会  
田中祐樹 2018「透かし入り土器器高杯の新例 - 田上町行屋崎遺跡出土資料の紹介 - 」「新潟考古学談話会会報」第36号 新潟考古学談話会  
田中祐樹 2019a「構造営前後の外米系土器について - 閔東系・東北系を中心とする - 」「新潟考古」第30号 新潟県考古学会  
田中祐樹 2019b「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる外米系要素について」「研究紀要」第10号 （公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
田中祐樹 2020「越國の未見城柵」「第46回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」古代城柵官衙遺跡検討会  
寺崎裕助 2002「新潟平野の遺跡」「新潟考古学談話会会報」第24号 新潟考古学談話会  
新潟県教育委員会 2013「平成24年度 越後国城確定1300年記念事業 記録集」  
新潟古代土器研究会 2004「越後阿賀北地域の古代土器様相」  
平川 南 1995「八幡神遺跡木簡と地方官衙論」「木簡研究」第17号 木簡学会  
平野田三 1963「乙宝寺心懺と上越心懺の問題」「越佐研究」第二十集 新潟県人文研究会  
廣野耕造 1994「渟舟柵研究の現状」「新潟考古」第5号 新潟県考古学会  
水澤幸一 2008「岩船柵修理前後の北方系土器 - 岩内市内遺跡を中心として - 」「多知波奈の考古学 - 上野恵司先生追悼論集 - 」橋考古学会  
村上市岩船郡学校教育研究協議会 1955「村上市岩船郡郷土史」  
【発掘調査報告書】

- 甘柏健ほか 1996『磐舟莆田山古墳群発掘調査報告書』 村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室  
 飯坂盛泰ほか 2002『葛ノ坪遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会  
 堅木宜弘ほか 2011『檀風城跡・下国府遺跡』 佐渡市教育委員会  
 加藤 学 2001『松影A遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会  
 川上貞雄ほか 1991『発久遺跡』 茜神村教育委員会  
 川上貞雄 1997『曾根遺跡Ⅲ 天王小学校改築に伴う遺跡発掘調査報告書』 豊浦町教育委員会  
 川村 尚 2008『佐渡國分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』 佐渡市教育委員会  
 小池邦明ほか 1993『新潟市立場遺跡』 新潟市教育委員会  
 板井秀弥ほか 1984『今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡』 新潟県教育委員会  
 鈴木俊成ほか 2010『西部遺跡2』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会  
 高橋保ほか 2002『芙蓉遺跡1』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会  
 高橋 勉 1984『栗原遺跡 第7次・第8次発掘調査報告書』 新井市教育委員会  
 田中 精ほか 1992『八幡林遺跡』 和島村教育委員会  
 田中 精ほか 1998『下ノ西遺跡－出土木簡を中心に－』 和島村教育委員会  
 田端 弘ほか 2015『行屋崎遺跡』 田上町教育委員会  
 寺守光晴ほか 1985『横瀬山廃寺跡発掘調査概報』 寺泊町教育委員会  
 戸根与八郎ほか 1992『木崎山遺跡』 新潟県教育委員会  
 渡辺 健 1956『岩船櫛跡』  
 新潟県教育委員会 1962『磐舟－磐舟柵跡推定地調査報告書』  
 新潟市教育委員会 2012『大沢谷内遺跡II 第7・9・11・12・14次調査』  
 渡辺ますみほか 1994『猪立C遺跡発掘調査報告書』 黒崎町教育委員会

【図版出典】

- 第1図 筆者作成  
 第2図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成  
 第3図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成  
 第4図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成  
 第5図 筆者作成  
 第6図 加藤学2001を改变  
 第7図 新潟県教育委員会2013を改变  
 第8図 田中祐樹2019を改变  
 第1表 筆者作成  
 第2表 筆者作成

# 新潟県内の海揚がり陶磁器

## —『日本海に沈んだ陶磁器』その後—

竹部佑介・田海義正

### はじめに

新潟県域の海中から引き揚げられた土器等の文化財を調査するために、平成23（2011）年に「新潟県海揚がり陶磁器研究会」が結成され、両名<sup>1)</sup>も参加した。この活動でそれまで知られていた海揚がり品と新知見の資料をまとめた報告書『日本海に沈んだ陶磁器』（以下、報告書）を平成26（2014）年に刊行し、繩文時代から近代に至る計206点の海揚がり品が報告された〔寺崎ほか2014〕。県下ではこれに先行して、海揚がり品の報告・集成が行われており、珠洲焼が数多く含まれることが明らかとなっていたが〔寺村・久我1960、室岡1972、金子・高橋1977、戸根1991など〕、報告書においても珠洲焼が109点と半数を超え、傑出した状況であることが改めて確認された。

報告書の刊行後にも海揚がり品の情報が断続的に寄せられており、これまでに2件の報告がある。以下に示す通り、2014年以降に新たに引き揚げられたものばかりではなく、これまで明らかにされていなかつた揚陸年代の古いものも含まれる。

「長岡・出雲崎地域で新たに確認された海揚がり品」〔加藤ほか2018〕

4点の資料が報告された。古墳時代前期の土師器甕は、出雲崎沖で平成28年に揚げられた。須恵器中甕は柏崎市糸山沖で引き揚げられたと伝わる。佐渡市の小泊窯跡群産で時期は9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。大正時代から戦前までに揚げられたとみられ、昭和11（1936）年<sup>2)</sup>発行の新聞に包装されていた。珠洲焼片口鉢は寺泊沖の水深約300mのタラバから昭和25年に引き揚げられた。本資料は『寺泊町史』に掲載されたが、研究会の調査時には所在確認できなかったものを改めて実測、写真撮影した。吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期に比定される。唐津焼小型甕は寺泊～佐渡間から戦前に引き揚げられたという。18世紀第4四半期以降の所産とみられる。同時に大甕も1点引き揚げられたが所在は不明である。

「新潟県名立沖海揚がり備後尾道の酢徳利」〔田海2019〕

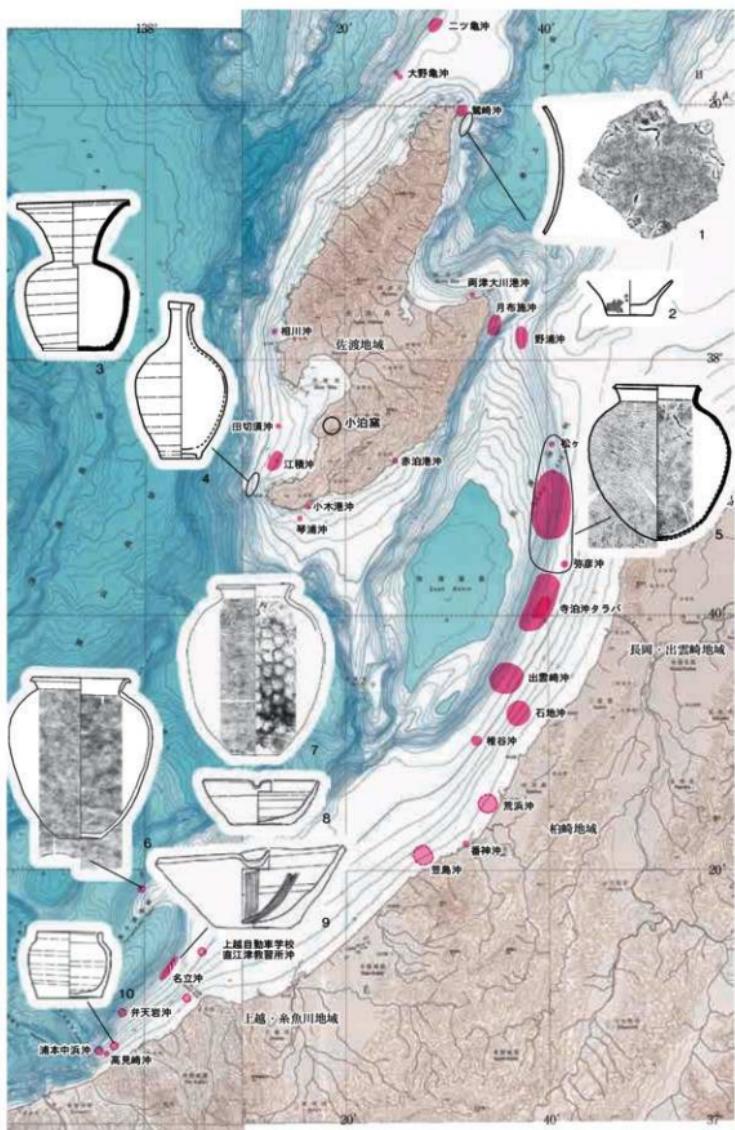
平成30（2018）年6月に上越市名立沖の水深約600mから甘えび漁の底引き網で徳利1点が引き揚げられた。それは広島県尾道市にあった造酢所<sup>3)</sup>が幕末に創業した福山市の鞆皿山窯に注文した酢徳利でヲノミチ八（やま）ヲと描かれている。明治時代前半のものと考えられる。

本稿では上記2件の報告以外で、報告書刊行後に新たに引き揚げられた土器・陶器や同報告書の資料調査時に把握できなかった既存の海揚がり品を含めた10点（第1図）を報告する。以下、珠洲焼の年代観については吉岡康暢氏の編年〔吉岡1994〕を用いる<sup>4)</sup>。遺物実測は寺崎裕助氏、鹿取沙氏、竹部佑介、田海義正が分担した。遺物写真は1～4を鶴田浩規氏（フォーカル）、5～10を田海が撮影した。

### 1 資料報告（第1図～第3図）

#### （1）佐渡博物館所蔵資料（佐渡沖）（第2図1～4）

1・2は弥生土器の壺甕類である。1は球胴になり、最大径付近の破片と考えられる。内外ともハケ調整され、内面にはナデ痕も認められる。2は平底の底部で、中央付近がわずかに凹む。底径7.4cmである。



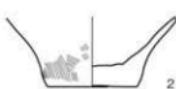
(寺崎ほか2014を基に加筆)

第1図 揭陸地点の位置

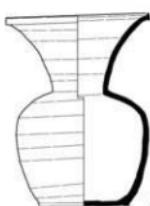
元図：海上保安庁 海底地形図  
能登半島東方 平成12年。佐渡海峡付近 平成14年を部分引用・縮尺  
遺物縮尺 5-6-7- = 1:12, 他 = 1:8



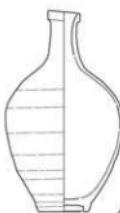
1



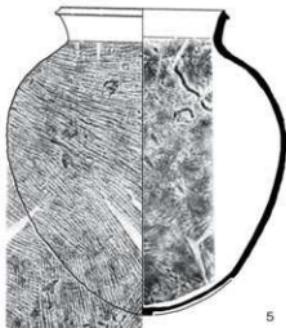
2



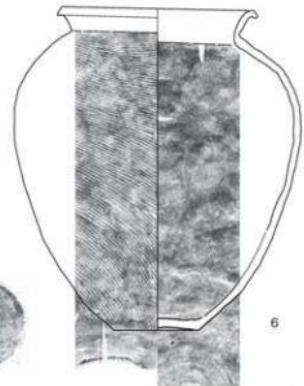
3



4



5



6



1~2 0 1:4 20cm

3~6 0 1:6 50cm

第2図 遺物実測図・写真(1~6)

外面はハケ、内面はナデ調整される。2点とも色調・胎土の特徴が類似する。外面は明黄褐色、内面は浅黄橙色で、石英・長石を多く含み胎土は粗い。また、内外面に生物付着痕跡（カンザシゴカイ科棲管）が溝渠なく付着する。1の器面には、昭和59年2月24日に「鷺崎沖 約3km沖」にて採集されたと注記されている。2は1の20日前の昭和59年2月4日に「鷺崎沖」で採集されたと注記される。詳細は不明ながら、調整・胎土の類似性などから、同一個体の可能性が考えられる。

3は須恵器長頸壺である。口径18.2cm、器高(24.7cm)、底径11.7cmで、口縁部を一部欠損する。高台は短く、研磨されたような平滑面が見られるため、後世に変更された可能性も考えられる。ロクロ成形で、口縁部は大きく開く。口縁端部は内傾する面を持つ。胎土は灰黄色で、黒色の溶出物が多い。内外面共に生物付着痕跡が溝渠なく認められる。カンザシゴカイ科の棲管が主体であり、頭～胴部にフジツボ殻がある。小泊窯跡群の10世紀初頭頃のものである。本資料は昭和61年4月に地元漁師によって「小木沢崎燈台二〇〇〇米沖あい」（収蔵時メモ原文ママ）で採集された。「沢崎燈台」は佐渡市沢崎の沢崎鼻灯台を指すと考えられる。4も同一漁師によって同一地点・同一時期に発見されており、合わせて郷土史家の本間俊夫氏によって収集された。佐渡市大字真野の「民具の家まのんさわ」に収蔵されていたが、現在は佐渡博物館に所蔵されている。本資料は橋本博文氏によって、小泊産長頸壺Bとして資料報告がなされている〔橋本2009〕。今回の報告にあたって、新たに実測を行い図化した。

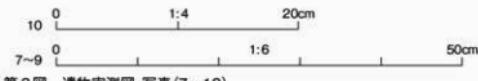
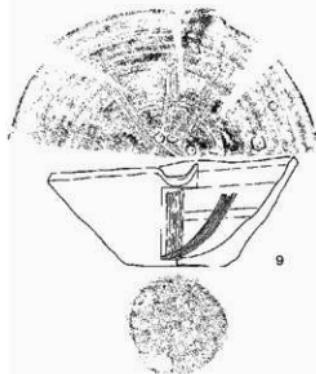
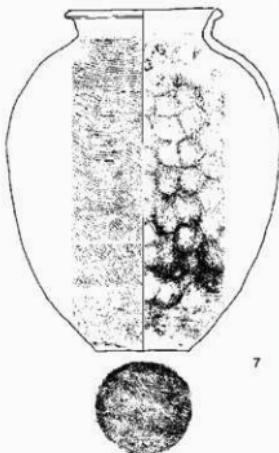
4は陶器焼酎利である。口径4.0cm、器高25.7cm、底径6.2cmで完形である。口縁部は突帯が巡り、頸部は長い。口縁部の突帯幅は1.2cmである。胴部は長胴で上半に最大径がある。ロクロ成形で、外面及び高台内には灰釉が施される。胎土は褐色である。口縁部から胴部上半にかけて生物付着痕跡（カンザシゴカイ科）が認められる。痕跡は口縁部～頭部に密であり、胴部下半にかけて疎らになる。本資料は昭和61年4月に地元漁師によって小木沖「沢崎燈台二〇〇〇米沖あい」（収蔵時メモ原文ママ）地点で採集された。前述の通り、3と共に佐渡博物館に収蔵されている。

### （2）湯東歴史民俗資料館所蔵資料（新潟沖）（第2図5）

5は須恵器壺である。口径20.4cm、器高38.4cmで、底部は丸底である。底部付近は表面が一部剥離している。外面は平行叩きで、頭部では重複して施されており格子目状となる。内面は放射状叩きの後、粗雑なナデ消しが施され、下半は平行叩きが認められる。色調は黄灰色で、胎土は空隙が多くやや粗い。内外面に生物付着痕跡（カンザシゴカイ科棲管、カキ殻）が認められる。胴部の付着状況には偏りが見られ、例えば横倒しの状態であったなどの埋没状況を反映していると考えられる。本資料は、器面上に「昭和初年新潟沖」の注記がある。閔雅之氏によって、谷川忠壽美氏寄贈資料として報告されている〔閔2000〕。今回の報告にあたって、新たに実測を行い図化した。

### （3）日目前神社所蔵資料（名立沖）（第2図6）

上越市名立区日目前神社の6は珠洲焼叩き中壺である。口径23.4cm、器高40.2cm、底径10.6cm、完形である。口縁部は断面「く」字状で端部は嘴状に引き出される。胴部は肩が張り、底部に向けてぼまる。外面は肩から胴部下半まで右下がりの平行叩き目が認められる。底部は、静止糸切痕がナデにより不明瞭となる。形状から吉岡編年（以下、吉岡と記す）Ⅱ期に比定される〔吉岡1994〕。本資料は、地元漁師により昭和41（1966）年頃、名立沖の「甘エビ漁場、水深600m」地点から引き揚げられた。生物付着痕跡は確認できなかった。同一地点からはこれまでにも、珠洲焼水注が発見されている〔寺崎ほか2014、上越・糸魚川地域名立沖32〕が、付着痕跡の微弱なものは同海域としては例外的な存在である。なお、同時期、同意匠の叩き中壺が出雲崎沖から発見され報告されている〔寺崎ほか前掲、長岡・出雲崎地域出雲崎沖44〕。



第3図 遺物実測図・写真(7~10)

#### (4) 長養館所蔵資料（名立沖）（第3図7）

7は珠洲焼叩き中壺である。口径17.8cm、器高42.0cm、胴部最大径34.0cm、底径11.6cm、完形である。口縁部は断面「く」字状で端部は面を持つ。胴部は中央よりやや上が張り、底部に向けてすぼまる。外面は肩から胴部下半まで縫杉状の叩きが右側にはほぼ水平で階段状となる。肩部に円形竹管が並んで2つ捺されている。底部は静止糸切り、乾燥台の直線状筋が残る。器色調は暗灰色。口縁部3分の1に光沢がある。外面に褐色付着物が付く。外側の貝殻などは削り落とされ痕跡が残る程度だが、肩内部にはカンザシゴカイ科棲管が残る。焼成良好である。吉岡Ⅳ期に比定される。

所蔵者の上越市寺町2丁目の長養館吉原耕一社長の話では、名立沖から掲がったと伝えられ、昭和15(1940)年以前には所有されていたと考えられる。名立沖の珠洲焼は昭和30年代に相次いで掲陸されるようになつた〔室岡1972〕。名立沖から昭和15年以前に引き掲げられたことは同地では最も早い珠洲焼の発見とみられる。

#### (5) 個人蔵資料（名立沖）（第3図8・9）

8は珠洲焼小型片口鉢で口径18.5cm・器高7.4cm・底径9.5cmを測り、完形品である。色調は青灰から灰色で焼成は堅微。外面は茶色から褐色の色染みがある。片口は指幅1本分引き出される。片口部は正面から観て右側に寄り、右利きがうかがわれる。内面に鉗目はない。焼成は堅微である。底部は静止糸切のままである。内面の半分と外面は全面にカンザシゴカイ類棲管と貝殻がある。

9は珠洲焼片口鉢で口径30.0cm、器高11.3～13.5cm、底径12.0cm。焼成は良からやや甘い。外面と口端部は風化が進む。外面の色調は灰色、底面は黄色。内面は薄茶色に汚れが沈着する。外面の6割くらいには貝の付着はなく、内面にはまばらに貝殻がみられる。鉗目は11目一単位の底で途切れることなく4本が交差し、放射状に8条が入る。底面は静止糸切後ナデ調整される。片口は指幅2本分引き出される。8、9は吉岡Ⅱ期に比定できる。

8と9の所蔵者は同じで2017年の聞き取りによると「4～5年前に親戚から託された。引き掲げ地点は名立沖ではないか。」との話であった。

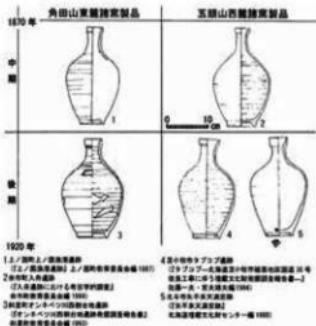
#### (6) 個人蔵資料（高見崎沖）（第3図10）

10は越中瀬戸焼広口壺で平成30(2018)年6月、糸魚川市鬼伏の高見崎沖水深約60mから引き掲げられた。口縁部に細かな欠けや胴部にヒビが入るがほぼ完形である。口径9.4cm、器高11.1cm、底径10.6cm。胴部上半に最大径(13.6cm)を持ち、頸部が窄まり口縁は直立する。口唇部には重ね焼きの融着痕が残る。底部には回転糸切り痕が見られる。回転方向は右方向である。全面に錆跡が掛けられ赤褐色を呈するが、火裏の表面は灰から灰黒色である。胎土は淡黄灰色でやや粗く石英砂から小砾が多く入り、器面にも目立つ。17世紀後半の生産とみられる。この高見崎沖では本例が3例目の越中瀬戸焼（広口）壺である〔寺崎ほか2014〕。

## 2 資料の考察

### (1) 焼酎德利

4は形状・釉調から越後産の焼酎德利と考えられる。越後産の焼酎德利については、窯跡・消費地の集成から生産・流通の実態に迫った研究があり、角田山東麓産製品（松郷屋焼など）と五頭山西麓産製品（緑岡焼など）の型式的分類と時期的変遷についての検討が行われている。両生産地に見られる差異として、口縁部突帯の幅や釉調の違いが挙げられている。角田山東麓産製品では口縁部突帯幅が1.8cmを下回るも



第4図 越後焼耐熱利の変遷  
(関根・木戸2018より転載・レイアウト改変)

西麓における焼酎耐熱利の生産は、旧笠置村の小林新次郎が慶應3（1867）年に開始したことが契機とされており【石黒1913】、以後、需要の高まりとともに当該地域における焼酎耐熱利の生産が拡大した。消費地における当該地域製品の増加傾向は、この生産拡大を受けた結果であることが明らかとなっている（関根・木戸前掲）。北方地域における両産地の比較を行う場合、口縁部突帯幅に伸長が見られる「後期」における五頭山西麓産製品の資料増加が影響するため、口縁部突帯幅のみを両産地の識別根拠とすることは難しい。そのため、産地同定のためには産地資料の収集が課題である。

ここで、産地→消費地への流通ルートについて検討を加える。焼酎耐熱利4について考えるならば、その揚陸海城は小木、沢崎鼻灯台沖である。そのため、仮に新潟湊から積み出されたものであれば産地→消費地（北方地域）の直線上には存在しない。産地が角田山東麓であれ五頭山西麓であれ、揚陸地点には疑問が生じる。当該海城の近世における肥前陶磁器回漕ルートについては、安藤正美氏によって「①越中伏木から今町→柏崎→出雲崎→新潟、②能登から小木→新潟、さらに③今町、柏崎→小木→新潟」の3バターンが挙げられており【安藤2014】、新潟→小木間の回漕ルートの存在や地廻り廻船等の役割を考慮に入れると、4は新潟湊から直接、北方地域へ向かうことがなかった個体である可能性を積極的に考えたい。今後、同種の資料が増加することに伴って、地廻り廻船を中心とした地域内流通ルートの復元に繋がることが期待できる。

## （2）珠洲焼の中世遺跡との比較

文化財保護法の対象となる新潟県内の遺跡は、13243か所あり（新潟県教育庁文化行政課資料2020年5月現在）、そのうち石仏や石塔類を除いた中世遺跡は2551か所が「新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カード」に登録されている。県内の中世遺跡からは、上越市仲田遺跡【加藤ほか2003】で集落跡の井戸から吉岡I期の珠洲焼が出土した。また、上越市清水田遺跡の井戸SE55から赤彩痕を留める吉岡I期の珠洲焼水注あるいは盞が出土した【佐藤ほか2015】。また、新潟市山木戸遺跡では12世紀後半から13世紀前半の集落から珠洲焼のI期の資料がまとめて出土した【新潟市1994】。この他、上越市伝至徳寺遺跡【鶴巻・水澤2003】、中条町下町・坊城遺跡【水澤2001】などからも少數ではあるが発見されている。このように12世紀後半を中心とした初期の珠洲焼製品が出土した遺跡がありつつも、以下に例を挙げるようにな地上の遺跡においては時期が下るにつれ珠洲焼の供給量が増加する傾向が窺える。

例えば12～16世紀と長い存続期間が明らかになっている船内市下町・坊城遺跡では、珠洲焼片口鉢の時期別点数を以下のように報告している。吉岡Ⅰ期22点、吉岡Ⅱ期21点、吉岡Ⅲ～Ⅳ前期39点、吉岡Ⅳ後期～Ⅵ期160点である。14世紀末に坊城館から江上館への機能移転が行われたことと連動して、吉岡Ⅳ後期以降の遺物は建物に伴わないしながらも、14世紀後半以降の珠洲焼供給量が増加している状況が窺える〔水澤2005〕。また水澤氏は、14世紀前半の建物（珠洲焼6点出土）と15世紀の溝（珠洲焼237点出土）を比較して、15世紀段階では「珠洲の量が格段に増えており、家財の充実を物語る」〔水澤前掲〕とする。

しかし、県内の海揚がり品に関しては、陸上とは異なるあり方が窺える。2014年時点の報告書に拠ると、県内で確認された珠洲焼109点のうち、吉岡Ⅰ期16点、Ⅱ期68点、Ⅲ期10点、Ⅳ期12点、Ⅴ期1点、Ⅵ期2点となる〔相羽2014〕。Ⅰ期とⅡ期で84点と珠洲焼の77%を占め、Ⅳ期以降が15点（14%）と少ない点が対照的である。点数の多い寺泊沖、名立沖を代表海域として限定して見ても、両海域とも確認点数40点の内、寺泊沖では28.5点<sup>5)</sup>（71%）、名立沖では26点（65%）が吉岡Ⅱ期に比定され<sup>6)</sup>、珠洲焼生産における早い段階の製品の出現率の高さが窺える。

陸上の遺跡では中世後期に存続する遺跡には14世紀以降も珠洲焼の供給は行われており、遺跡によつては増加する傾向が見られる中で、海揚がり品では吉岡Ⅳ期以降の遺物が際立つて少ないと特異性があると言わざるを得ない<sup>7)</sup>。

ここで、今回の新出資料を含め、揚陸海域との関連性について触れておきたい。今回の新出資料では、6は他の珠洲焼と同地点で引き揚げられたことが明らかになっている。2014年の報告時にも「狭い範囲で引き揚げられていることから一括性は高く、該期の沈船の可能性が強く示唆される」〔相羽2014〕とされたように、海揚がり品の帰属時期における偏重は、揚陸海域が限定的<sup>8)</sup>であることと合わせて考えなければならない。また、前回の報告書において検討した通り、各海域における珠洲焼に見られる加飾法は限定される傾向が窺える<sup>9)</sup>〔竹部2014〕。以上のことから、海揚がり品の珠洲焼について、揚陸海域及び揚陸海域毎の加飾法が限定され得る。先の帰属時期における特異性と合わせて、一括して海中に没した可能性が考えられ、要因としては沈船の存在が想起される。

### 3 結び

近年は新出資料が引き揚げされることもあるが、歴年の漁業活動によって海底地形は著しい変化を受けしており、仮に沈船が存在したとして、その状態は往時を保っているとは言い難い。新潟県の海底遺跡としては、県の埋蔵文化財包蔵地カードに掲げれば、長岡市「寺泊沖タラバ」、「順動丸」、出雲崎町「出雲崎沖」、柏崎沖「椎谷沖海底」、上越市「名立海底」の計5か所が登録されているが、その保存の在り方については今後の課題となっている。また現状では、吉岡Ⅰ期の資料がまとまって揚陸した栗島沖・栗島～佐渡沖や、繩文土器・弥生土器・須恵器を含む新潟地域（角田沖・間瀬沖・弥彦沖）が遺跡登録されていない。海揚がり品自体も、2014年時点で散逸してしまっていた遺物もあった。今後の資料増加に期待する一方、散逸を防ぐ方法も課題である。さらに海揚がり品の調査を継続したいと思う。

最後に、この報告に際し多くの方々や組織にご協力を賜った。深く感謝し御名前を留めたい。（敬称省略）

相羽重徳 磐谷光一 春日真実 鹿島昌也 加藤由美子 鹿取涉 九千房百合 久保田敏正

佐々木達夫 佐藤忠彦 滝川邦彦 竹内竹司 鶴田浩規 中島栄一 寺崎裕助 二宮正守 吉原耕一

潟東歴史民俗資料館 佐渡博物館

## 註

- 1) 竹部佑介（株）大石組、田海義正（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 2) 報文では「昭和元年」となっているが、正しくは昭和11年である。
- 3) ツノミナ鉛酢漁利は尾道の福田伊兵衛商店の製品である。研究紀要10号では大正7年に合併し、「尾道造酢」を設立とした。その後、同社から福田伊兵衛商店は削除には参加していないと指摘があった。この場を借りて訂正したい。
- 4) 吉岡氏の編年は「第三節 基準資料の検討と層年代」(p360 ~ 392)によると以下の通りとなる。I期は（若山莊成立）～1200年代、II期は13世紀第1四半期・II期13世紀第2四半期、III期は13世紀中葉～1270年代、IV期1280年～1310年代・IV期1320年～1350年代・IV期1360年～1370年代、V期1380年～1440年代、VI期1450年～1470年代、VII期は消費地に出現らず15世紀後半に珠洲窯は廃絶する。
- 5) 複数時期にまたがる個体を各時期に配分した結果、個体数には小数点が含まれる。
- 6) 名立沖では26点が吉岡II期に比定された。吉岡II期とした個体のうち、一部については吉岡III～VII期まで時期が下る可能性があるが、ここでは大勢に与える影響は少ないと判断できる。
- 7) 不論、遺物の時期別出土量は遺跡の存続期間によって異なる。例えば、新発田市住吉遺跡では、存続期間は珠洲焼生産の前半段階にある12世紀末～14世紀前半であり、吉岡II期6点、吉岡II～III期3点、吉岡III期6点、吉岡III～IV期7点、吉岡IV期5点が報告されている。合計27点であり、出土個体数が「30前後」とされているため、ほぼ当遺跡の傾向を掴める【高橋ほか2006】。上記の通り、遺跡単体では中世道路といえども、一概に吉岡IV・V・VI期の出土量が増加するとは言えない。しかしながら、県内の中世遺跡を概観すると、吉岡VII期以降の珠洲焼が減少する傾向にあるとも言えず、海揚がり品においては明らかに吉岡VII期以降の遺物量が減少傾向にあり、その対照的な状況がうかがえる。
- 8) ただし、掲陸海域の限定的な状況には、漁場の位置が大いに関係する。海揚がり品は、漁場に埋没していただけ揚陸する機会を得た。これまで新潟～寺泊～出雲崎沖、名立沖では水深約150～200mの大陸棚縁辺部に遺物が集中することが明らかになっている。この遺物集中域は元々「タラバ」と呼ばれる優れた漁場であった。遺物の掲陸する機会は必然的に高かったと言える。水深はえども、名立沖の甘エビ漁場水深600mからは珠洲焼水注（2014年報告）、珠洲焼叩き中窓（本稿6）、近代酢漁利（田海2019）が揚がっており、網に入る機会の多さが遺物量に繋がっている。これに対して、網に入る機会が少なかった海域においては、遺物の掲陸する機会が少なかったと言える。つまり、これまで明らかになっていないだけだ、例えば吉岡V・VI期の沈船が存在する可能性は否定できない。
- 9) 新発田市住吉遺跡では、吉岡II期の片口鉢の中に、内面に横位の備目文を加飾する個体が報告されている【高橋ほか前掲、報告69】。また、下町・坊城遺跡A地点では、吉岡II～VII期の片口鉢として、内面に横位の波状備目文を加飾する個体が報告されている【水澤1999、報告169】。2014年に報告したように、寺泊沖～弥彦沖ではII期の片口鉢に横位の備目文を施す一群が存在する【竹部2014】。これらの掲陸海域が、消費地と生産地の途上にある点は興味深い。

## 参考文献

- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する素描」『研究紀要』第4号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2014 「第IV章まとめ 2各時代の海揚がり品 D 中世」『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 安藤正美 2014 「第IV章まとめ 2各時代の海揚がり品 E 近世」『日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査』新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 石黒半斗 1913 「佐岡村誌」 並岡村
- 加藤 伸はか 2003 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子・小林ひろ子・竹部佑介 2018 「長岡・出雲崎地域で新たに確認された海揚がり品」『長岡市立科学博物館 研究報告』第53号 長岡市立科学博物館
- 金子拓男・高橋陽子 1977 「IV寺泊タラバ揚陸土器」「寺泊・出雲崎」新潟県文化財年報第16 新潟県教育委員会
- 鶴巣康志・水澤幸一 2003 「9至徳寺遺跡(至徳寺跡・至徳寺跡)」『上越市史叢書8 考古-中・近世資料-』上越市
- 佐藤友子はか 2015 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第251集 清水田遺跡」 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 閔 雅之 2000 「新潟県潟東村所蔵の考古資料整理報告—谷川忠壽美氏収集資料の調査記録ー」 潟東村教育委員会
- 閔根達人・木本奈央子 2018 「越後座敷耐熱利(「松前耐熱利」)の生産と流通」『中世陶磁器の考古学』第8巻

- 佐々木達夫編 雄山閣
- 高橋 保ほか 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 住吉遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 竹部佑介 2014 「第IV章まとめ3海揚がりの珠洲焼における加飾法」「日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査」 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 寺崎裕助ほか 2014 「日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査」 新潟県海揚がり陶磁器研究会
- 寺村光晴・久我 勇 1960 「寺泊乃おいたち 先史遺跡について」 寺泊町教育委員会
- 田海義正 2019 「新潟県名立沖海揚がり備後尾道の酢醤利」『研究紀要』第10号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸根与八郎 1991 「中世編第5章寺泊タラ場掲陸土器」『寺泊町史』資料編1 原始・古代・中世 寺泊町
- 新潟市 1994 「山木戸遺跡」『新潟市史 資料編1 原始古代中世』新潟市
- 橋本博文 2009 「新潟大学考古学研究室 2008年佐渡調査報告 8) 調査成果のまとめ 3. 弥生時代~古代」「佐渡・越後文化交流史研究」第9号 新潟大学大学院現代社会文化研究科・新潟大学人文学部プロジェクト佐渡・越後の文化交流史研究
- 水澤幸一 1999 「新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡Ⅲ~A地点の調査~」中条町埋蔵文化財調査報告第18集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2001 「新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡V」中条町埋蔵文化財調査報告第21集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2005 「新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡VI~D地点、坊城船の調査~」中条町埋蔵文化財調査報告 第33集 中条町教育委員会
- 室岡 博 1972 「名立沖海底遺跡」「頸城地方の海と海底・海浜遺跡」上越市立総合博物館教養選書第一篇 上越市立総合博物館
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

# 見附市本所出土丸木舟について

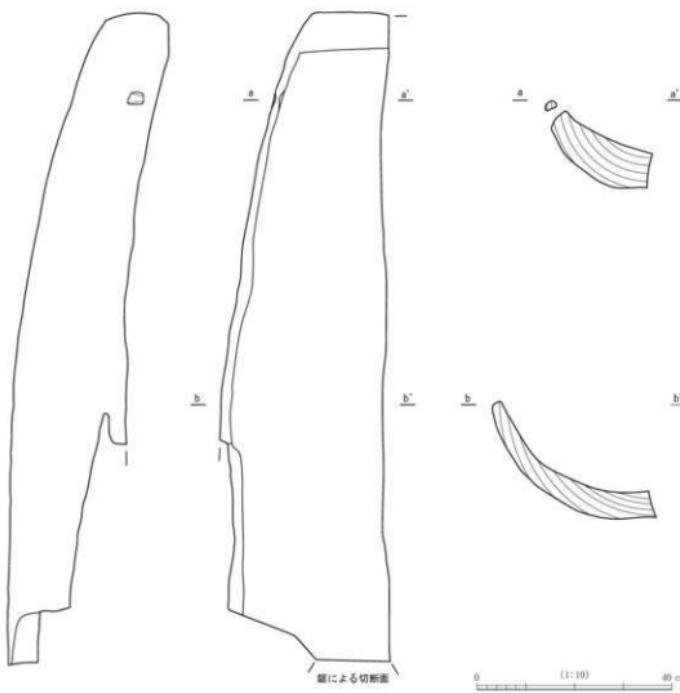
小野本 敦

## はじめに

本稿では、見附市本所で出土した丸木舟（以下、本資料と表記）の観察と図化を通して考古資料としての評価を行うとともに、見附市域の歴史における位置付けについて述べる。

## 1 発見の経緯と来歴

本資料は、1981年3月中旬に見附市本所1丁目2番地内（第4図）において下水整備工事中に発見され、



第1図 丸木舟実測図

7月21日付で新潟県文化行政課埋蔵文化財係に報告されている。その後は見附市教育委員会で保管され、長らく非公開であったが、2019年度のみつけ伝承館の企画展「刈谷田川の舟運と近世の流通」に関連資料として展示された際に筆者が確認し、市教委の御厚意により観察と図化を行った。

## 2 資料の観察

実測図を第1図に示す。便宜的に、残存する先端を船首、反対側（平面図下側）を中心側、舷側を左舷と呼称する。

船体は木目に沿って縦に割れている。現状は完全に水分が失われ、乾燥によるひび割れなど劣化が著しく、調整痕等は確認できない。樹種同定は行われていない。割れ目から左舷までの断面（b-b'）がほぼ円周の1/4の弧を描くことから、割れ線がほぼ船体の中心軸にあたるものと考えられる。資料の損耗の恐れがあるため、正位に据えて作図することはできなかった。このため断面（b-b'）をみると実際よりやや左に傾いている可能性がある。



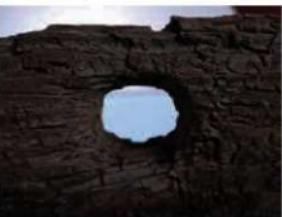
1 側面



2 内面



3 船首



4 船首付近侧面の孔（外側から）



5 鋸による切断面

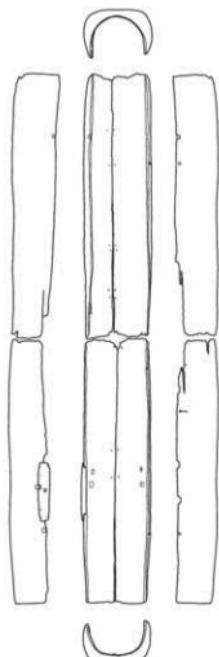
第2図 丸木舟写真

内外面にホゾ穴、チキリ穴などは確認できず、単材の丸木舟と考えられる。残存長は133cmを測る。船体の厚みは中央側の船底で5.5cmであり、船首に向けて徐々に増す。船底・舷側は船首に向かって緩やかに立ち上がる。船首の先端は平らで、上面にも平坦面を有する（第2図3）。船首付近の側面には1辺3cmの四角い孔が、外側が下方を向くように穿たれている（第2図4）。孔辺の左右は摩耗しており、特に船首側が顕著である。係留または曳船のための綱を掛けた孔と推定される。中央側の船底は鋸によって切断されている（第2図5）。

### 3 資料の評価

前近代の越後平野では、阿賀野川・信濃川の排水不良によって出現した無数の潟湖とそれを結ぶ網目状の小河川が物流の大動脈であった。そのため、喫水線の浅い丸木舟の需要が高く、縄文時代晚期から中世まで多くの出土例が知られる〔鶴巻2007〕。本資料は、信濃川流域では最も上流側での出土例である。

本資料の大きな特徴は鋸によって木目と直行する方向に分断されている点である。これは明らかに使用



1 実測図（縮尺1/50）



2 出土状況



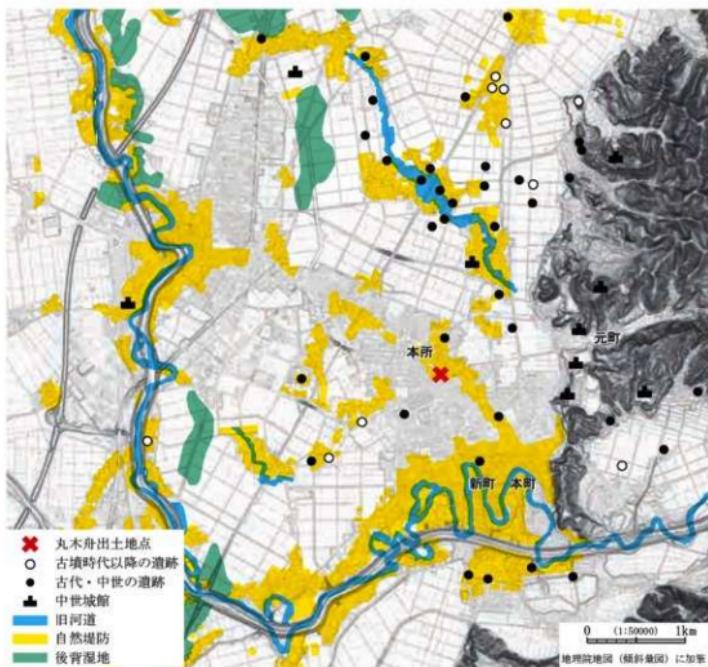
3 鋸による切断痕

第3図 石船戸東遺跡の丸木舟

時ではなく、解体時の痕跡である。単に丸木舟を廃棄したのであればこうした作業は不要であることから、船体中央部を再利用するために解体されたと推測される。よく知られたことだが、越後平野の古代～中世の丸木舟のはほとんどは井戸側に転用された状態で出土する。具体的には、第3図2のように分割した船体を筒状に組み合わせて井戸に据え付けるのだが、その際、不要となる船首・船尾は除去される。船首・船尾の切断には手斧が用いられる場合と、第3図3のように鋸が用いられる場合がある。こうした点を踏まえて本資料の形態を見ると、ちょうど井戸側転用時に不要となる、船底が緩やかに立ち上がり始める部分から船首までに相当することがわかる。以上から、本資料は丸木舟を井戸側に転用した際の余材の可能性が考えられる。丸木舟を井戸側に転用する事例は12～14世紀に多く、その後は見られなくなることから[鶴巻2007]、本資料の推定年代の下限もその頃に置くことができるだろう。なお、古代～中世の丸木舟は上述のような出土状況により、船首・船尾の構造が判明するものが少ないとからも、本資料は貴重な事例と言える。

#### 4 剣谷田川流域の景観と舟運

近年、阿賀野バイパス関連で中世遺跡の発掘調査が多く行われた阿賀野市域では、阿賀野川の旧河道（江



第4図 丸木舟の出土地点と周辺の環境

戸時代の百津潟)の縁辺に拠点的な遺跡が立地し、百津潟に注ぐ小河川の付近で丸木舟が出土するなど、「白河莊」の発展と内水面交通の関係が具体的に明らかになってきている〔小野本 2019〕。見附市域には、かつての刈谷田川河道に由来すると考えられる自然堤防が多く認められ(第4図)、白河莊の様相を参考にすれば、見附城跡などの立地する元町一帯を中心に刈谷田川水運の拠点として発展したことが類推できる。本資料はそれを物語る物証と言える。現時点では推測の域を出ないが、元町の西側に自然堤防が発達せず、現在まで水田として利用されていることからすれば、この範囲に百津潟のような潟湖が存在し、本所は潟湖をはさんだ元町の対岸に位置したとは考えられないだろうか。この当否はともかく、今後の調査により本所周辺と元町との関係が意識的に検討されることで、古代・中世の見附市域の景観がより鮮明となることが期待される。

#### 謝辞

資料調査に際し、安藤正美氏・増田一実氏・今井秀樹氏をはじめ見附市教育委員会の皆様に大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。

#### 引用・参考文献

- 安藤正美 2006「第VI章1 旧河川について」「見附市埋蔵文化財調査報告書 27 辛子田A遺跡・辛子田B遺跡」見附市教育委員会:111-115頁  
小野本敦 2019「第II章 白河莊の地理的環境と遺跡立地」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第279集 石船戸東遺跡」新潟県教育委員会・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団:9-13頁  
土田邦彦 1981「序編第1章 見附市の自然」「見附市史」上巻(1) 見附市史編集委員会:3-49頁  
鶴巻旗志 2007「新潟県における古代・中世の帆船について—オモキ造りによる川舟・潟舟の出現期をめぐってー」「新潟考古学談話会会報」33 新潟考古学談話会:1-28頁  
新潟県教育委員会・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019「新潟県埋蔵文化財調査報告書第279集 石船戸東遺跡」

#### 図版出典

- 第1図・第2図 筆者作成・撮影  
第3図 新潟県教育委員会・公益財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団〔2019〕を改変  
第4図 見附市の地形区分図(見附市教育委員会提供)、地理院地図、新潟県道路地図をもとに筆者作成



## 研究紀要

第 11 号

令和 2 年 12 月 11 日印刷 編集・発行 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
令和 2 年 12 月 11 日発行 〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93 番地 1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986  
印刷・製本 株式会社 ハイングラフ  
〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号  
電話 025 (233) 0321